
魔法少女リリカルなのは チート？当然だろう

Irisvia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは チート？当然だろう

【Nコード】

N5152M

【作者名】

Irisvia

【あらすじ】

ある日死んだ主人公は神様の前に？好きな作品に行ける？リリなのだろ。未練が残りまくっているので楽しみます！！原作介入？やりたいところだけ・・・なのに相手がよってくる・・・？主人公最強チート転生物だ！！

ブログ 「原作開始まで」(前書き)

実はミスで短編で一回作ってしまいました・・・

なのはマダーや性格違っ、 は俺の嫁などの理由で認められない方スイマセン。

そもそもテーマの文章が駄目駄目だ！という方もすいません。

それでもいいという心の深い方ありがとうございます。

感想や指摘があれば言っ下さい作者の糧になります。 未熟者ゆえに・・・

プロローグ 「原作開始まで」

原作介入、アニメや漫画のストーリーを自分の手で崩すための介入だ。

俺は今、真っ白な建物の中で目の前の靄のかかった存在に俺の今の状況、そして今から出来ることを聞いていた
「つまり、死んだら満足するまで遊んで魂をリフレッシュするということ？永遠に存在できるんだ？」

俺は目の前のよくわからない存在に語りかける。姿を認識できないのがすごく面白い。

「ふむ、儂の姿が人に見えんというのは実は凄いことなのだが、まあ構わんだろう。ではこの紙に行きたい世界とその世界での能力を考えろ。まあ、書ける能力は4つだからうまく考えろよ」

恐らく神なのであろうこいつの言う指示に従う。

神様が日本語？違うだろ？後で自分の能力の一つに加えるから後で説明。誰に？……………多分、読者神だ。

「りりなのかな？時期は初期より前で。」

何故かと言われれば生前の死ぬ前にアニメで最終話まで見ていた作品だからだ。

意外と細かく書ける。というか書くごとに必要項目増えてね？
年齢？……………なのはと同じ。生まれ……………地球、海鳴市。好きなキャラ……………この子かな？うん？好きな体型？スレンダー、あと貧乳だろ。

容姿とかは……………違和感があるのは嫌だな。俺の昔の姿で。名前はま

あ、神名^{かなな} カナエで。最近使ったオリシヨの名前だな。

能力……ステータス強制最大値。因みにステータスが最強ではなく、例えばHP60で今は3、でも能力使えば60に、て事。即死じゃなけりや死にやしねえ。次に『統一言語^{ゴドワード}』詳しくはらっきよで。神様御用達。

次に、道具作成。読んで字の如く。材料無しでも道具作成、知識なくても作成。もしかしたらこれが一番チートかも。

最後に才能限界突破。簡単に言えば鍛えれば鍛えるほど強くなる。鍛えてもどうにもならないものすら鍛えられる。ただし寿命を除く、人間を越える寿命は不可能らしい人外になれば平気らしいが。他はだいたいいいけるようだ。

「ん？1番下のこれは……言えがいいのか？……スタート。」

「お？」

気がついたら周りが住宅になっていた。

「……あつ、リンカーコアあるかどうかわからねえ……」

とりあえず金を作成……かな？住むところを確保せねば。

戸籍は、まあ……最初書いた紙が自動的に用意とも書いてあったしな。

「表札が神名、だと？」

周りを見てみると家の表札に神名と書いてある家があった。親切

すぎ…

「とりあえず、無印での介入は学校に留めるか。」

最初のストーリーは変えるとおかしくなりそうだ。

「あれ？」

声が聞こえて後ろを見ると高町なのはがいた。まだ冥王でも魔王でもないぞ？レイハもないみたいだし。

「やあ、こんばんは。高町なのはちゃん」

自然にフランクに、なるべく明るく話し掛ける。なぜ？なのはが暗いから。

「あ、はい…ご近所さんですよ？私、高町なのはつていいいます。」
おどおどしている。あれ？無印よりかなり前？見た感じ9歳じゃない感じだが…

「引越してきたんですか？」

…とりあえず無印前は確定。介入するのはしばらく後だから途中まではただの友達でいよう。

「そうだよ、神名カナエ。カナエでいいよ。なのはちゃん、もしかして一人？」

コクンと首を縦に振るなのは。可愛いじゃねえか…小さい子の動きは和みすぎて困る。

「お父さんは病院だし…」

自分の見た目を道路のミラーを見て確認。やはり同い年のようだ。

「じゃあ、一緒に遊ぼう」

「いいの！？」

なんか、頭の束ねている髪が動いたような気がする。

「いいよ、今は友達がいなくて寂しかったし…」

嘘ではないし何よりこの歳で一人は辛いと思う。

「ただし、明日からね。家は見ての通りここだから明日来てよ。夜

も遅いし」

何故か夜にこの世界にきたようだ。お陰でなのはには会えたが…
というか、え？なに、この時間まで一人でいたのか？

「うん！明日、遊びに来るね！」

突然ハイテンション、まあ裏表が無くていいか。

「じゃあね、なのはちゃん」

「うん！バイバイ、カナエちゃん！」

なるほど、警戒心がないわけだ。

「なのはちゃん。男だよ、俺。」

「ふえええ！？」

スツゴク驚かれた。まあ、よく間違えられていたから怒る気もないけど。

「道具作成」

言って目の前がゲームの画面のようになった。

「喋らなくちゃいけないのか…？とりあえず、フェニックスの尾とワープの杖を生産」

俺はなのはと別れた後、家に入りこれからの準備を進めようとして机の上に本が置かれていることに気付いた。

本の題名は“能力の使い方” ナメているのか？

「最後にデバイスを作らなくちゃな…レイピア型にしようかな…」

好きなのだ、レイピアが。題名は兎も角、中身はまともだった本を片手に能力を行使していく。

「もちろんインテリジェントデバイスだな。」

独り言にしか聞こえないような気もするが今は誰も見てないから良しとするか。

「作成」

その一言と同時に杖と尾羽と十字架が付いた銀の指輪が出て来た。

『主、私の名前と貴方の名前をお教えください。』

紳士的な男の声が聞こえる。統一言語便利ユニバーサルだな。聞こえている言葉は英語だが理解するときには日本語で直ぐさま変換されている。

「ああ、お前の名前はキャリアスロウだ。」

『キャリアスロウ、わかりました。意味は貫徹とでましたが…』

キャリアスロウのいう通り俺は俺の道をいく為に相棒となるデバイスの名前を貫徹、つまり最後まで己の信念を貫き通すという意味をつけた。

「俺の名前は神名カナエだ。共に来てくれるか？キャリアスロウ。」
『当然です、我が主。私の存在意義に賭けて主と共にあらんことをここに誓います。』

キャリアスロウが点滅して答える。つか指輪が点滅？

「バリアジャケットを展開してみるか…」

『わかりました、主。始めてもらって構いません。』

キャリアスロウを中心に光が溢れる。

「セットアップ」

『レディ』

光が意識を包み込んだ。

「つて、うわっ!？」

ガバツと倒れた体を起こす。何があった？

『主、申し訳ございません。主の魔力量ではどうやらバリアジャケツトの展開ができないようです』
なるほど、弱すぎと。

「じゃあ、簡単な魔法から教えてくれ。練習量は増やせば増やすほど強くなるし。」

『しかし、主。危険と判断した場合、止めさせてもらいます。』

ああ、そうかキャリアスロウは知らないんだった。

「大丈夫、希少技能だから」

『どのような…』

「体力回復、まあ努力するには最適かな？」

『了解しました。』

俺は無印の間はほぼ修業に時間をあてる気だ。A'sですらまともに参加する気はない。

『では』

ピンポーン

家のチャイムがなる、どうやらおでましのようだ。

「今日の練習はここまでだな。」

『了解です、主』

俺は庭から玄関に向かって歩いていく。家が3階建てで庭付きとわかって最初は驚いて変にテンションが上がったが今は寂しいだけだと気付いた。

ガチャ、と扉が開く音を聞きながら外を見る。

困った顔で笑みを浮かべているなのは、どうしたんだろう？

「お、おはよう。カナエ…くん。にやはは…」

どうやら間違えたのを未だに引きずっているようだ。

「うん、おはよう。なのはちゃん」

ニコリと笑う。となのはが自分の頭を見ていることに気付いた。

「どうかした？」

「う、ううん！き、綺麗な髪だな…って、昨日は夜だったから気付かなかったや」

………少し嬉しかったのは、俺が昔母親に言われていたことを思い出したからなのか。

「ありがとう、母さんにも褒められたのを思い出したや」

俺の髪は真つ黒の腰よりやや上にまでのばしたロングストレートだ。この髪と母似の顔でよく女と間違えられたものだ。

「そうなんだ、お母さんに…あれ？カナエくんお父さんとお母さんは？」

なのはが首を傾げて家を見る。

「うん、今は少し遠くに出ているんだ（ある意味本当）。だから今は俺一人。」

「え？そうなの？大丈夫…？」

そのなのはの優しさに感動した。というかやばい、涙出そう。

「うん、大丈夫。よくあるからね。」

曖昧な言葉で濁す。というか親いなくちゃ学校に行くの難しいんじゃない？

「じゃあ、遊びに行こうか？なのはちゃん」

俺は笑って少し沈んだ空気を取り払うように家から外に出た。

「うん！カナエくん、遊びに行こう！」

なのはが笑みを浮かべる。俺はその笑みに癒されながら公園に向かった。

それから数年経ち、なのはが小学三年生になった。俺は、なのはとは違う小学校で過ごしている。因みに近所なのでたまに遊んではいるが、交流はなのはが一人だった頃に比べると少ない。

『主、今日はデバイス無しでの飛行訓練を試してみよう』

最近キャリスロウが俺を虐めるようになった。確かにやろうと思えばできるが…しんどい。

「飛行はキャリスロウが手伝えばできるだろ？俺単体で飛ぶ意味がないだろ…」

そういえば最初の一年でやっとバリアジャケットを使えるくらいにリンカーコアが成長した。

「セットアップ」

『レディ』

キャリスロウが光を放つ、俺の着ていた服が黒いロングコートに変わる。他は長ズボンとシャツのような物、コートを解除するとアーマー、というかファイアーエムプレムのアイクのような感じでシャツにアーマーらしきものが付く。

因みにバリアジャケットはほぼ黒だけ、というか完全に髪の色も黒だから黒く

無いのは生身の部分のみ。

「キャリスロウ、今日は砲撃の練習だ。管理世界外に跳ぶぞ」
俺はワープの杖を掲げワープした。

『主、敵を確認。四時の方向です。』

ワープしたと同時に目標が現れる。この世界は砂漠がほとんどだ。俺は飛行魔法を使って宙に飛びキャリースロウの指示した方向を見る。

「サソリ…？」

ガチガチと足音を鳴らし砂を巻き上げるその姿は大きさ以外はサソリそのままだった。

ギチギチと音を立ててサソリの尾の先端に魔法陣が浮かぶ。

「つて魔法陣！？」

認識した途端レーザーと言っていいレベルの魔法が俺に向かって放たれた。

『Round Shield.』

俺は手を掲げてレーザーのような魔法一（以下レーザー）を前面のみ覆うバリアを展開して弾く。

「くっ…」

バリッ

バリアがひび割れる。俺の魔力では完全に防ぎきれないようだ。

「カートリッジ！」

『Reload.』

キャリースロウの鐳はりボルバー型のカートリッジになっている。ガシャガシャと二発分の薬莢が放出される。

「行くぞ！」

『Piercing Shoot.』

キャリースロウを突き出す。すると先から俺の魔力の色である灰色の光がレーザーのように放たれてサソリが放つレーザーを裂きな

がらサソリの尾を貫いた。

「キシヤアア」

叫び声のような音をたてるサソリ。俺はその隙にレイピアを上に掲げる。

「カートリッジ」

『Reload.』

六回、リボルバーが回転して薬莖を吐き出す。キャリースロウが多少熱暴走を起こして発熱しているがこの程度でどうにかなるくらい軟ではない。

「まともな教育を受けていないからな…残念ながら、容赦する気はない。俺の経験値になれ！」

『Stardust』

大量の魔力が頭上で収束する。すでに自分が本来持つ魔力を超えた量の魔力。荒れ狂う力、それを抑えるのは意志の力。まだ、全力ではないのに既に制御の外の力。

「砕けッ！」

指揮棒のようにレイピアを振ると灰色の魔力の塊が形を変え流星のような砲撃になって放たれる。

「ブレイカー！」

『Breaker.』

地上に注いだ光が膨張し破裂し音が消えた。それだけではない。強大な砲撃によってその空間の空気が一時的に消滅、あたりから空気を吸い付くし凄まじい勢いで爆災地に引き寄せられる。

後には何も残らなかった。

「……………強すぎた？」

『主、やりすぎだと思つのですが。』

家に戻った後の反省会、修行の後には必ずやるようになってい

「うーん、爆撃された後みたいだったもんなあ…使い所はなさそうだ…」

あの技の弱点発覚。多分、威力を重視し過ぎた結果だろう。
人がいるところでは絶対に使えない。

『そうですね。あと、もう何種類かの技を作ったと聞いているのですが…』

「ああ、だけど…今日はなんか精神的に疲れた。もう寝るよ…」
ソロソロとベッドに入り横になる。

『誰か！助けてください！』

（ああ、やつと本編スタートか）

開幕のベルは鳴ったが、まだ出番は遠い。

「おやすみ」

誰に言うでもなく呟いて部屋の電気を消した。

ブログ 「原作開始まで」(後書き)

イリスヴィア「作者コーナー」

カナエ「ええ！？いきなりテンション低っ！？」

イリスヴィア「ふ・・・誰も知らない苦難があったのさ」

カナエ「そうですか・・・最初なので次回予告だけでも・・・」

イリスヴィア「ふ、次回予告「結末」」

カナエ「違う！！違うからね！？ねえ、例え8回目の後書きでも頑張ろうよ！！」

イリスヴィア「・・・このバカPCが！！」

カナエ「ええ！？キレた！？・・・端から意味がわからない・・・」

イリスヴィア「貴様にはわかるまい(r y」

カナエ「次までにちゃんと戻ってくださいね？次回『ヒロインとの偶然の出会い』は主人公の性。』です。ヨロシクー！！」

第1話 「ヒロインとの偶然の出会い」は主人公の性。」（前書き）

はい、一話目です。

前話がアニメ前から開始まで今回が完全にアニメの時系列に入っています。

では、第一話開始です。

第1話 「ヒロインとの偶然の出会いとは主人公の性。」

ユーノの念話をスルーした翌日。道具作成で作り出したデバイスの製作方法の説明書を見る。

中には製作の他に整備の仕方まで載っているのでキャリアスロウの整備にも使える。

『主、学校は…？』

「キャリアスロウ、俺にとってはこっちの方が大切。」

そついいながら、一からパーツを組んでデバイスを作っていく。

「でも、まあ。これ、完成するのにどのくらいかかるかな…一ヶ月ちよい？」

『ですね』

カチャカチャ。

ペラッ…………ペラッ

静かな時間が流れる。

「ん？…うわ、わかんねえ…」

ふとした原因で息詰まることしばしば、こういうときは外に出て気分転換。

『主？』

立ち上がった俺をキャリアスロウが疑問に思ったようだ。

「ちよつと気分転換。翠屋行ってくる。」

『わかりました。行ってらっしゃいませ主。』

キャリアスロウに見送られながら俺は家をでる。

キャリアスロウは持ち歩かない、もしなのは…かユーノに会ったら“おはなし”になる可能性がある。

「ん？」

翠屋に入ると先客がいるようだ。背格好から見て同い年だろうか？

「あ、カナエくん。いらっしやい」

ニッコリと笑みを浮かべる女性。それで前のお客さんも俺に気付いたようだ。というか…この金髪って…フェイト！？

「お久しぶりです。桃子さん。今日はシュークリームを買いに来ました。」

内心の動揺を隠して話す。フェイトは無表情でこちらを見ている。よし、話しかけようか。

「こんにちは、君は？」

桃子さんは多分フェイトが頼んだであろう物を箱に詰める。

なんで本編開始の日にフェイトが翠屋に居るんだろう？

「え？…私？」

驚いた表情で俺を見るフェイト。まさか喋りかけられるとは思っていなかったのだろう。

「そ、俺は神名 カナエ。」

とりあえず自己紹介。手早くマルチタスクを使って思考の片隅で道具作成を起動する。

「私…は………… フェイト・テストロッサ。」

………… ドンマイ、なのは…名前、簡単に聞けたや…

「そう、じゃあフェイトちゃん。学校は？」

「それを言うならカナエくんもでしょ？」

桃子さんの問いに苦笑いを浮かべる。

「あはは、いつもの発作です。ちよつとした精密機械を部品から組み立てたくなつて。でも、大丈夫ですよ？それ以外もちゃんとしてます。」

俺は度々学校を休んでいる。理由は簡単で他にやることがあるからだ。しかし、それを言うわけにはいけないのでごまかしながらシ

ヨークリームを箱に詰めている桃子さんにお金を渡す。

「はい、いつも通り三つね。学校サボるのはダメよ?」

「…善処します。疑うなら発信器でもどうですか?」

そんな流れるような会話についていけない Fayette。なんだろう、一匹で置いて行かれた子犬を見ているようだ。

「神名「カナエでいいよ。」…カナエ、私は学校には行っていない。」
やっと答えを返せてホッと一息つく Fayette。されど、俺は逃がさない。

「そつか。引越してきたの?」
Feyt が固まって動けなくなる。会話に慣れてないのが凄く痛々し。ダメだ。今ここで Fayette を助けると未来がわからなくなる。

「う…ん。アルフと一緒に」
今度は俺が固まる番だった。ああ、そつか。Feyt はアホの子かあ

「そ、そうなんだ…アルフさんってお姉さんか何か?」

その時、俺は気が動転していたのである。決してこの後の出来事は予想できる範囲の事ではなかったのだが。

「うっん、アルフは使い魔」

時間停止再び。まさか Fayette がここまでアホの子だったとは…

「か、カナエくん、はい。ヨークリーム」

ヨークリームの入った箱を差し出しながら桃子さんも苦笑いを浮かべながら俺を見ていた。

会話の内容がぶっ飛んでいるからだろうな。

「……………ありがとうございます」

質問をし続けていたからか未だに場に留まってくれている Feyt

ト。…よし。

「フェイトちゃん、今日は無理だけど…今度一緒に遊ぼう。」

笑ってフェイトを見る。どうやら予想外だったらしく、完璧に固まって…いや、もしかして念話でアルフと話してねえか？

「ごめんなさい。私、用事があるから…帰るね。」

クツ…獣め、フェイトの幸せとか言いながら閉ざさせてるじゃねえか。

「そうなんだ…」

強引だがこうなつては仕方ない。

「じゃあ、別れの挨拶。」

フェイトの前で跪づいてフェイトの手を取る。我ながら恥ずかしいぜ！

「え？」

突然の行動に対応出来ないフェイト。この勝負…俺の…勝ちだ！なんの勝負かはわからないが。

「では、お嬢様^{レディ}また会う時まで…」

手の甲にキスをして立ち上がる。桃子さんが何か言っているが自分でも気にしている余裕はない。…撤退さ！

しかし、俺は致命的なミスをしていることにしばらくして気付くのだが、それはまた後で。

『なるほど、で？マーカーは付けられたのですか？』

帰ってきてキャリアスロウに相談した俺にキャリアスロウはそれだけを聞いてきた。

こいつ、俺より冷静だ。

「ああ、キスの時に。これで一応バツタリ遭遇はもうないと思う。」
ちなみに道具作成の時に作った物だ。

なのはにも付けているが未だに気付かれていない。商品名？……

…時空管理局御用達の発信器とだけ言っておこう。

『しかし、主。帰ってきてすぐにするのがデバイス弄りですか。Sとはいえ油断したら格下に負けますよ?』

つまり修行しろと?

「あのね、キャリアスロウが遠距離に対応しきれないからだろ?」

『それをいうなら主、何故レイピアなのですか?主が得意なのは…』

「レイピアカッコイイじゃん」

それ以外に何の理由があるのだろう。武器は自分が好きな物を使いたいだろ?

『主は普段、本当に子供なのかと思うほどの考え方をもっているようです、たまに歳相応に戻りますね…』

キャリアスロウに呆れられている気がする…

「どうとでも言う方がいい」

俺の半ば自棄とも取られかねない言葉はしかし、部屋の壁に吸い込まれ一切返ってこなかった。

何故なら…

ピンポン

と、何故かとても嫌な予感しかしない音が聞こえたからだ。

「…はーい!」

仕方ないのでドアを開けに行く。俺のミスは既に取り返しつかないものだどドアを開いて悟った。

「こんにちはーカナエくんお母さんにお店でカナエくんが知らない女の子にキスしてたって聞いたんだけど…ホントかなー?」

何故か傷だらけのフェレットもどきを抱えながら家の前になのが立っていた。

というか一息で長々とよく言えたな…

「な、なのはちゃん?」

「ちよつとだけ…お話しようか?」

「ぎゃああああ!!」

「はっ!?なんで俺はこんな所に!?!」

周りを見るとやけに清潔感のある壁、病院?

「カナエくん、ありがとう。おかげでこの子を届けられたよ。」
「やはは、と独特な笑いかたをする魔王。」

「なのはに“おはなし”されたんでしょ?よく戻って来られたわね。」

「そういう金髪の少女、あれ?まさかアリサ?

「あ、アリサちゃん…多分状況わかってないよ?カナエくん」
横にはすずか…オーケー状況はなんとなくわかった。

「ええと、アリサちゃん、だっけ?」

とりあえず名前のわからないフリをする。にしても翠屋の出来事が“おはなし”フラグだったとは…なのは、恐ろしい子…

「アリサでいいわよ…ちゃん、なんてむず痒い…」

顔を赤くしながら軽く照れている様子のアリサ。うむ、心の中ではアリサなんだけどな?

「ダメだよ、カナエくんは昔から遊んでいた私もまだちゃん付けするんだから」

「なんだろう、なのはがまた不機嫌に…」

「あつ…私は…」

「すずかが気付いたように声をあげる。まあ、少しは関わるかな?

「すずかちゃんでしょ?有名だからね、君の“一族”は」

「えっ!?!」

今ここで俺を問いただすことができないすずかは言葉に詰まった。

なのはとアリサがいるからな…

「さっきのフェレット大丈夫だった？」

「うん、少し休んだらもう動けるようになるって」

なのはが嬉しそうに答える。すずかは顔を青くしてるな…

「大丈夫？すずかちゃん、顔色悪いけど…」

「あ…うわ、すずか、顔真っ青よ？早く帰って休まなきゃ！」

アリサが焦ったように声をあげる。よし、予想通りの展開だ。

「…なのはちゃん、男は俺一人だから俺がすずかちゃんを送ってくよ。」

「送り狼にならなきゃいいけど…」

アリサがボソリと誰にも聞き取れないような声量で呟く。甘いな、俺の聴力は日々鍛えられているのだ。

「アリサちゃんって耳年増なんだ。」

「なっ！？」

顔を赤く染めるアリサ。うん、可愛いけどな。

「い、いいよ…そんなことしなくても家の人を呼べば…」

「そうね…私が話してくるわ」

そういつてアリサが携帯をもって外に出ていった。

「ほらすずかちゃん、横になってたら？」

「うん、寝てたほうがいいよ！すずかちゃん。」

なのはと俺ですずかをソファ―に運ぶ。

「夜、君の家に行くから」

すずかの耳元で囁く。

「ひゃう！？」

耳元すぎたらしい、顔赤いなあ…ちなみに深い意味はない。用事があるから行くだけだ。

「ねえ、カナエくん。おはなし、いいよね？」

後ろが怖いなあ…

すずかが黒い長い車（名前は自分が庶民のため自重。畜生、嫉妬じゃないぞ！？）に運ばれていった為、俺達は解散することになった。

しかし、俺はすずかの家…つまり月村、夜の一族と呼ばれる人間たちが住む家に向かっていた。

「キャリアスロウ、生体反応は避けていくから感知頼むぞ」
『了解です。主。』

一度家に戻ってキャリアスロウを持ってきたこと以外はさつきと変わらない。つまりバリアジャケットは着ていない。俺の目的を達するには必要な事でもある。

「よっ…とっ！」

3メートルくらいの塀をジャンプで飛び越える。

才能限界無制限に意外な副作用。まず、筋肉が落ちない。次に一般生活の時にすらトレーニングをしているのと同じ効果が出てしまっている。

力を抑えるのは簡単なんだが。

見張りのようなものはいない、とはいえ監視装置はあるのだろうか…

「関係ないか」

走る。ワイドエアサーチで監視装置の場所を探りながら見つからないように走っていく。

「見つけた…！」

ワイドエリアサーチですずかを捉える。見つけた以上素早く行動する。余計な事は一切しない。

ワープの杖を使って、すずかの背後にワープする。

「やあ、すずかちゃん。こんばんは」

「え!？」

突然、背後から声をかけられたすずかは驚いて少し飛び上がった。

「……………駄目だろう、子供がこんな時間まで起きてちゃ」

俺は驚いて動けないでいるすずかの頭を撫でる。

「え?えつ!？」

すずかはドアと窓を見る。どうやら一応両方を見ていたらしい。

「種明かしは後だね。今は他の人が来るまで待たせてもらうよ。…すずかちゃん?」

すずかの顔は既に真っ赤に染まっている。頭を撫でられて恥ずかしかったか?

「い、いえ…その…」

「夜の一族」

待つてもなにも起こらないと思ったので核心をつく、すずかの顔は見ていて可哀相になるくらい青くなっていた。

「大丈夫、なのはちゃんとアリサちゃんは知らないから。教えるつもりもない、ただ…」

「ただ…その言葉の続きは私にも教えてくれないかしら?」

ドアを開けながら忍とメイド二人が入ってくる。

「ええ、いるのがわかっていたから話し始めたんです。」

ニヤリと口を歪めて忍を見る。

「まずこれは、高町の家の人とも関係があります。俺はたまたまですが、未来を知ることができました。ただし、それは確実な未来ではなく可能性の未来。ただそれはすずかちゃんにとってもなのはちゃんにとっても辛い未来です。だから俺は夜の一族を利用して二人

を救う方法を考えました。今、俺はまともな小学校には行けていません。それは、俺が孤児だから、という理由があります。違う小学校にいたのでは皆の事を護ることができません。」

一気に言い切ってここでいったん止まる。

「いろいろ言いたいことはあるけど…利用ってどうするの？」

忍の純粋な殺気を受け流しながら笑みを浮かべる。

「俺を一族に加え、皆を見守るために聖祥小学校に加えてください。」

この時見た忍の表情は一生忘れられないかもしれない。

「…はあ…途中まで言っていた言葉に比べて要求の程度がそんなに低いなんて…」

忍は目を逸らしたため息を吐いた。次の瞬間視線と敵意を同時にこちらに向けた。

「お姉ちゃんっ!？」

すずかの悲痛な叫び声。同時にドアが吹き飛び、影が俺に向かって凄まじい速度で迫る。

「ま、遅いんだけどね。」

突っ込んで来たメイド服の女性の背後に回るり淡い灰色の光で3人を捉え周囲に縄のような物を張る。

バインドを発動させ、すずかを含めた3人を拘束する。約2秒、バインドまでの時間…まだ誰も何が起きたか意識がついていないようだ。

「夜の一族という大層な名前の割に…弱いな」

言い捨てて忍を見下ろす。

「っ…」

涙目の上目で睨み付ける忍。その視線にゾクゾクとしてしまう。
ヤバイな…

「クツ…止めてください、その目…虐めたくなる」

自分がSだとは思ってなかった。

「な、何をしたの…?」

「魔法…信じられないですか?」

『Standby ready』

キヤリースロウがレイピアに変わる。忍は驚いた表情を見せたがすぐにまた鋭い眼光でこちらを睨む。つかアニメより怖え…

「どうする気?」

「だから、俺を家系に加えてくれって言っただ…」

しまった女性相手に少し乱暴な口調になってしまった。

「……………本当に?」

「本当に…しかたないなあ…すずかちゃん」

呆然とこちらを眺めるすずか、どうやらまだ思考が追い付いていないらしい。

「なのはちゃんも魔導…魔法使いだよ。」

「え?」

さて、切り札の3つ目を切ってしまった。どうしようか…

「ちなみなのはちゃんは俺の事は知らない、だから黙っていてくれないかな?彼女は今、ある事件に巻き込まれているから…それに彼女の能力は高い、だから多分このまま魔法を使い続けるだろうから…危険がないとも言えない。」

忍は黙って俺の話しを聞いている。黙って聞いているということとは検討はしているのだろう。

「そして君達、月村家は高町家と仲がいい。だからこそ君達も危険が伴う。…俺はなのはちゃんやアリサちゃん、すずかちゃんも大切な友達だと思っているから…」

キヤリースロウを再び指輪に戻して両手を頭の後ろにまわす。そしてバインドも解く。

「強引な手段を使ってごめんなさい。ですが、俺はすずかちゃんやなのはちゃんを守ってやりたいんです。なのはちゃんは初めての友達、すずかちゃんなのはちゃんの大切な友達だし俺自身も今日会ったばかりだけど…いい友達になれると思っています。」

純粋な気持ちも告げる。正直にいうとすずかはもともと好きなキヤラのうちの一人だ。

「……………はあ、どうせ…力付くでもやれたんでしょう？そうなら私達にこれ以上の抵抗は無駄だわ…でも家族って事はすずかの許婚…かしらね？」

凄まじい態度の変化の早さに俺も一瞬呆氣にとられた。

「……………えっ!？」

すずかが一瞬で顔を真っ赤に染める。忍はそれを見て笑みを浮かべた…悪い感じの。そしてアイコンタクトを俺に送る。

(…ついでこれなら認めてあげる。)
と言っている気がした。

(仕方ないか…)

「大丈夫、痛くないから…」

すずかの頬を撫でてゆつくり笑みを浮かべる。

「う…あ」

可哀相なくらい真っ赤なすずか。そろそろネタバレを…

「あら、すずか。あなた意味がわかるの？」

忍の一言はとどめの一撃だったようです。すずかは何も言わずに部屋の外に走って出ていった。

「…どうする？許婚。」

「きょうだいで…」

そうして俺は月村カナエと名乗ることになった。

「カナエ、聖祥の転入手続きができたわ。」

忍は柔らかい笑みを浮かべる。数日でよくここまで柔らかくなるものだ。やはり原作キャラの殆どは基本、お人よしなのだろう。

「ありがとうござ…痛っ」

デコピン一発、つか痛い…

「家族内で敬語禁止…すずかの呼び方はともかく、敬語はおかしいわ」

忍は変わらず笑みを浮かべている。少し恥ずかしくなってくる。

「ありがとう…忍姉さん。」

クソウ、多分赤くなっているんだろうな。

「はい、よく出来ました。ほら、すずかに服を見せてきなさい。多分、はしゃぎ回るから。」

忍の言う通りなのだろう。歳の近い兄が嬉しいのかすずかは俺にベツタリだ。

「わかったよ………ところで忍姉さん、仲がいいのはいいことだけど…少し声を抑えて。」

忍の顔が赤く染まる。よし、やられっぱなしは俺らしくないからな。

ボタンとドアを閉め撤収。さすがエロゲキャラだ。毎日とは恐れ

入る。

「…暖かいなあ、本当に…」

年上の家族の居なかった俺にはとても嬉しい事だ。

「さて、早くしないとすずかに怒られる。」

俺は袖で顔を拭い恐らく出ていたであろう涙を拭った。

すずかの部屋の前に立ちドアをノックする。

「すずかちゃん、入るよ？」

「はい！」

ドアを開い「待つて！今の私じゃ…」た。

「あ…」

すずかは着替えている途中だったようだ。

「…………ごめん…ファリンちゃん、借りてくね？」

笑みを浮かべていたファリンが悪戯したのだろうと思い腕を引っ張ってすずかの部屋を出ていく。

「で？何がしたかったんだ？」

「痛い痛い痛いっ！」

今、アイアンクローでファリンにおはなししています。

「いや、やっぱこういうアクシデントは必要かなってえ痛いったいいたっ！」

ちなみに握力は普段のトレーニング（普通に物を持ったりしているだけ）で石くらいなら握り潰せる。人間の頭ならもっと簡単だ。

「カナエ様、それを私に譲って頂けませんか？」

ノエルさん登場、なぜさん付けか？怖いから。多分、月村家で1番。

「了解」

顔面蒼白なファリン、ご愁傷様ということ。

「きゃああああ！助けてえ！」

ファリンは悲鳴とともにノエルさんに引きずられていった。

「お兄ちゃん、今のファリン？」

そっぴいながらすずかが部屋から出てくる。

「あ、ああ…うん。そうだね。」

なんとも答えにくい質問だ。

「あ、お兄ちゃんも制服だ。」

とても嬉しそうに俺を見るすずか、今日からはなのはたちと顔を合わせる事にもなる。

「そっぴえば…やっぱりなのはちゃんたちには俺のことまだ内緒？」
珍しくすずかが言い始めた事でもある。

「うん、びつくりさせたくて」

すずかの笑み、俺はなんとなく頭を撫でてしまう。

「きつと驚くよ。特になのはちゃん、友達だしね。」

すると微妙に不機嫌な顔を見せるすずか。理由はわからないでもない。

「大丈夫、すずかちゃんは大切な妹だしね」

さらに優しくすずかの頭を撫でてみる。

「…うう…早く行かないと遅刻しちゃう」

すずかはパタパタと足音を鳴らしながら走っていく。

すずかが角を曲がったときすずかは顔だけを俺に向けて立ち止まった。

「お兄ちゃん！制服似合ってるよ！」

すずかは恥ずかしそうに顔を押さえながら走っていく。

“撫でる”の効果は高いようだ。

「急がなきゃ遅刻か…」

車通いで遅刻するのはマズイか。さっさと車に乗ろう。

まだなのはには直接は関わらない。関わるタイミングは結果のみ、
なのはには悪いがP・T事件を解決するのは一人で頼むことにする。
闇の書も関係する気はない。

「下手に動いたら知っている未来すら変わりそうだ…」

外に出ると落ち着きのない様子でさすがが自宅の車（普段はアリ
サの車で行くようだ）で待っていた。

「忍姉さん、行ってきます！」

返事は期待していないがとりあえず言っておく。

「いつてらっしゃい」

このささやかな幸福は絶対に護りたいものだ。

「皆さん転校生を紹介します。」

女の先生が先に教室に入っていて俺は後で入るらしい。

「入ってください。」

教室を開けると見たことがある顔が3つ…金って恐ろしい。

「あれ！？」

「ふえ！？」

アリサとなのはのわかりやすい反応を横目に教壇の横に立つ。

「月村カナエです。なのはちゃん、アリサちゃん。聞きたいことが
あるのはわかるから後でね？」

月村という名前に反応したのかなのはとアリサはジッとすずかを
見ている。

「名前の通りすずかちゃんの兄で 『ええええ！？』 ど
うかしました？」

クラス内の叫び声に思わず首を傾げる。するとじぶんの長い黒髪が…ああナルホド。道理で若干男の子の声のほうが多いはずだ。

「正真正銘の男ですよ？ね、すずかちゃん。」

見るとすずかの顔が真っ赤に染まっていた。

「うん…」

先生が啞然としている。ああ、ナルホド。（このフレーズが気に入った）

「先生、浴場でたまたま会っただけですよ。先生が思っているような事は今の所考えていません。」

「い、今の所？」

慌てまくっている先生を尻目に俺は教室の中を見回す。

「席は…なのはちゃんの隣が空いてますね。そこでいいですか？」

「え、ええ」

真っ直ぐと席に向かいなのはの横に座る。

「や、なのはちゃん。今日から同じクラスだね？」

楽しくなりそうだ…前世と違って。

「よっしゃ！カナエ！勝負だ！」

同じクラスの男子が50M走で勝負を挑んできた。

返り討ちにしてやろう。

「そ…んな…一秒差？」

この学校は全体的にレベルが高い。とはいえ俺はチートなんだが。ん、もつと速くなると思うぜ？諦めなかったら。」

口調の差は性別の差。俺は万人に好かれたいとは思っていないし。ただ、努力は嫌いじゃない。前世ではできなかったから。

「ビツクリした。アリサちゃん並じゃない？」

そりゃ…前世もあるしチートだから。

「あはは…頭を使ったり体を動かすのは好きだから。」

もしかしたら前世の反動かもしれないが………どうしたのだろう？

今日は前世の事をよく思い出す。

『主、ハイエンドが目覚めました。』

キャリアスロウからの念話は新しい相棒が完成したとの報告だった。

放課後、集まっているなのは達に近づいてすずかに話しかける。

「すずかちゃん、完成したみたいだから俺一人で帰るね。」

ちなみに月村家と学校はけっこう離れている。歩いて帰るのは至難だが、最近ワープの杖の原理を理解しワープ覚えた。といっても自己解釈だが、要するに自分を魔力に変換し念話のように送り向こうで再構築すればいい。

でもこれってステータス回復が使えてやっと思えるからやっぱり何か違うかも…

あと服はステータスの装備に入るようで一緒に回復してくれる。

「うん、次はお願いね？」

すずかは笑みを浮かべてアリサやなのはと一緒に車に乗り込む。

「じゃあね、アリサちゃん、なのはちゃん。」

車が見えなくなってから人目に付かない裏路地に移動する。

「誰もいないな。」

周りを見て誰もいないことを確認する。

淡い灰色の魔力に体が溶けていき裏路地から凄まじい速度で月村家に飛んでいった。

今度から新しい相棒のテストだ。

第1話 「ヒロインとの偶然の出会い」は主人公の性。」（後書き）

カナエ「なぜずかずかちゃん？」

イリスヴィア「好きなキャラだからに決まってるじゃないかw」

カナエ「……夜の一族設定でトラハだけじゃ……」

イリスヴィア「あつはつは、気にしない。だって無理やり理屈付けるにはちょうどいい設定だったし」

カナエ「…ああ…こいつ殺したい」

イリスヴィア「男と女に対して口調が違いすぎるお前に言われたくない」

カナエ「理由があるんだよ」

イリスヴィア「ところで男の娘」

カナエ「…含みがあるいいかただけど…なんだ？」

イリスヴィア「声は？」

カナエ「…高いよ…男に比べると」

イリスヴィア「式みたい」

カナエ「…らっきょ？」

イリスヴィア「イエス、両儀式」

カナエ「言われてみれば…」

イリスヴィア「次回、「新たなパートナー。イレギュラーの介入。」です。」

カナエ「取られた!？」

第1話終了時オリキャラ（状況がかなり違うキャラ含め）設定（前書き）

オリキャラや性格変化（作者視点）を起こしている原作キャラの設定です。

ツッコミどころがあれば指摘お願いします。

第1話終了時オリキャラ（状況がかなり違うキャラ含め）設定

神名 カナエ（カンナ カナエ） 月村 カナエ（ツキムラ カナエ）

男 現在9歳 身長124cm

黒髪黒目とある意味日本人らしいが黒髪は腰より少し上くらいのロングになっており日本人ではあるが男の子ではなく男の娘に見える。顔のつくりは優しく少し年上のように見えなおかつ何事に対しても慌てなさそうな顔。つまり少し女よりの中世的な美形。シネ

戦闘中は少しテンションがハイになり若干目つきが悪くなって男に見えるようになる。

声も男性にしては少し高く『空の境界』の両儀 式（CV坂本 真綾）の声に似ている。

1話の時点でSクラスの魔導師になっている。

使うのはアームドデバイスの『キャリアスロウ』。

得意なのは収束と放射、ただし放射は最大出力が凄まじいだけで制御はあまり得意ではない。なのである意味収束のみとも言える。

キャリアスロウの指導のもといろいろな技能を高めている。

希少技能

『ステータス回復』

ゲームのチートコードによるステータス回復に似ている。自分の現在の限界状態のステータスまで瞬時に回復する。

『統一言語』

『空の境界』で玄霧 皐月が使っていた能力。ただし、カナエは玄霧のような使い方はせず単純に言語を理解しやすくするために使っている。

『道具作成』

自分が思い浮かべた代物を理解しなくても作れる能力。ただし元の設定（キャリアスロウはデバイスという設定を元にしてフェニックス

スの尾やワープの杖はゲームを元に）が存在している場合のもの以外は作れない。ただし、その世界に既にあるものは作れる。

『才能限界突破』

人間としての才能を超える能力、とはいっても成長スピードは緩やかでつまるところ格闘のセンスを格闘選手並みにしようとしたら同じ位の訓練をしなくてはならない。

ただ、日常生活によつて鍛えられる筋力に関しては副作用である能力が落ちないことから凄まじい速度で鍛えられている。

性格は女に優しく男には普通に気に入らないヤツはぶっ殺すなのである意味普通な人

前世での享年27歳 意外とつらいことがあったらしい。最終的に居た家族は妹だけである。

月村すずか

原作と違ってカナエが兄になったため性格が壊れているかも現在カナエになにかを作ってもらっている様子。

キャリースロウ

剣型のアームドデバイス。注意して欲しいのはレイピア型ではないということ。

かなり高性能なAIをつんでいて性能は高いが遠距離は苦手。実際に斬ることもできる。

声は執事長のように渋い感じの声『ガンダムSEEDのバルドフェルドの中の人』（CV置鮎龍太郎）みたいな感じ

神

神様。説明以上。

これ以降出ることはないだろう。

第1話終了時オリキャラ（状況がかなり違うキャラ含め）設定（後書き）

カナエ「なに？このチート」

イリスヴィア「さあ…？まあ、いいじゃん。ちなみにあれだぜ？キヤラ設定は新キヤラが複数人増えることに増やしていくぜ？その話の後に。だから序盤はキヤラ設定多くなるかもな」

カナエ「そうか…ところで俺の過去のつらいことって…」

イリスヴィア「い、一応考えてるからな！？」

こちらもキヤリースロウの説明を訂正。アームドでした。

第2話 「新たなパートナー、イレギュラーの介入。」（前書き）

更新頻度はまばらです今回は書置きがあったので。

では第2話始まりまーす。

第2話 「新たなパートナー、イレギュラーの介入。」

キャリアスロウの完成宣言から二日。月村家に作ってもらった研究室（忍姉さんはノリノリだった）で新しい相棒のチェックを行っていた。

『カナエ様』

左手に付けた黒い腕輪、ハイエンドが綺麗な女の声で念話を使う。
「ん、動作不良無しだ。今日から実戦だな。」

『了解しました。カナエ様。』

『主、検索完了。ついでに妹君の方は7割完成です。』

嬉しいことにキャリアスロウは最近、俺の行動を読んで動いて（？）くれている。

「ハイエンド、セットアップ」

「Standby ready」

ハイエンドが黒い腕輪の姿から黒い銃身のハンドガンのような形に変わる。レイピア型のキャリアスロウは完全に接近戦型に切り替えてハンドガン型のハイエンドを遠距離に使うことにしたのだ。

「いくか」

体が溶ける。次の瞬間には金の草原が視界に入った。

「で、いきなり背後に敵と」

背後を見ずにハイエンドを向けてただの魔力弾で後ろにいる物を撃ち抜く。

「うわっ、ライオン牛？」

顔がライオンで体が牛のような（一番形が似ているのであって微妙に違う。）生物の背中に穴が開いている。これは口からイッたな。それにしても…

「いっぱいいるなあ…」

うじゃうじゃというライオン牛がこちらを見ている。

「ハイエンド、バーストモード」

『了解しました。』

ハイエンドの形がハンドガンから大口径のライフルに形が変わる。

『Burst mode full shot.』

灰色の光がハイエンドの銃身に収束しハイエンドのカートリッジが4発薬莢として吐き出される。

「殲滅する。」

上に向けてハイエンドの銃口を向けてトリガーを引く。

『Rainy ray.』

上空に魔法陣が展開される。その魔方陣にハイエンドで放った魔力が直撃する。

「グオオオオ」

ライオン牛の咆哮、そして一斉に襲い掛かってくる。しかし…既に遅い。

「フオール・アンド・ジエノサイド」

上空にある魔法陣が光る。それと同時に…

輝きが辺りを覆った。

『やりすぎです…主。』
キャリースロウの言う通りだ…

「うーん、今度は魔法陣で制御したから平気かなって思ったんだけど…相手が脆かったってわけでもないし…」

自分の半径3メートル以内は未だに金の草原のままだ。地形が完全に変わったわけでも無い。が…

「敵を認識して降り注いだまではいいけど…地面まで刳れたら意味ないよな…」

金の草原の所々に小隕石が墜ちたように地面が刳れていた。

『カナエ様、問題点は私の方で解決しておきます。なるほどキャリースロウが言っていた制御が苦手とはこれの事だったんですね。非殺傷でやっても死人がでそうです。』

作られて数日だとは思えないほど饒舌なハイエンドの言葉に少し落ち込む。魔力を増やす事に集中しすぎて制御が下手になったようだ。

「やっと見つけた。」

「!？」

背中に激痛が走る。激痛を感じた一瞬後、自分の背中が刳れている事に気付いた。内臓なかが見えるくらいやられたようだ。

「治してあげようか？」

少女の声。どこかで聞いたことがあるような…？

「冗談、じゃ…ねえ…」

ステータス回復を発動させる。まるで最初から怪我がなかったかのように体の痛みが消えた。

『カナエ様…それは…？』

『主！？』

どうやらデバイス達に隠すことはできなくなったようだ。

「これが俺の疲労回復の正体…強制的に自分のステータスを正常に戻す力だ。」

説明しつつ立ち上がり背後からの襲撃者を見た。

「な…フェイト…？」

クスクスと白いドレスのようなバリアジャケットを着た金髪の少女がそこに立っていた。

「…じゃないな」

冷静に判断すれば顔がフェイトに似ているだけで幼い雰囲気を受ける。というか幼い…？

「あら？ふふ…姿が変わっただけでわからなくなっちゃうなんて…私の…に失格です。」

最後の方は聞き取れなかったが彼女は俺の事を知っているようだ。

「4歳差ですね？よかった、それだけしか変わらないならぎりぎり範囲内ですね？兄様」

ふと、記憶に 雑音が

「っ！？待て、その顔…アリシア・テストロッサ？」

「大正解、でも…大ハズレ…ですっ」

手元から糸のような物が伸び…

「鞭！？くそっ！」

ハイエンドを放ち鞭を“銃弾”で弾く。

「実弾？…さすがです兄様。デバイスに実弾を仕込むなんて」

雑音、雑音。ノイズが、頭に、そうだ。あれは、いつかの…

「ちっ、ウルサイ！」

キャリースロウを構え、少女に浮遊魔法を使って飛び込む。

「ああ…ソレで私を貫くのですか…とても、魅惑的ですが…っ」

妖艶な笑みを浮かべる少女に近付いて胸部に突きを放つ。

「ガッ！？」

再び背後に激痛、どうやら鞭が背中に回って俺に一撃を入れたようだ。

「あう…はあ…ん、その苦痛の表情、とても可愛いです…兄様。」

もう一度、ステータス回復。回復と同時にキャリースロウで近づいていた少女の首を貫く。

「ん、ヒュッ……………」

少女はなんの抵抗もなく首を貫かれた。しかし、表情は愉悦…快楽を感じている…？

一歩、少女が足を踏み出した。

ボタボタと血飛沫が飛び散る。

「正気か！？」

キャリースロウを抜き取ろうとした瞬間に少女は刀身を素手で掴んだ。

ザッ

さらに一步。顔を近づける。

「あ……？」

その顔を近づける様子が誰かとダブる。

口が動く。空気が振動しないソレは音には届かないが……

『なぜ？私を置いて逝ったのですか？』

「……………あ」

名を思いだす。それは自分のたった一人の家族……名前は……

「こ……ころ……心？」

「今度、こそ大正、解。キス……したかつ……た……のに……」

心は首に刺さったキャリースロウを抜いていく。

「ふふ……」

心の手から淡い緑色の光が出る。その手を自分の首に持っていく。

「やっと会えた……兄様、酷いです。私を忘れてしまうなんて。」

「忘れていたわけじゃ無い……心、ここにいて……いうことはまさか……」

心はアリシアの姿で笑みを浮かべる。どこか、昔の面影を残したまま。

「はい、兄様の居ない世界に興味はないもの。」

正直にいうと少しこの娘が怖い。

「だからって、簡単に……」

「自殺なんて私には条件次第では息をするより簡単です。私は兄様の為ならなんでもしましょう。」

心はとてもいい笑みでとても怖いことをいう。

「…なんで攻撃を？」

「兄様が私を置いて逝ってしまった罰です。」

心が頬を膨らませてこちらを上目遣いで見る。可愛いけど過激過ぎる。前世では猫を被っていた？それとも治す手段があったから？どちらにせよ俺の妹はなのは以上に魔王の資質がありそうだ。

「なぜ、アリシア？」

「…借りているだけです。今、私は……ええと…ここ何処でしょうか？…とにかく私は今兄様に会うことができません。プレシア・テストロツサのところには複製を置いてきたので問題ありません。元々アリシアが死体であったので気付くことはないでしょう。」

手を合わせながらニコニコと笑みを浮かべる。

「…色々言いたいことはあるけど…道に迷ってる？」

「……………」

笑顔のまま固まる心。少し冷や汗をかいている。

「兄様の魔力を感じたので追跡させたのです。私自身は兄様のいう通り道に迷いましたが…」

「…とうかなんで俺の魔力ってわかった？」

「……………勘？」

それで本当に合っているのだから恐ろしい。

「さっき四歳差って言ったけど心は五歳なのか？」

「はい。どうやら兄様がこちらに来たと同時に生まれたようです。前世と同じ年の差ですね。」

心にはセンサーでもついているのだろうか？

「…そのアリシアは…」

「蘇らせてしまつて構いませんよ。」

俺の先を読んだ発言。しかし、死者の蘇生が出来るのかといえは微妙だ。

自分達が既に転生を体験している以上魂が戻つてこない場合も想定できる

「…私が。こちらに来たのは私が死んで葬式をしてからの筈です。

恐らく、肉体が残っている間は魂があのだ世にいくことはないと思います。」

「…試せば早いか、心は地球だよな？」

「はい、兄様。海鳴にいるようです。ただ、正確な場所は…」

「探すよ。例えばどこにいても。やっと一緒にいることができるんだ

…」

「兄様…」

思えば生前23年間、心と歩いた事もなかった。いや、歩けなかった。この世界に来て初めて歩くという行為ができたのだ。やらなくちゃいけないことが多くて感動している間も無かつたけど。

「では、約束もしていただけたことですし、先に戻らせていただきます。」

心が目を閉じるとアリシアの体は崩れ落ちた。

「さて…！？」

アリシアのバリアジャケットが消えた。それはいい。けどなぜに裸！？

「くっ、とりあえずフェニックスの尾を…」

アリシアの体にフェニックスの尾を乗せる。

『主、その尾は…』

「試し、だけど…魂と完全な肉体。そして死後間もない体。」

プレシアのアリシアを保存していた培養液のような物。それのお

かげか僅かだが体温も残っている。

『カナエ様。凄まじい魔力がその尾から…!』
フェニックスの尾がアリシアの体に溶ける。

どうやら問題なく発動してくれたようだ。

「う…うん…」

アリシアが身じろぎをする。

「服…おはよう、アリシアちゃん。」

道具作成で少し大きめの服を作成してアリシアに被せる。

「ん?…お兄ちゃん、だあれ?」

少し眠たそうに欠伸をしながら俺を見るアリシア。

「月村カナエっていうんだ。一応説明したいんだけど…服を着てくれないか?」

「うん…」

アリシアはノロノロと立ち上がり服を着始める。

『カナエ様! 見てはいけません!』

ハイエンドに注意を受けてアリシアから視線を逸らす。

『キャリースロウもです!』

『ぬ?』

どうやらキャリースロウも見ていたようだ。さすがは女性型AIだ。目敏い。

「ありがとう、ハイエンドがいなかったらアリシアに失礼だったかな?」

『そうですね。いくらカナエ様であろうところいうときは言わせていただきます。』

「あの…?」

背後から声がかかる。振り向きたいがどうなっているかわからないため振り向けない。

『大丈夫ですよ。カナエ様。』

ハイエンドが許可したので振り返る。

「どうしたの？」

「お母さんはどこ？」

プレシア・テストロッサか…

「…最初に君はどうなっていたか理解できる？」

「あ…そうだ…！私、死んでいたんじゃない？」

「わかるんだ。で、今からお母さんに会わせてあげようって言いた
いんだけどね。君のお母さん、犯罪行為をしているんだ。」

アリシアは驚きの表情を浮かべた。

「…なん…で？」

「君を生き返らせるためだよ。」

残酷な方法だが、1番確実に事実を伝えることができるようにし
なくてはいけない。

「え？じゃあもう大丈夫じゃ」

「あと不治の病だしね…君のクローンなんかも作ってる。」

まず助からないし罪状のオンパレードだ。

「なにより、すごい酷い事をしているよ？」

「え？」

「この子フェイトちゃんっていうんだけど…自分がクローンだって
知らない。だから今はプレシアに何を言われても堪えられるし…壊
れてもいない。でもね？君が戻れば…壊れるよ？それにプレシアは
君を復活させたら多分、フェイトちゃんを捨てる。」

『カナエ様…言い過ぎでは…？』

「いいや、これくらい言わなきゃいけない。俺はね、いい子には幸
せになって欲しいんだ。君は人一人を絶望の淵に追いやる気？」

アリシアに辛い思いをさせるのはわかっているが、アレの傍に^{プレシア}戻

したところで確実に嫌な事しか起きないのだ。

「俺にはプレシアが君を幸せにできるとは思えない。だって、心が壊れたらそれはもう人としての一步を踏み違えているから。」

そう、自分の父親がそうだった。母が死んでから文字通り人が変わった。

「それでもまだ、希望が欲しいのなら…時が来るまで見守ろう。」
アリシアの為にプレシアのしたことは早めに受け入れて貰う。

「うん、わかった。お母さんが悪い人なら…私も…っ!？」
いいかけていた言葉を遮ってアリシアを抱きしめる。

「わりきるな。納得がいかないことには抗い、考えるんだ。前の言葉を覆すみたいだけど…君がプレシアの死を望んじゃいけない。多分、俺がいう通りになると思うけど…その時は俺を怨んでくれてかまわない。ただ、絶対に考えをとめちゃいけない。後になって後悔するなんてこと…いくらでもある。君みたいに幼い子が、そんな大人な考えを今からしていると…碌なことにならない。」

「う…う…あ」

アリシアの肩が震える。プレシアを救う気はない。一度狂って戻れる人間はまずいない。

プレシアは目的はまともだったが、手段を誤ったのだ。

「ごめん。アリシアちゃん。」

今はただ…沢山泣いて心を整えてもらおう。

S i d e ???

「さて…魔力の使い方もわかってきたし、そろそろ原作ブレイクするか？ネクロ。」

『はい、ご主人様。』

幼い感じの女の子の声が返ってくる。にしても、初め聞いたときは驚いた。

「アルと同じ声とは…」

『んう？どうかしましたか？ご主人様。』

「いや、これも世界の修正なのかなって。」

俺の言葉に答えられる人間はこの世界にはほとんど居ないだろう。デバイス、名前がネクロノミコンだからといって安易に『デモンベイン』のアル・アジフの声なんて…笑い話にもほどがある。

「まずは温泉にいかないとな」

今日、月村家でフェイト嬢となのは嬢の対決が始まったのを見た。ならば温泉になるはずだ。

『温泉…ですか？ポワポワ？』

「ああ、そうだ。しばらくは帰らずに見張るか。次の話まで…」勝手に話を進めないでくれないか？」何！？」

体を灰色の縄のようなもので縛られる。バインド！？

「…まさか、他に転生者が居るなんてな…けど、作戦会議は小さい声でしたほうがいいよ？」

背後からの声に背筋が凍る。こいつ、転生者…！

『ご、ご主人様…このバインド、恐ろしく固いです…』

「力技で押しとお…」

瞬間、景色が変わった。

「な…？」

空間転移？ここは何処だ？

数秒周りを見渡すと背後に再び気配が出た。

「あんまり地球で騒がれると、どこの誰が反応するかわからないかな。」

チャキ、と何かを構える音がする。

「くっ！！バインド解除！！」

膨大な魔力を流し込み強制的にバインドを外す。

『ウエポン、“オクスタン・ランチャー”“参式斬艦刀”装備！』

ネクロの声と同時に右手にスーパードロボット大戦に出てくるヴァイスリッターの持つオクスタン・ランチャーと参式斬艦刀が現れた。

『ご主人様、来ます！！』

アリシアが抱きついて泣いている時に突然、家に敷いていた結界がなのはとフェイト以外の気配を捉えた。

さっきまで、月村家で二人が戦っていたのは知っていたが3人目となると黙ってられない。

「まずは温泉にいかないとな」

次の展開を知っているようだ。つまり、転生者か。

『温泉…ですか？ポワポワ？』

「ああ、そうだ。しばらくは帰らずに見張るか。次の話まで…」

「勝手に話を進めないでくれないか？」

本のデバイスとの会話に割り込みすぎさまバインドで赤いロング
コートの少年を縛る。

「何!？」

バインドで縛られて身動きがとれない少年に対して少し緊張を解
く。

「…まさか、他に転生者が居るなんてな…けど、作戦会議は小さい
声でしたほうがいいよ？」

あまりに丸聞こえだったので一瞬声をかけるのをためらいかけた
くらいだ。

『ご、ご主人様…このバインド、恐ろしく固いです…』

「力技で押しとお…」

瞬間、凄まじい魔力を感じすぎさまワープの杖で別の世界に送っ
た。

「ごめん、アリシアちゃん。急に転移なんかしてちよつと危ないけ
ど、ここで待っていてくれる？」

「うん。大丈夫。ここで待ってる。」

両腕を胸の前にもってきてぐつと腕に力を入れ俺を見るアリシア。
しまった、少し信用されすぎたか?…ちゃんと色々教えるのは後で
いいか。

一応アリシアの周りに結界を張る。これで強力な魔導師が出ない
限り大丈夫だろう。

「行くぞ。」

ワープの杖を使ってさっきの転生者の後を追う。

「あんまり地球で騒がれると、どこの誰が反応するかわからないか
らな。」

ハイエンドを転生者に向ける。

「くっ！！バインド解除！！」

膨大な魔力に思わず一瞬気をとられてしまう。

『ウェポン、“オクスタン・ランチャー”“参式斬艦刀”装備！』

本のデバイスの声と同時に赤コートの少年の手には長い砲身のライフルと日本刀が握られていた。

『ご主人様、来ます！！』

銀髪の紅目。思いつきり厨二病な感じの容姿だし『ブラックキャット』のトレインと顔が似ていることにも一瞬驚いて動きを止めてしまった。致命的な隙が生まれる。

「女！？」

だが、動きが止まったのは相手も同じようて本のデバイスのいった言葉は無意味なものとなった。

「ハイエンド、シュート！」

構えていたハイエンドからなんの術式も組み込んでいない魔力を相手に向かって放つ。ちなみに非殺傷だ。

「オクスタン・ランチャー、シュート！」

相手はコンマ数秒で反応し俺が撃った魔力弾をライフルで撃ち落す。

魔力弾は本物の弾丸並みの速度なんだけどなあ…

『カナエ様！第2射来ます！！』

どうやら連射していたようだ。というより、なんていう射撃テクニク！！

『Round shield.』

キャリースロウがすばやくシールドを張る。ていうか、射撃戦じや負ける？

考えているうちに3射、4射と…あれ？こいつ、もしかして…

「キャリアスロウ、ラウンドシールド維持。ハイエンド、スフィア・シユート！」

『Sphere shoot!』

俺の周りに灰色の球体が4つ現れ相手に向かって飛んでいく。

「誘導弾…!!」

少年はライフルをスフィア・シユートに向けて放ち、迎撃する。

「読めた。お前、ライフルからしか弾を撃てないな？」

レイピアとなったキャリアスロウで少年に斬りかかる。

「斬られてたまるか…!!」

日本刀でレイピアを受けられてさらに弾かれる。

どうやら接近戦の方も強いようだ。

『ご主人様!!…“ガン・スレイヴ”発射!!』

周囲にビットのようなものが浮かぶ。

「まんま、ビットかよ!!コピーロボットとかも出せそうだな!？」

空中に飛び上がり発射されるマシンガンのような魔力弾を避け続ける。

「ちっ、煙幕で逃げるか…」

攻撃を避けながら考え事をしたその瞬間…

「オクスタン・ランチャー!シユート!!」

「しまっ…!!」

S i d e ? ? ?

「オクスタン・ランチャー！シュート！！」

彼女が空中に飛び上がってガン・スレイヴの弾を避け続けているときに、一瞬できた隙をオクスタン・ランチャーで狙い撃った。

「しまっ…！？」

直撃コース、恐らくバリアも間に合うまい。

ドン、という短い爆発音と舞う煙。

「煙！？」

いくら威力があるからといっても煙など起こるはずがない。つまり…

『S o n i c m o v e !』

「ハアッ！！」

背後からの剣戟、俺はすぐに振り向いて参式斬艦刀で受け止める。

「え？」

よく見ると、少女の鼻が赤い。

「あれ？もう気付かれたか…そうだよ、コピーロボット。で、本物は…」

「ハイエンド、バーストモード！」

少女がいつの間にか遙か遠くの空中でライフルを構え、こちらに照準を合わせている。

『B u r s t m o d e s n i p p i n g s h o t .』

離れて狙撃モード、どうやらデバイスが照準をしているらしい。

「オクスタン・ランチャー！シュート！」

「は？」

完全な予想外、少なく見積もって3kmあるこの距離をなんの照準も無しに撃ってくるとは誰も思わないだろう。

『カナエ様！迎撃できません！回避を！』

「クッ！！」

体を逸らす。しかし、避けきれずにハイエンドを持っていた腕に当たってしまう。

「（この腕で射撃戦は無理…）仕方ないか…！」

距離をとった方法と同じくワープして少年の背後に回る。

コピーロボットはビットのようなものにやられていたようだ。

「俺のデバイス、返してもらっぞ！」

「な、どうやって後ろに！？」

キャリアスロウはコピーロボットの残骸から俺の方に飛んできた。

『主、第2ラウンドです。』

「キャリアスロウ、セカンドモード！」

キャリアスロウがレイピア型から片刃のフルシオン型になり一番手元に近い峰の部分にリボルバー型のカートリッジがついている状態に変わった。

「行くぞ！！」

フルシオンのような剣になったキャリアスロウを振る。

「ッ！？突然、速く！？」

相手が日本刀でガードしているがその間を縫って攻撃を加えてい

く。

距離を詰める。拳で殴りあうような距離においても俺はキャリアスロウを振り続ける。

『っ！“オクスタン・ランチャー” 武装解除“バルザイの偃月刀” 装備！』

相手のデバイスの判断か少年のライフルが半円の刀に変わった。

「ハハッ！2本になったら追いつけるとでもっ？」

さらに速く、相手も剣を振ろうとしているが力が入る前に剣を振って相手に剣を振らせない。

「クッ！？」

弾く、相手の2本の剣を上弾いた。そして隙だらけの胴体に…

「紫電一閃！！」

魔力を纏ったキャリアスロウの薙ぎ払いが少年の腹部に当たった。

Side ????

「く…痛っ…」

どうやら気絶したようだ。最後の1撃は見事に当たってしまった。

「や…やあ…大丈夫？」

さっきまで戦っていた少女が恐る恐るといった表情でこちらの様子を伺う。

「ああ…にしても…君、転生者なんだろ？なんで攻撃を？」

「なぜだろうか？というか、女の子がなぜこんな一世界へ魔法少女リリカルなのは」に居るのか気になった。腐か？腐なのか？

「あ、あはは…なのはちゃんと長く接しすぎたようで…」

ああ…つまりはOHANASHIか…

「で？なんで止めようと…」

「先がわからなくなるのは危険なので」

「言われてから気付く。そうだ、運よく修正が入るとも限らないのだ。」

「危な…あと少しで色々変わるところだったかも…」

「もしかしたら、なのは嬢がプレシアにやられていたかも知れないのか…」

「わかってくれたなら良いです…ええと…」

「式神キヨスケって名前だ。」

自己紹介して少女に握手を求める。すると少女はニヤリと不気味な笑みを浮かべた。

「はい。私は月村カナエっていいます。戦いの間は少しテンションが上がってしまうようで…」

少し照れくさそうに笑みを浮かべる様子はヒロインたちにも劣らない可愛さがあった。

「はは、そうみたいだな。口調があまりに違う。」

「そうですね。…ところであなたの好きなキャラは誰ですか？」

「ん？…一応、フェイトとシグナムだ。」

なぜ、そんなことを聞くんだろう。

「では、どうやって私の転生先に？」

「ああ…俺が誰か他に転生者がいるところに転生するように願ったから。」

どうせなら他にいたほうが面白い気がしたのだ。

「へえ…他にはどのような能力が？」

カナエ嬢が純真な顔で俺を見つめる。近い…近いって…！！

「あ…ああ…ええと…まず、俺が見たアニメの世界で使われていた技術の知識…」

「ということは、他にも色々再現できるんですね？」

「そうだな…次にロボアニメの武器をデバイスとして出せる能力を持ったデバイス『ネクロノミコン』の所持。」

カナエ嬢は顔を近づけたまま、うんうんと頷いている。

「最後に無限の魔力。」

「そうですか…では原作に介入は…？」

先が読めなくなるならなるべくしないほうが良いだろう。

「私はStriker'sからが良いと思っっているんですけど…」

「なんで…？」

しないほうがいいのでは…？

「簡単です。そこが私が知っている最後の知識だからです。それまでの事件に介入してしまっただけは知っているが故にイレギュラーへの対応が遅れそうですね。だから、後のわからない最後の知識まではおとなしくしています。」

ああ…言われて見ればそうだ…駄目だ。こんな可愛い子が近くに居たら思考が鈍る…！

「私に協力していただけますか？」

「あ…ああ…」

「では、こちらにサインを…大丈夫です。もし、無意識に原作ブレイクをしそうになったらビリってくるだけですから。」

…それで避けられるのならすぐくすばらしい。

俺はペンを持ってサインを書く。

「では、契約完了です。…疲れた。」

「疲れた。もう封印を解いて良いぞ」

契約の書には強制が^{キアス}かかっており逆らうとビリビリくる。正直耐えれたものじゃない。

『主、ネクロノミコンの封印を解除しました。』

『にしても、カナエ様。完全に女の子でしたね。』

演技くらい誰でも出来ると思うが…

「にしても、あんた馬鹿か？」

「え？」

どうやらまだ少し呆けているようだ。

「俺は男だよ。」

「あ…しまった！容姿変更！！」

「コラ」

後頭部を思いつきり蹴る。

勝手に人の容姿を偽者と決め付けないで欲しい。

「容姿変更はしてないよ。年齢は戻ったけど…将来も完全に女顔だったしな。」

「…マジでそんな人類いたのか」

リアルoｒzを見せてくれるキョウスケ。

「そんなことより。これ。」

キヨウスケに書類を見せる。

「な…なんじゃこれ…!？」

「簡単に言くと俺の指示に従えていうギアスがかかる誓約書。大丈夫。Striker's までだから」

つまり、それまでキヨウスケは俺の命令で動くことになるのだ。

『すみません。ご主人様…私…つかまっています…』

「いいや…俺のミスだ。すまない…」

なんだか互いを慰めあっている二人。

「俺はすずかの家にいるから。見た感じ同い年だし俺に会いに来てって言ったら通して貰えるようにしとくから、なにかあつたら来ても良いぞ。」

そういつて俺はワープの杖を使ってこの2人を北海道に送った。

「アリシアも待ってるし…戻るか。」

さて…アリシアの説明はどうしよう…？

第2話 「新たなパートナー、イレギュラーの介入。」（後書き）

カナエ「急にオリキャラ率が増えたな・・・」

イリスヴィア「大丈夫。要望がない限りこれ以上増えないよ。」

心『兄様あゝ!!』

カナエ「心!!?」

心『ここはどこですか?!?』

カナエ「わからないよ...」

キョウスケ「というかお前、かなり鬼畜だよな?」

カナエ「利用できるものは利用しないと。」

アリシア「お兄さん?」

カナエ「うん?」

アリシア「キチクって?」

キョウスケ「純粋な目がイタイ」

イリスヴィア「一応今回ちょっとだけわかったカナエの過去だけど・
・それ以上になぞが増えたかも・・・」

カナエ「考えているんだろうな？」

イリスヴィア「も、もちろんさ。でももうチヨイ先で・・・」

キヨウスケ「そんなことより、俺北海道！？」

アリシア「え？これ読むの？次回第3話『3人目の妹、進化するはずか』・・・これでいいの？」

イリスヴィア「うん。いいこだね」

キヨウスケ「俺は無視か！？」

カナエ「というか、なんだこのタイトル・・・」

あと、キヨウスケの武器の名前を間違えていました。オクスタンラ
イフルではなくてオクスタン・ランチャーだそうです。

第2話終了時設定。（前書き）

なぜ細かく設定をするか…それは読んでいるうちに昔の設定を自分が忘れないようにするため…っ

アリシアの情報求むです。

第2話終了時設定。

式神 キョウスケ（シキカミ キョウスケ）

男 現在9歳 身長139cm

銀髪紅目だがこれは容姿設定によるもので『ブラックキャット』のトレイン・ハートネットを容姿のベースにしているようだ。

温和だがバトルマニアという謎の性格。声は『アイシールド21』の小早川瀬那（CV入野自由）に似た感じ。

魔力は能力のおかげで無限。

使うのはインテリジェントとユニゾンの複合型デバイス『ネクロノミコン』。

希少技能

『無尽蔵の魔力』

魔力が無尽蔵になる。

他の願いは希少技能には入らないと思ったので省略。

前世での享年29歳 パティシエ志望だった模様。

心（こころ）

女 現在5歳 身長不明。

出てきたには出てきたが容姿はわからない状態。

性格は兄至上主義の病んでるちゃん。

でも一応物事を正しく判断することも出来る。

声は『Fate/stay night』の間桐 桜（CV下屋則子）に似た感じ。

希少技能

『特殊能力再現』

見たことのある特殊能力を再現することができる。

『憑依』

魂の宿らないものに乗りうつることができる。ただし、関節のないものやそもそも動くように出来ていないものに憑依しても動かせない。

『生体再現』

生物の肉体の完全なコピーを生み出したりあえて曖昧な再現で人形のようなものを生み出したりできる能力。作れるものは同じものが元でも可愛いものから気持ち悪いものなどさままだ。

前世での享年23歳 兄が死んだベッドの上を血まみれにしている笑顔で逝っていたらしい（巡回の看護婦談）そのとき使われたものはナイフのようで頸動脈をバツサリと。切れ口から見てなんの躊躇いもなかったものと思われる（検死の人談）

アリシア・テストロッサ

女 年齢5歳 身長：???（調べたがわからなかった）
今のところフェイトと瓜二つ。

ただ利き手が違ったり性格が違ったり色々差がでてる。
なんだか知らないうちに蘇ってお母さんが悪人になってたかわいそうな子。

ハイエンド

銃型のインテリジェントデバイス。こちらも銃型であってハンドガン型ではない。

AIが作られ方が普通であるので少し高いくらい。遠距離専用。実弾も発射できてしまう（一応禁止されている）。

AIは女性型で声は『Fate/stay night』からセイバー（CV川澄綾子）に似た感じの声。

ネクロノミコン

本型のインテリフエントとユニゾンの複合型。ただし、本は第一形態。

ある意味武器庫的な能力だが自らの能力で出せるのでAIのレベルの高さもつかえる。

AIは少女型で声は『デモンベイン』からアル・アジフ（CV 神田理江）に似た声。

月村 カナエ

ほとんど設定に変わりはないがハイエンドを手に入れ過去が少しわかった。

ちなみに、相手の強さによって、自分の能力使用に意識的に制限をかけている。（特に統一言語）

第2話終了時設定。(後書き)

カナエ「また設定か・・・」

イリスヴィア「今回不明が多すぎだな・・・」

第3話 「3人目の妹。進化するすずか。」（前書き）

今回は短めです。

け、決して新しいゲームをしてたからとかそんな理由じゃないんだからね!?

スイマセン!!

第3話 「3人目の妹。進化するすずか。」

休みの日の朝、アリシアを家に置くことについてどうやって説明しようか迷いながら忍姉さんに会いに行った。

「いいわよ。」

忍姉さんをどう説得するか悩んでいたが、意外にすんなりと承諾を得れた。

「あらら…いろいろ考えて来たのに…」

素直な気持ちをほき出す。でも、まあ拒否されたら俺も困った事になっていたわけだが…

「アリシアちゃんね。大丈夫、高町の人達にも他の人にも内緒にしておくわ。でも家の外に出た場合は…」

「うん、そこは頑張る。で、もう一人だけど…」

戻って来たのはいいが心の居場所が全くわからない。見つけるための道具も思いつかないし…。

「住む場所の準備はしておくわ。部屋を開けるだけでいいもの。」

「ありがとう。すずかちゃんと一緒に探しに行くね？」

海鳴にいるならまだ探しようはある。

だから一応すずかを連れて行って共に探し回るのだ。

「明日は温泉だから、用意はしておいてね？」

「はい。」

すずかの部屋に向かう。今日、すずかと外に出るのはもう一つ理由がある。

「すずかちゃん！入るよー」

「うん！」

前回のミスを繰り返さないようにゆっくり開ける。

「お？似合ってるね。可愛いよ、すずかちゃん」

白いワンピースに帽子、シンプルだがそれ故に着る人物自体が重要となる物だ。

「それで…お兄ちゃん。」

すずかが潤んだ目で上目遣いに俺を見る。

「だめ。最後に渡すよ。」

今回、すずかには渡すものがあるのだ。

「ええ…わかった。じゃあ、急いで探そう！」

すずかは張り切って外に出ていった。

「うわ、張り切りすぎだった！」

珍しく、苦勞しそうな一日だ。

既に沈み始めた。

「…見つからない…」

なのは達に見つかるから念話も使えないし…

「だ、大丈夫！見つかるよ！」

すずかの励ましに軽い笑みを浮かべて再び自分に活をいれる。

「は、離しなさいよ！あんた達！」

何かが聞こえる。この声は…

「アリサちゃん！？」

すずかが声の聞こえる方に走り出す。

「アリサ…？誘拐…って、あれか…トラハの…」

俺も一歩遅れて走り始める。トラハでのアリサは確か…死んで…

「急ぐか…」

この世界で死ぬようなことはないだろうけど…

「セットアップ………すずかちゃん。捕まってる！」

後ろからすずかの手を掴み宙に浮かぶ。

「わっ…わっ!？」

なのはにバレたらどうしよう。

「うわぁ…お兄ちゃん…バリアジャケット、見るの二回目だけど黒一色だね…」

すずかは顔を真っ赤にさせながらパニックに陥っているようだ。
高いしな…

現場と思われる付近で何やら慌ただしく走っていく車を見つけた。
『主、アリサ様の反応です!』

キャリアスロウの報告で確定した。そうだな…すずかを抱えるのに両手を使ってるから何もできないしな…

「すずかちゃん。俺のズボンの右ポケットから箱を取って。」

「わ、わかった。」

すずかは顔が赤いまま頷いて俺の右ポケットをまさぐる。

「それ、すずかちゃんにプレゼント。」

S i d e アリサ

いったい…何が…

「う……………」

頭がクラクラする。そうだ…変な奴らに捕まって…

「お？お嬢様がお目ざめのようだぜ？」

周りには気持ち悪い目で見てる男たち。

「…身代金？」

「ああ、そうだ。ただな、うちの仲間の子供が好きな人間がいてな
あ」

なるほど、絶体絶命ってわけね…ここにすずかがいなくてよかったわ…

「好きにすれば？変態」

いないから強気でいられる。大丈夫。怖いけど…死ぬ方がもっと怖い。

「…こいつはいい。俺もやろうか。こいつの顔を歪ませたくなった。」

リーダーらしき男がズボンをかちゃかちゃ鳴らし…

「うわぁ…身代金目的と思ったら…そっちが目的？…サイテー」
どこかで聞いた声が聞こえた。

「うわぁ…身代金目的と思ったら…そっちが目的？」

廃ビルの片隅で起きそうになっていた惨劇に口を出す。

「サイテー。」

あえて声を出す。アリサを人質に取られては攻撃できないので、
ちらに集中してもらう。

「おいおい嬢ちゃん。どっから入った？」

「ん？嬢…ああ、俺か。」

さすがが見つかったのかと思った。

「ハイエンド。」

『はい、カナエ様。不埒な輩に制裁を』

容赦はしない。ハイエンドをだしてリーダー格に向ける。

「さようなら。」

撃ち抜く。もちろん非殺傷で。

「ぐあっ!？」

とりあえず一人。あと4人か。

「カナエ!？なんで…それに…それは…」

アリサにバレたがまあいいだろう。

「はいはい。今はいいから…」
バン。

銃声1つ、どうやら殺す気でくるらしい。

「なっ!？なんだ!？銃が…」

「俺の防壁を破るならロケランでももってこい。」

とりあえず、俺に銃弾は届かない。だから、怖いのは…

「動くな!」

アリサに銃を向ける男が3人。

「行って!アルビオン!」

空中を蒼い色の板が飛ぶ。

「なっ!？」

アリサに銃を向けていた男たちはすぐさま銃の引き金を引いた。銃声が3つ。しかし、アリサに傷はない。4つの蒼い板がアリサの周囲に浮かんでいた。

「なんだ…盾？」

「はい。盾ですよ。」

暗闇から姿を現すすずか。黒いバリアジャケット。白い翼。俺と違ってすぐバリアジャケットを着られたらしい。

「私のアームドデバイス。アルビオン…」

盾のアームドデバイス。そして、それは…

『Shell Bullet.』

ビットとしても使える盾の砲台だ。

残った3人は全員気絶している。とりあえず、警察に連絡しておくか。

「アリサちゃん!大丈夫?」

「すずかまで…なんなのよ、その服…それに…」

アリサが宙に浮く盾…アルビオンを見る。

「とりあえず、警察には連絡した。話しはまた今度にして?見ての通り、知られちゃいけない力だから。」

ちなみに今度とは明日の温泉だったりする。

「…わかったわよ。行つて」

納得のいかないような表情を浮かべながらアリサは手を振った。

「じゃあね、アリサちゃん!行こう、すずかちゃん。」

とりあえず、心を早めに見つけなくては…

再び街を散策。凄まじい時間を使っている。

「心ちゃん、どんな子？」

前世を思い出して、そのあと一瞬…アリシアに憑いていた時を思い出す。

「い、いい子だよ……」

断言はできなかったがそれくらいは許してほしい。

「ところでどう？アルビオン…だっけ？」

すずかに渡したアームドデバイスを思い出す。

使いやすいようにはしてあるんだけど…

「いい子です。すぐにサポートもしてくれたし。」

『ありがとうございます。お嬢様。』

すずかがつけている紫のクリスタルのネックレス。それがアルビオンだ。

思考パターンは女性型にしたのだが…メイドだな。

「アリサちゃんにバレちゃったね？お兄ちゃん。」

「アリサちゃんの分のデバイス作っておこうかな…」

刀型にしてコートもだして…シヤナ？

「なのはちゃんには内緒？」

「なのはちゃん達が管理局で部隊をつくるまでかな…下手に動くと俺が知ってる未来じゃなくなりそうだから…」

すずかには未来を知っているとだけ伝えた。妹だし、そのうちリなののこと教えようかな？

「なのはちゃんって強いのか？」

「強いよ。ちよっと信じられない才能…撃ち合いになったらアルビオン壊されるかもしれない…」

スターライトブレイカーはそのくらいの力がある。

「うそ…」

「俺もガード貫かれてダメージだね。」

ステータス回復を使えば無意味だけど…

「お兄ちゃんほどのくらい強いの？」

『カナエ様の魔導師ランクは空戦Sです。』

俺が答える前にハイエンドが答えた。いやぁ…成長したなぁ…

「そろそろ管理局に入るかな…」

道具作成や統一言語ユニファクトを使えばかなりの地位になれるはず…

「いなくなっちゃうの？」

「大丈夫。すずかちゃんも呼ぶから、いくよね？」

すずかは顔を赤くしながら頷いた。そうだよな、なのはも来るってわかってるわけだし。

「あ……………兄様。」

ふと角を曲がると長い黒髪をポニーテールでくくっている女の子がいた。

ずいぶん昔の姿だが見間違えるはずがない。

「やっと会えたね。心…」

安心した。姿は変わっていないようだ。

「あ…う…あう…会いたかったです。兄様…」

心が俺に抱きつく。俺を見上げてみる顔は半泣きだった。

「心ちゃん…だったよね？すずかです。よろしく…!？」

心が突然すずかを睨んだ。嫌いなのか？

「兄様、なぜ、月村すずかが、兄様と、一緒に？」

一々区切ってしゃべる。やっぱり前世に比べて心が怖い!？

「いや、今俺は月村家の養子になっててすずかちゃんは俺の妹に…」

「そうですか…わかりました。」

なぜだろう、今度は機嫌が良くなった。

「むう…」

逆にすずかの機嫌が悪くなった。意味がわからない…

「ふふ…なるほど、ライバルですね。すずかちゃん」

心はいい笑顔ですずかを見る。つかライバル…？

「ライバルは私だけじゃないよ？心ちゃん」

なぜ2人は意味深な笑みで睨み合っているんだろうか…

「さすが兄様…動けるようになった途端…ふふ…ふふふ」

怖い…何が怖いってその写輪眼的な目が…つか本物？

『貴方が心様のお兄様ですか。私の分身の力、どうでした？』

俺のハイエンドと同じ形の白い腕輪…つかやべえ、デザインがほぼ同じだ…

心はやはり俺を監視しているに違いない。

「分身って…アリシアちゃんのか…強かったよ。キャリアスロウの第3形態じゃないと対応しにくい位に」

『カナエ様が瞬間的な射撃が苦手なのもありますが…』

ハイエンドのフォローはフォローじゃない気がする。

「カナエ…？」

心が首を傾げる。うわ、ヤバ…

「オリシヨのキャラ…名前パクった。」

心の耳もとで誰にも聞こえないように囁く。

「兄様…そこまで…いえ…いいです。わかりました、カナエ兄様です。ね。」

ニコリと笑みを浮かべるその姿は昔の心と変わらなかった。

「お兄さん、お帰りなさい。」

「ただいま、アリシア。」

アリシアの無邪気な出迎えに和みつつ、さきほど心に頼まれていた心のデバイスの調整をするために自室に向かう。

とりあえず部屋に入って調節するための集中力を得るために座り心地の良いソファ―に腰掛ける。

「ふう……………」

「お茶でもお淹れしましょうか？」

「ん、ああ…頼……………え？」

背後の声、なぜか心が部屋に居た。

「……………」

鼻歌まで歌ってるし…

「な、なあ…心はなんでここに…？」

「兄様と同じ部屋がよかったので。多分今日だけでしょうけど…」
確かに、随分久しぶりだもんな…心とは…

「わかった。横で見てていいよ。ところでデバイスの名前は？」

「はい。そのデバイスの名前はラスト…特殊な能力としては自身の劣化レプリカ作成ですね。」

なるほど、劣化か…

『残念ながら心様にデバイスを調整する技能がなかったので…それに、私自身が特殊な物だったので』

なぜ心がデバイスを持っているのかという理由はなんとなくわかった。

「拾ったのか…」

「ええ。まあ…能力を使いましたが…拾ったことに違いはありません。」

苦笑いを浮かべる心。心が苦笑いを浮かべるような事が起きたのだろうか？

「よし、ちよつとスキャンしてくる。」

「あ、私もいきます！お兄さん！」

アリシアがちょこちょこ後ろから追ってくる。

「…え！？なんでアリシアちゃんまでここに！？」

「ついてきてましたよ？」

なぜだろう…心は俺が驚くのを知っていて黙っていたような気がする。

「私もいるんだけどな、お兄ちゃん。」

「うん。なんとなく予測はしてたかな？」

すずかまで居たのだが…まあいい、未来のために今から動くか。

「すずかちゃんはその机においてある本読んで、意味はアルビオンが教えられると思うから。」

「わかった！」

『了解しました。マイスター』

うん、どうやら俺はアルビオンの中ではマイスターらしい。

「心は…うん、アリシアちゃんと一緒に作業を見に来てくれ。アリシアちゃんはキッチンと覚えてね？」

アリシアにはフェイトほどの魔法の才はなかったはずだ。サポート用のデバイスも作ってみるが基本的にデバイスとかの整備になると思う。

「む…？ねえお兄さん。なんで心ちゃんだけちゃんじゃないの？」
…無意識だった…

「ええと…心は…そうだなあ…」

説明が難しい。前世のこととか言えないしなあ…

「ふふ、大丈夫。ちゃんがつかないのは気にしなくてもいいよ？」
なんだろう…？すずかの言葉はフォローを受けている気がしない…

俺は自室にもう一つある扉を開けて入る。

実は俺は忍姉さんと趣味が合う。機械いじりだ…そして、その結果が…

「兄様、この部屋は…」

心が呆れたような表情で周りを見渡す。

忍姉さんは目を輝かしてくれたけどなあ…

「すごいよ！お兄さん！！研究所みたい！！」

「お？アリシアちゃんはわかるか…？そうだ、これが俺の工房だ！」
ファクトリー

目を輝かせるアリシアに俺もテンションを上げる。やっぱりわかるよな！？この工房の素晴らしさが！
ファクトリー

「あれ…？兄様…この辺にあるのって…」

心が見る場所にはたくさんの宝石…いや

「全部デバイス、まだ起動していないけどな。」

それにそのデバイスはこの工房ファクトリーのサポートをするためのデバイスであってキャリアスロウやハイエンドとは違う。

「ほら…こっちに来て？ラストの調整をするから。」

さて、俺が学んだ知識を生かしますか！！

「よし、調整終わったぞ！」

「ありがとうございます。兄様！」

心がラストを受け取る。実は少しだけ改造したのだが…黙っておこう。

「私も！勉強になったよお兄さん！！」

アリシアも目を輝かせてお礼をいつてくれた。

「うん、それはよかった…これからも色々教えるね？」

「お兄ちゃん！！」

ファクトリー

突然、声とともに工房（重要なのでルビはし続ける。）のドアを開けてすずかが入ってくる。

「どうかした？わからない場所があったか？」

「ううん。全部覚えたから次の本を…ってどうしたの？お兄ちゃんまさか、わずか3時間くらいで全部覚えたのか！？」

「…ごめん。まさかこんな短時間で読むと思ってなかったから…」

用意してない…」

「そっか…わかった。じゃあ、明日の準備してくるね？」
そういつてすずかは部屋を出ていった。

- すずか 恐ろしい子…！

第3話 「3人目の妹。進化するすずか。」（後書き）

キョウスケ「ただいまあ…」

カナエ「ん？どちらさん？」

キョウスケ「…泣いて良いよな俺？」

心「泣くなら目の前から消えてからにしてください…エセ二枚目」

イリスヴィア「容姿変更のことか…辛口だな…」

心「いいじゃないですか。それに比べて兄様は…」

キョウスケ「くっ…！いいぜ…こうなったら北海道で取ってきたこの力ニは俺一人で」

カナエ「グス…キョウスケさん…冗談だったのに…」

キョウスケ「う…」

カナエ「グス…すいません…グス…いいです。食べてきてください…それはキョウスケさんが取ってきたものですし…」

キョウスケ「わかった！みんなで食おう！」

カナエ「フ…次回『第4話　なのはVSフェイト。そして…』です。」

イリスヴィア「あれ……？今回はキヨウスケを次回予告の……」

キヨウスケ「え……まさか……取られた？……そうだ！？カニは……！？あれ？ない？心ちゃんも居ない！？」

カナエ「では、また次回。さて、帰ったらカニ鍋かな？」

キヨウスケ「お前ら……！！！」

第3話終了時設定（前書き）

いつも通りの設定です。

第3話終了時設定

心

身長105cm。

見た目が判明腰あたりまである黒髪ロングで黒目。今のところ子供の容姿だが成長すれば100人中100人が振り向く美少女。ただしヤンデル。

月村 すずか

デバイスを手。

姿はハヤテのBJの黒版みたいな感じ？あと羽も白。

アルビオン

盾型のアームデバイス。

AIは最高レベル。盾にもなるしビットのように攻撃することもできる。

すずかのバリアジャケットについている羽は空気中の魔力を取り込み低燃費で飛べるようにするという機能がついている。

性格はメイドみたいなかんじの女性型。声は『ハヤテのごとく！』の鷺ノ宮伊澄（CV松来未祐）に似た感じ。

ラスト

鞭型のインテリジェントデバイス。

落し物、性能は高い。鞭は魔力を使って形成している。

性格は多少自信家な女性型。声は『シャーマンキング』の麻倉葉（

CV佐藤ゆうこ）に似た感じ。

誘拐犯

ロリコン。説明終了。

警察に捕まった。

第3話終了時設定（後書き）

心「ちなみにラストは最後…ではありません。」

カナエ「え？じゃあ…」

心「ヒントは声優さんですね」

カナエ「え？」

すずか「ついでにアルビオンも声優さんを見ていただければ…なんとなく理由はわかるかもしれせん。」

ミスを発見、修正しました。どこが…というのは黙っておきたいところをミスしました…orz

第4話 「なのはVSフエイト。そして…」 (前書き)

今回も少なめ・・・の割にしかも遅いし・・・ホントスイマセン！

第4話 「なのはVSフェイト。そして…」

連休の家族旅行で高町家と月村家…それとアリサで温泉に向かう。

「むうー…」

アリサの視線が痛い…あと、なのはも何処を見ているんだ。

「アリシアちゃんと心ちゃん、置いて来てよかったの？」

仕方ないと思う。アリシアは連れてきた場合フェイトと何か起こる気がするし…

「まあ…今回はサポート役もいるしね。」

先日北海道から戻ってきた奴にワープの杖を持たせてある。
使い時を間違えなかったらいいんだけど…

「着いたー！」

車での移動は楽しかった。風景をゆっくり眺めるのはとてもいい。

「ねえ…カナエ。さっさと教えなさいよ。」

アリサが怖い。が、まだ説明はしない。見てもらった方が早いし
このあとの動きもしやすくなる。

「カナエくん！ユーノくんだよ！」

そういえばユーノとちゃんと会うのは初めてだな…

「初めましてー」

歳相応（見た目のほう）に笑いながら頭をグリグリやる。

「キユー…」

和むなあ…男じゃなければ。

「後でね。アリサちゃん！」

俺も初めての旅行にテンションが上がっているようだ。
なるべく素早くアルフを見つけて遊んでやる！

（居た〜）

くつろいでいるアルフを発見。ついでにフェイトも…あれ？どこか行った。

「こんにちは〜お姉さん！」

アルフに笑みを向ける。こいつが後にプレシアを裏切るのはわかっているのに、そのタイミングがわかるように発信器を付けておく。フェイトと離れて地球に来たらそのタイミングだ。

「ん？どうかしたのかい？嬢ちゃん。」

またか…不快感はないが訂正が面倒なんだよな〜

「男ですよ。さっき居た娘はフェイトちゃん？」

ゾクリと殺気が漂う。スゲエ、アルフの笑みが完全に消えた。

「アンタ…フェイトに…」

「前に翠屋っていうお店で会ったんですよ。フェイトちゃんが言っていましたよ。あなたがアルフさんですね？」

呆氣にとられた表情のアルフ。危うくアルフが自爆しそうになっていたがギリギリセーフのようだ。

「あんたがカナエか。……………っ！フェイトの手に…っ！」

アルフが再び怒りに顔を赤くする。凄く楽しい反応だ。

「すみません、あれが俺の挨拶で」

真っ赤な嘘だが。

「日本にそんな文化はないでしょうが！」

アルフが俺の頭にチョップする。…避けさせてもらうつ！
僅かに横にズレ、チョップを避ける。

「なっ！？」

びつくりしてる間に背後に回る。

「でも、残念だなあ…フェイトちゃんには中々会えないし…発信器でも付ければ遊べるかな？」

アルフに抱き着く。人間形態のアルフに抱き着くのは多少抵抗があるが仕方ない。

首に手を回して発信器を付ける。ちなみに体をゴシゴシ洗った程度じゃ外れない。

「アンタ…」

「すいません、お2人ともかわいらしい犬のように見えたので悪戯をしたくなったんです。年頃の男の駄目な所ですねえ。」

耳元で囁く。デカイ方は嫌だが子供アルフは可愛いのだ。後の事を考えると仲良くした方がいい。今は悪戯心9割だが。

「フフツ美人姉妹ですね。」

「キャウ！？」

息がかかるくらい近くに口を寄せるとアルフの体が跳ねた。やはり犬か…鳴き声か。

「あれ…？」

後ろから声、この声は…

「久しぶりーフェイトちゃん。覚えてるかな？」

「う、うん。久しぶり…カナエ」

目的は達したのでもう離れてしまってもいいのだが…

「2人はもう銭湯に入った？」

さて、問題です。俺は何歳でしょう？

「ううん。入ってないけど…」

「じゃあ一緒に行こう。ここ10歳までなら混浴みたいだし。」

疚しい目的7割。あと3割は体を見る…と意味が同じになるな…
もう虐待が始まっているのかを知るためだ。

実はP・T事件は既に詰み^{チェック}に入っている状態だ。

アリシアの気持ちが決まった時点でプレシアを操ればいい。

「で、でも…」

顔を赤くするフェイト。

決めた。

将来、エリオに同じ事をする場合絶対に弄ってやる。

「アルフさんも一緒にっ！」

急げばなのはにも合流させられる。修羅場の出来上がり。あとアリサとすずかを合法的に見られる。なのはは…知らん。

「ちょ…ちょつと!？」

銭湯に入ったが誰もいなかった。仕方ない、目的だけ果たそうか。

「フェイトちゃん、体…傷…」

やはりあった。アリシアに報告しておこう。うまくいけばプレシアを死なせずに逮捕できるしミッドに取り入りやすくなる。

「!?!?…こ、これは…」

原因を知っているのが申し訳なくなるような反応をされた。

「…アルフさん、誰が、これを？」

親が子にする仕打ちとは思えない。いや、まともな親なら子供に怪我はさせないはず。

ズキリと頭の端が痛んだ。

「……………」

結局、銭湯からでるまで一切会話がなかった。

「またね。フェイトちゃん！」

手を振る。次に会うのは学校になるだろう。

「う、うん…」

照れ気味にフェイトはこちらに手を振った。

『アリシアちゃん。』

『なんです？お兄さん。』

突然の念話に動揺なく答えてくれた。

『アリシアちゃんと一緒に変身してプレシアさんの所に向かう作戦を考えたから…準備をしないとね？開始は…夜からにするから寝ていて。』

『うん、わかった……………頑張るね……………』

返事は重い。というか普通の子なら嫌がるのだが…

『心ちゃんがね。す、すき…あう…大切な人のためなら親を殺すく

らい簡単だつて…』

心おおおお！？

ヤンデキてるぞ！？あと1文字だぞ！？

というか思考が読まれた！？つか殺す
逮捕するつもりなの
につ！？

つか1日で毒されすぎだろ！？

『あ、それは違うよ。3年間一緒に居たから。』

また…心の中を…というか3年で…なんかの修業アイテムかよ…
そして心のチートっぷりがほんの少し羨ましい…

Side フェイト

自分の体に刻まれた傷。随分薄くはなっ
てきているけど……..
「フェイト？」

「ごめん、アルフ…少し考え事…っ！？
ジュエルシードの気配！」
「私はこつちを探すから見つけたら合流しよう！」
アルフが飛んでいく。今は、母さんの為
にジュエルシードを探さ

なくちゃ…！

『ユーノくん！』

横で突然念話なんかするなあっ！会話だだ漏れだっつの！寝れないし…いや、寝る必要もないけどさあ！

ジュエルシードの気配で目を覚ますのはしっていたけど…ビックリした…

なのはが部屋から出ていく…じゃあ、ミッションスタートだ！

「お兄ちゃん、なのはちゃんはどこに…」

さすがが眠そうにしながらこちらを見る。今日の事はさすがにはあまり関係しないで欲しいので曖昧に笑ってごまかす。ちなみにこの時にさすがは今は話せないという意味に取るようなのである意味使い勝手がいい。

「ちょっと行ってくる。出てきちゃダメだよ？」

釘を刺してからワープで月村家の自分の部屋に向かった。

S i d e なのは

ジュエルシードの気配を感じて走っていると光の柱を見つけた。

「あれは!!」

走る。急がないとみんなが…

「あーら…あらあら…」

そこにいたのはこの間の女の子と……

「あっ!？」

昼間の…

「子供はいい子でって言わなかったけか？」

女の人!？」

「それを…ジュエルシードをどうする気だ!？それは…危険なものなんだ!」

「さあね? 答える理由が見当たらないな。それにさあ…私親切に言っただよね?」

そういった女の方は私を睨んだ。

「いい子でないと…ガブツといくよって。」

「!？」

目の前で女の方が大きな狼に変わる…そんな…

「やっぱり…あいつ、あの子の使い魔だ!」

「使い魔!？」

S i d e ? ? ?

「ん？子供…どこから入っ…！！？？」

グチャと肉が拉げる音がわずかに聞こえた。

「はあ…2人で出かけている上に…私は雑務ですか…」

闇夜に浮かぶ2つの人型。片方は地に、もう片方は宙に吊るされている。

102

「恨み言をいつても始まりませんし…こついうことを任せられるのも信頼されているし…と考えますか…」

宙に吊るされた人影がゆっくり降りられてもう片方の影がそれに近づいていく。

「さて、上手くしなくては…」

S i d e ? ? ? 2

「母さん…」

私はお母さんを前にしてわずかに震えてしまっている。

「なぜ帰ってきたの？」

「母さんに…言いたいことがあつて…」

「…なに？」

どうやら話は聞いてくれるみたいだ。

「…なんでジュエルシー」

「そんなことはどうでもいいでしょう？私が集めて来いと言っているんでしょ！？」

鞭が私の体に向かってくる。

「ああ…やつぱり、もう駄目なんだ…お母さん」

灰色の薄い膜が私を護る。優しいお母さん、きつと優しいから…壊れてしまったんだ。

S i d e フ ェ イ ト

「話し合っただけじゃ…言葉だけじゃきつと、伝わらない！」

加速魔法で白い子の後ろに回ってバルディッシュを振る。

「！？」

白い子がしゃがんで避ける。

もう一回！

『Flier fin.』

次は飛んで避けられる。

追いかけないと…

「でも、だからって!!」

「賭けて、それぞれのジュエルシード…1つずつ!!」
もう一度、後ろに回る。

『Thunder Smasher.』

砲撃魔法で攻撃する。すると、相手も砲撃魔法で反撃してきた。

どうやら威力は拮抗して…「レイジングハート！お願い!!」

凄まじい魔力で私の砲撃魔法を飲み込んでこちらに向かってきた。

綺麗な桃色の魔力光が広がる。

「!？」

何故か突然の寒気に襲われた。

「しまっ…」

避けられない!？

どうやら、ほぼ原作通りに進んでいるようだ。さっき、カナエが「ちょっと色々したからもしかしたら変わっちゃうかもしれない」だから変わりそうなら…頑張ってもとの結果…フェイトの勝利になるようにして」とっていたのは杞憂になりそうだ。

なのはの攻撃とフェイトの攻撃が拮抗する。確か、この後フェイトはデИБインバスターを避けて…！？

直撃しそうになるまで動かない。いや、何故かはわからないが体が硬直した！？

「頼むぜ…カナエ！」

『ゼロシフト、発動します！！』

ネクロの声と同時に俺はフェイトの前に割り込むように移動していた。

『陽電子リフレクター（魔法ver）発動！！』

デИБインバスターを明後日の方向に跳ね返し…

『ゼロシフト！！』

なのはの後ろに回りこみビームサイズ（ガンダムデスサイズの）を首につける。

「悪いね。横入り…事情があるんだ。出してくれないかな？ジュエルシード。」

『Put out.』

「え？…え？」

どうやらなのはの意識は事態についてきていないようだ。

「はい、フェイト…なにを考えていたかは知らないけど…本気でや

らなきゃなのはの方が可哀そうだ。」

俺はフェイトの頭を撫でてジュエルシードを渡す。
にしても顔見られたなあ…カナエになにを言われるか…っていう
かビリッてこなかったな…

「あ、あの…貴方は…？」

「ああ…秘密、ただ…ピンチになったら助けるよ。」

「え！？あ、あの！？」

さて、色々聞かれる前に逃げるか…

「貴方…誰？」

おお…怖い怖い。

「この娘の命の恩人。」

ある意味間違えていない。コイツの方はダレの事を間違えてい
そうだが。

「なに？私から助けたとでも言いたいつもり？」

「なるほど、確かに今の状況からすればそっちもアリか。」

思わず隣で悲しそうな表情を浮かべるこの娘見てしまう。

「で？この娘はアンタの娘だろ？よくそんな真似ができるな？それ
とも、アンタの本当の娘じゃないから言えるのか？」

恐らく、一番聞きたくない言葉をこの娘に聞かせる。強がっても

まだ… 8 歳なのだから。

「…よく、知ってるわね… バレているのなら偽っても仕方ないわね…
…そうよ、それはただの人形。アリシアに似せたただの紛い物よ。」

「!?!? それでも、私は母さんの…」

「そう、鬱陶しい。もう私を呼ばないで、そうよんていいのはアリシア一人だけ。アリシアを元にして造ったのに… まったく似てないわ。」

ああ、やはり。もう戻れないか。

「ゲームオーバーだよ。アンタ…」

「お母さん、やっぱりわからなかったんだ…」

「何を…」

プレシア・テストロッサはいまだに気付かない。

「私がアリシア・テストロッサなのに…」

そういつてアリシアは左手で顔にかかった髪を払った。

「う… そ… そんなのは嘘よ… だってアリシアは…」

そういつてフラフラとプレシアは奥に消えていく。

「…どうする?」

「死者にすぎる人間はすでに生きること放棄しています。私は生きて
いるカナエお兄さんが大切です… だから… 私たちのためになる
ように…」

アリシアがプレシアの後を追いついていく。

『心、間に合った?』

『はい、完了です。』

細工は完璧。ならば、あとはアリシアの心が…

俺もアリシアの後を追う。

「ほら、ここにアリシアはいるじゃない!!」

「お母さん…」

どうやら心の作ったアリシアの肉体のことを言っているのであるう。

「それは偽者だよ。やっぱり、見抜けなかったか。」

ハイエンドを構えプレシアに向ける。

「くっ!!」

プレシアがこちらを見て腕を上げようとする。

【あなた」「には」「使えない】

プレシアが腕を掲げるが何も発動しない。

「え? な、なんで! ?」

「お母さん…貴方の事を時空管理局に報告します。発見や罪状のことはすべて、時空管理局執務官：カナエ・ツキムラが捜査したということになります…お母さんは私達のことを忘れることになるでしょうが…」

アリシアの肩が震える。さすがに…これ以上は言わせられないか…

「プレシア、あんたの娘は過去ではなく未来を選んだ。もし、あんたがフェイトのことをちゃんと見ていたら…別の結果になっていたかもな。なぜならフェイトは…」

「私の妹だから…」

プレシアが一瞬ハツとした表情になるが…すでに遅い。

「さようなら、お母さん。」

弾丸が放たれた。

S i d e プレシア

「ん?…寝てたのかしら…」

私は椅子の上で目を覚ました。

第4話 「なのはVSフェイト。そして…」(後書き)

カナエ「カオスだね・・・」

イリスヴィア「なんかキャラ違うのもいたし・・・」

アリシア「私のことですか？」

イリスヴィア「この話のあとなのにならとニコニコでてきたあつ!？」

心「私が愛の何たるかを教えましたから。」

キョウスケ「うわぁ・・・」

イリスヴィア「にしてもカナエ・・・黒くないか？」

カナエ「へ？そうですか？」

心「私の兄様ですから」

キョウスケ「うわ・・・すげえ納得・・・」

カナエ「次回は？」

イリスヴィア「うん、次のタイトルコールは・・・」

アリサ「私よ。『第5話 アリサの翼、心の心』・・・これでいいの？」

カナエ「うわ．．．またなのはちゃんが．．．消えた．．．あ、あ
とフェイトちゃんの寒気の原因は風呂だった」

第4話終了時設定（前書き）

設定です。ツッコミがあればヨロシクお願いします。

第4話終了時設定

心
こころ

女 現在8歳 身長120cm。

カナエの道具作成をパクって『ネギま』の別荘らしきものを作って中でアリシアとともに3年間すごす。

アリシア・テストロツサ

女 年齢8歳 身長：122cm

今のフェイトと瓜二つ。

性格が少しヤンデキている。

でも基本は明るくていい子・・・のはず。

心とともに3年間過ごしたせいで性格が少し似てしまった。

今アリシアの中では

カナエ 心>フェイト>プレシア>月村家の人たち〃その他の人>
キョウスケとなっている（え

第4話終了時設定（後書き）

アリシア「ヤンデ・・・？」

心「完璧に近づいたということです。」

アリシア「そうなんだあ」

イリスヴィア「多分、ずっとこんなやり取りをしていたんだろうな・
・・」

訂正、不等号の方向が反対だった・・・

第5話 「アリサの翼 心のこころ」(前書き)

えーと、更新遅いです。本当にすいません…

あと、やっと気付いたのですがPV23000 ユニーク3000
を突破していました！！ありがとうございます！

思っていたよりも沢山の方が読んでくださっているようで私、涙が
溢れて…

更新頻度をあげるように頑張りたいとおもいます！！

第5話 「アリサの翼 心のこころ」

「これはここをいじればいいんだよね？」

「うん、正解。でも、そろそろ休んだら？」

プレシアとの一件以来、アリシアは妙に明るく振る舞っている。誰が見ても“フリ”なのはわかるのだが誰も止めることは出来ない。

「む、お兄さん。早めに完成させておきたい、といったのはお兄さんだよ？」

「それは…そうだけど…」

お陰で今日中には完成しそうだし…

「兄様…コーヒーです。」

「ああ、ありがとう心…」

いつもながらいつ部屋に入ったのかわからないなあ…馴れたけど…

「お兄ちゃん！アリサちゃんが来たよ！？」

すずかの言葉と同時にドアが勢いよく開かれる。

「ドアが壊れるからあんまり力入れすぎないで？知ってる人間しかないから全力で動きたいってのもわからないでもないけどさ」

すずかが全力で動くとき普通に人間離れた動きになる。俺もすずかにつきあって走り回ったりしてるから人の事言えないが…

「うう…ごめんなさい…でもアリサちゃんが凄く怒った顔で…」

「…俺のせいだな…」

結局説明するの忘れてたし…

「アリシアちゃん、あとは任せるけど…ちゃんと休んでね？」

8歳になつているとはいえまだまだ子供だ。それに多分、精神的にも参つてゐるだろう。

「…わかつた。お兄さん…」

多分…わかつてないんだろうなあ…

「ちょっと！アンタ、なんで何も教えてくれないのよ！？」

あつていきなりこの一言だもんなあ…

「いや、この前も非常事態になつてしまつて…喋りそこねただけだよ。」

とりあえず喋る気は満々である。

「だからほら、可愛い顔に戻して」

なにやら少量の殺気を感じた気がするが、今はなんともいえない。アリサを宥める方が優先だ。

「う、うぐ…わ、わかつたから…あんまり見ないで…」

拗ねた女の子に対して有効な手だというのは実証済みだ。

「つまり、アンタ達は魔法使いつて事ね？」

そういつて俺、すずかを指差す。アリシアと心は今、俺の部屋で作業の続きをしていた。

「うん、間違いない。」

アリサは頭がいいから説明が楽だ。

「で？私は使えるの？」

「うん。まあ、俺が造ったデバイスに限り…なんだけど。」

アリサとすずかにもリンカーコアはある。ただし、最初の俺のようにはバリアジャケットを展開するだけで気絶してしまうだろうが…

「へえ…造れるんだ。」

「…普通は無理だよ。俺だけの能力だからね…」

かなりの高値になるので自分専用のデバイスなんて造ってられない。アリサなら金的には大丈夫かも…

「で？私を魔導師にするつもりは…」

「あるよ。条件はあるけどね…」

最初からそのつもりだったし…性格的に友達の為に命を賭けられるともわかってる。

「…条件？」

「俺の計画を邪魔しない。それだけが条件。まあ、なのはちゃんに時期が来るまで秘密にするだけだよ。」

秘密…というのが気に食わなかったのかアリサが目を鋭くした。

「なのはちゃんも秘密にしてるし、こっちはドッキリをしたいただけだから。」

アリサを安心させるように笑う。多分、アリサはドッキリとかが好きそうな性格なので…

「わ、わかったわよ…べ、別になのはを驚かせたいとかそういうのじゃないんだからねっ！？」

わかりやすい返事をありがとう。

「よし、じゃあアリサちゃんには今造っているデバイスをあげよう。」

「というかアリサにあげるために造っていたんだし…」

「いいの？」

「当然、俺としても味方が増えるのは嬉しい事だからね。」
仲間がいないとやりたいことができないし…

「兄様っ！ジュエルシード以外のロストログアの反応がありました！」
「！」

心が俺たちの居る部屋に入ってきた。…アリサが呆けた顔をして
いるな…

「紹介するよ。アリサちゃん、俺の妹の心だよ。」

心が俺の紹介に応じてアリサにぺこりと頭を下げた。

「ご紹介いただいた神なs…すみません、以前の名を言いそうになりました。月村 心です。よろしく願います。アリサちゃん。」

一瞬、俺たちの本当の苗字を出しかけた心だったが問題なく笑みを浮かべながら自己紹介をした。

「…カナエよりはましね。私の名前はアリサ・バニングス、よろしくね。」

何が“マシ”なのかはわからなかったがアリサも素直に心の挨拶に応じた。

「…思っていたより、鋭い人ですね。」

「すずかも気付いているわよ。まあ、気付かないのは本人だけ…み

「ただしい？」

「そういつてアリサは俺を見た。どういうこと？」

「兄様はまだ気付いてられないようなので、わかった所で私がお教えします。」

「さして重要なところではないのだろうか？心は状況判断ができる子だ。不利になるようなことではないのだろうか。」

「…ヒントを言えば、キョウスケさんと私と兄様に当て嵌まる…と思います。」

「転生組に当て嵌まる…？」

「意識の問題なので、あまり気になさらないように…と、ロストロギアの件ですが」

「ん？」

「なぜか、なのはちゃんやフェイトちゃんは気付いていません。」

「気付いていない…？」

「いや、もしかして…これは俺たちも偶々気付けただけでは…？」

「どうやって見つけた？」

「ファクトリー」

「兄様の工房にある機械が…あ」

「機械しか反応できないロストロギアなのか…？」

「探しにいつてみるか…」

「となると…もしかしたらちょうど良いかもしれない。」

「心はアリシアちゃんと一緒にいて、俺はずかちゃんと…アリサちゃんも来る？」

「へ？でも私、魔法は…」

「…見るだけなら問題ないと思う。多分、何かを乱すロストロギアだと思うから。」

「気付けないのは恐らく気配が乱れているからだと思う。」

「…わかった。行くわ」

「反応は…この辺だったけど…」

場所は山の中。空中から探してみたけど空中ではわからなかった
ので地面に降りてみる。

「お兄ちゃん、あった？」

すずかは既にアルビオンを起動して蒼い盾を数枚宙に浮かせてい
た。

「見つからなかった。歩いて探すしかなさそう…」

少しウンザリしながら周りを見る。

木、木、木………とりあえず木と草しか見当たらない。

「ウソ…この中を歩いて？探知用の魔法とかないわけ？」

アリサも少しウンザリした表情をしていた。探知用の魔法はある
が…

「駄目なんだよ…魔法を広範囲に展開しようとしたら途中で消えた
んだ。せいぜい10メートルくらいが範囲かな？」

結論は変わらず歩き回る方法しかないということだ。

「うえ…」

「大丈夫だよ！アリサちゃん！10メートル以内に入れば見つけれ
るんだから！！」

すずかはどこか楽しそうにアリサを慰めている。

「…！何か…来る？」

俺の聴覚は既に音の振動が届く範囲ならどれだけ小さな音も聞き
逃さなくなっている。だから…草の上を進む音を正確に聞き取るこ

とも出来る。

「すずかちゃん！右から来る！」

「わかった！！」

すずかが右を向く。そして俺の背後から近づいてきたモノに俺は吹き飛ばされた。

「え！？」

「つつ…痛い…」

バリアジャケットのおかげが大したダメージはないが思わず口から言葉が出た。

「キャツ！？」

アリサの短い悲鳴。しまった…！

「「アリサちゃん！？」」

すずかと声が重なる。アリサの方を見ると尻餅をついて狼のようなものがアリサと対峙していた。

「キャリースロウ！」

『Sonic move!』

狼とアリサの間に移動する。

狼の大きさは大の大人2人分ほど、恐らく口を大きく開けるだけで子供サイズの体なら一飲みだろう。

「アルビオン！クロスファイアー！」

『Cross formation・Fire!』

いつの間に取り囲んだのか、狼の周りにアルビオンが7枚浮いている。

蒼い魔力光が狼を襲う。

しかし、狼は高く跳躍して一瞬でアルビオンの十字砲火を抜け出した。

「な！？避けた！？」

というかなんだらう…さっきから変な感じが…

「近づいてみるか!!」

地面を蹴りまっすぐ狼に向かって突っ込む。

「雷光一閃!」

狼の懷に潜り込んでキャリースロウを狼の額に向かって突き刺す。
音を置き去りにしながら狼の額を超高速でキャリースロウが通り抜けた。

「あれ?」

グキリと腕の関節が外れる。というかこの技…速さを求めすぎたな…

『現実逃避している場合ではないぞ!主!!』

俺の腕は狼を通り抜けている。つまり、俺の目には大きな狼にしか映っていないが実際のサイズは…

狼は体を沈めて一瞬タメを作って…

「アルビオン!」

『Round shield.』

アルビオンが俺と狼の間に入ってきて狼の体当たりを弾く。

「キャン!」

弾かれた狼から黒い何かが飛び出した。

「ロストロギアかつ!」

封印しようとキャリースロウを向けた瞬間…

「ストップ!カナエ!」

アリサが俺を止めた。

「どうかしたの?アリサちゃん。」

「これ……私を呼んでる?」

アリサが呟くと黒い塊が輝きを放った。

Side 心

私は兄様を見送った後アリシアちゃんを見ていたのだが…正直な話をするとしても暇だ。いや、兄様が頼んだことの重要性もわかってはいるのだけれど…

アリシアちゃんを見る。

「……………」

黙々と真紅の指輪をいじくっていた。

「（やはり、暇なのは性に合いませんね…）うーん…やることがないのは…」

次に自分の周りを見渡す。機械…機械…機械…

「…はあ…」

昔から機械に関わっていいことはなかった。…機械音痴だから。

「触ったら壊れる…とかいう素敵体質ではないんですけどね。」

何気なしにさつきロストログアの反応があつたと知らしてくれたモニターを見る。

「あれ？」

反応が2つ、一つは兄様の行った方で間違いないのだけれど…

「アリシアちゃん、このモニターのって…」

「え？…あれ…？2つあるね…同タイミングでロストログアが2つ

…？ジュエルシールドじゃないみたいだし。」

アリシアちゃんも言うので間違いはないのでしょうか。

「いってきます。アリシアちゃん、さっきここまでって言ったところまでちゃんと終わってくださいね？」

「はい」

兄様と一緒に見たアニメのキャラクターの超能力…瞬間移動を使って目的地に移動する。

出た場所は海上…！？

「ラスト！」

『Stand by ready・Set up・』

落下しながらラストのバリアジャケットを展開する。

黒い着物のようなバリアジャケット。そして手の先まで隠れた袖の中にあるラストの腕輪から伸びた銀色の鞭（バルディッシュの刃部分と同じ感じ）。

「わかりますか？ラスト」

『いいえ、わからないわね…でも気配はするわ。』

「あれ…？声…？…誰かが翻訳能力持っていたのかしら…」

いつの間にか増えている自分の特殊能力に驚きながら周りを見る。

海上に出たのに気配だけ…？

『だれか来るわ！』

ラストの忠告通り遠くから桃色の魔力光を発しながら誰か…ごめんなさい。わかってます。なのはちゃんですよね…

「あなたは？」

とりあえず先手を取る。

「ふえ？わ、私…高町なのは。あなたは？」

「…上梨心。かみなし 見ての通り魔導師よ。」
ため息をつく。ごめんなさい、兄様…関わっちゃいました。それにとっさの判断が出来なくて昔の前世の苗字を使つてしまいました…。
本当は神無の意味なんですけど…今は関係ないですよ…

「よ、よろしくお願いします。」

よろしくしたくありません。と、内心思いながらもなのはちゃんに笑みを浮かべる。今は関わりたくなかったのに…

「よろしく、なのはちゃん。」

周りを見る。未だにロストロギアは見つからない。

「心ちゃ…つて!?!?なのは!?!?」

馬鹿が来た。兄様いわく…ですけど。

「あなたはこの前の!?!?というかなんで私の名前を…つてお二人とも知り合い!?!?」

なのはちゃんが混乱のあまり変な踊りを踊っている。
キョウスケさん
というかこの人なんでやって来たんですか?

「気配を感じたからここに来たんだけど…」

「だからといって名前を呼ぶなんて…」

面倒になるだけだというのに…

「あ!?!?みなさん!来ます!?!?」

なのはちゃんの声と同時に私たち3人の間に白く輝く玉が現れた。

「っ!?!?とにかく…封印を…!?!?」

ラストをロストロギアに向けた瞬間ロストロギアが光を発した。

「「きゃっ!?!?」」

「うわっ!?!?」

私たちは光に吞まれた。

ふと、気がつく。夜の公園に一人でブランコに座っていた。…あれ？体が動かない？

場面が移る。

「ただいまー…」

この体の主だろうか？体が勝手に動く。私の体じゃないのは間違いないみたい。

「……………」

どうやら家に帰ってきたみたいだけど…静か…

「……………」

この体の持ち主は視点から見て幼稚園児か小学生1年くらい…だと思う。この年で家に誰もいないのは些か寂しい。

「……………」

誰も居ない。それが孤独だ。

孤独とは単純に一人だという意味もあるが…なにより恐ろしいのは心の空虚感。

理解できる。

なぜなら私もアレ以来一人だったのだから。

だけど、私はこれ以上の恐怖を知っている。だから怖くない。

今はただ、この体の持ち主が一人ではないことだけを祈ってあげよう。

S i d e なのは

ボタン、と鈍く重い音がした。

「あれ？…開かない？」

狭く暗い、倉庫みたいな部屋の大きなドアはこの子の体では開けられないみたい。

「誰かー！開けてくださいーい！！！」

ドアをガンガンと叩く。でも…

「誰かー！」

ドアは開かない。1分…2分…時間が経つとともにこの子の不安が大きくなって私の心にもその不安が入ってくる。

「誰かあーっ！！開けてっ！！！！！」

10分20分…どれだけ時間が過ぎているのだろうか？でも、誰も助けに來ない。

喉が痛くなってきた。痛みも私に伝わってくるみたい。

「ダレカ…タスケテ…」

5時間が過ぎるころには喉がかれてドアを叩いていた手からは血がはじめていた。

6時間…7時間が過ぎた。

私の頭もボーっとしてきた。この子より年が上だったから長く耐えれただけ、ここからはこの子と同じ状態になる。

暗い、狭い…寒い…部屋は寒くなって私の頭をもっとボーっとさせる。

お腹が空いた…でも食べるものはない…

長く…私が考えるより時間は過ぎていないのかもしれない。

誰も助けてくれない。誰も来ない。僕は誰にも見つからずにここで死んでしまうんだ。

そんな思いが頭に響く。

「諦めちゃだめ!!」

私はそれを聞いて思わず叫ぶ。でもこの子には聞こえない。

そうだ、私はこの子がいるからまだ耐えられる。だけど…この子は一人で…

そう思うと。頭に沢山の言葉が流れた。

寒い、怖い、暗い、怖い、痛い、怖い、寂しい、怖い。

サムイこわいクライこわいイタイこわいサミシイこわい

さむいコワイくらいコワイいたいコワイさみしいコワイ

こわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわい…!

感情が流れる。私の昔の嫌な思い出を思い出してしまう。
一人は寒い。一人は暗い。一人は痛い。一人は寂しい。一人は怖い。

「あ……あ……」

私の頭は……もう……何も考えられなくなった。

「居るのか……!? キョウスケ……!」

でも、あ……この子にも助けがあったんだ。ならこの子は今も幸せだ。

だってこんなに優しくそんなお父さんがいるんだから。

Side キョウスケ

まず、感じたのが痛み。そして次の瞬間に痛みの種類を理解する。

「ギ……アアアアアア……!」

熱い、アツい、アツいあつい

「デメエっ……! 心に手を出してんじゃねえっ……!」

聞こえてきた声に、この体の主は痛みを感じながらも嬉しく思ってしまう。

「ああ? オマエ、誰に口聞いてんだ?」

大きな影がこの娘を助けようと声をだした子供に向かっていく。

「カナエ!？」

口にするが声は出ない。さっき心と言っていたのでこの体は心ちやんのものなのだろう。

「お父さん止めてえっ!!」

大きな人はカナエに向かって手に持った何かを突き刺す。

「ク…が…殺す…てめえは絶対死んでも殺してヤル!!」

普段温厚なカナエからは信じられないような純粋な憎しみの殺気。

「はっ、とんだ親不孝者だなあ? オイ」

やはり、この大きな人は父親なのか?

「止めてっ!! やめてえっ!!」

心ちゃんが叫ぶ。体を動かそうとすると手に熱が、いや、痛みが走る。

ギチギチという音とともに痛みが体中を駆け巡る。

大きな影はカナエの小さな体: 8歳くらいの子供に容赦なく蹴りを入れる。

体が跳ねる。赤い液体が飛び散る。カナエの両腕、両足から血が飛び散る。

「ぐっ!! …あ…動いちゃ…駄目だ…心…」

それでも カナエは心ちゃんを心配する。

心ちゃんの気持ちに直接俺に伝わる。 駆け寄れない、首に巻きついている布が邪魔だ。手なんかいらぬ。足は動けばいい。ただ…兄に向かって走っていききたい。

「っ!!」

でも動けない。腕には杭が、足には鎖が。

「動かないでくれ…心っ!!」

四肢を血に染めながらそういうカナエ。

「チ…」

大きな男は振り返りこちらに向かってくる。

「お父さ…っ!?!」

アタマニ、イタミ。

「あ…」

呆気なく意識が暗転する。

「う…」

頭がくらくらする。

「……………」

部屋に音はない。いや、どうやら誰がいるようだ。

ぼやけた視界に映るのは…

「あ!! お兄ちゃ……………え?」

四肢から血を流し倒れている兄。カナエ口からもおびただしい量の赤が漏れている。

「…あ…よかった…生きてた…心…」

顔をこちらに向けて微笑むカナエ。そして、そのカナエの横に倒れている大きな人。

「うん、よかった。…うん。」

壊れたように呟いて肩を使ってこちらに向かって這ってくる。

「お兄ちゃん…？」

「ごめん、ちょっと痛いけど…」

カナエが近づいてきて。心ちゃんの手に刺さっている杭を口で抜く。メキリとカナエから何かが砕ける音がした。

「……………」

声もなく悲しげに微笑むカナエ。力尽きたのか心ちゃんの片手に刺さった杭を抜いたとたんに動かなくなってしまった。

「お兄ちゃん…！」

慌てて、痛いのに自分のもう片方の杭を血だらけの手で抜く。激痛。頭が割れそうになりながらも体が動く。

首に巻かれた布を引きちぎり、足の鎖は外せなかったようなので床に刺さった杭を抜き鎖を足に巻きつけたままカナエに近づいた。視界の端に赤が映る。ゴウゴウ、パチパチと音をたてる。

「…逃げ…ここ…ろ…」

か細い声がカナエから聞こえる。

「…！！」

駆け出した。家から外にでる。肌が焼けるように痛み傷も空気にさらされて狂いそうになるくらい痛む。

肌は白く、心ちゃんがどのくらい外に出れなかったのかはすでにわからない。ただ、1日どころではないのは確かだ。

「誰か！！助けてください！！！！」

通行人に声をかける。少し大柄な男性が心ちゃんを見て慌てて近寄る。

「君、どうしたんだい！！？」

「お兄ちゃんが、家に！！炎が！！」

心ちゃんの言葉はパニックになって上手く伝わっていなかったが男性はなんとなくわかったようで大急ぎで家の中に入っていく。

男性が家からカナエを抱きかかえて出てきたところで、意識は再び暗転した。

S i d e 心。

意識を戻す。今のはなのはちゃんの記憶だ。あまりいい気分ではないが意識を戻すのは簡単だ。

「っ…モノ風情が…よくもやってくれましたね…」

恐らく、過去の恐怖を抜き取り他人の意識で再生したのだろう。

私の記憶も恐らくどちらか一人に流れてしまった。

周りを見ると海に堕ちていく2人の姿が。

私は頭が訴える痛みをこらえラストを構えて原因となったロストロギアに向ける。

「封印…!!」

『封印!』

ラストの声が聞こえた瞬間、私は頭の痛みに気を失った。

「心…!!」

意識を失う瞬間、暖かな声と感触に体を預けて。

俺は心を抱えながら周りを見る。

「もうちよつと遅かったらみんな落ちてましたね。お兄ちゃん。」
「さすがが片手で落ちていきそうになっていたキョウスケの足を掴んでいた。というか相変わらず扱いひどい…」

「うわっ…ちよつと!! 私の方も何とかしなさい!!」
「私服のままなのは抱えているアリサ。というかその赤い翼はやはりネタなのだろうか。」

「ロストロギアを取り込むなんてね…アリサちゃん。」
「恐らく、魔力量ならキョウスケを除いてここにいる中でトップになっただろう。」

「ちよつとお!! しゃべってないで助けてったら!! まだ慣れてないんだから!!」

アリサが叫ぶのを聞きながらワープの杖をなのはに向かって振る。

「アリサちゃん、色々調べたいことがあるから、今日は泊まっていってね?」

「ちよつ! ? 勝手に決めないでよ!! ねえ! ? カナエ! ?」

俺は後ろから聞こえる声に苦笑いを浮かべながら俺が護らなくてはいけない子を腕に抱いて家に帰った。

第5話 「アリサの翼 心のこころ」（後書き）

カナエ「…アリサちゃんの出番すくなかったね…」

イリスヴィア「あつはつは…すみません。」

キョウスケ「ていうか心ちゃんとカナエ…あれはいくらなんでも…」

カナエ「その話題、もう一回俺に振ったらぶつ殺す。」

キョウスケ「ワカリマシタ！」

イリスヴィア「…そういえば、そのうち番外編をやるうと思うんだ。」

カナエ「へえ？」

イリスヴィア「完全にはのぼのとした話にするかいつもどおりにするけど直接本編（？）に関係ない話にするか迷ってるんだ。」

カナエ「うん？」

イリスヴィア「だから、どちらがいいか読んでくださっている方にお任せしようかなと。」

カナエ「なん…だと…」

イリスヴィア「え？なにその反応。」

カナエ「む、無茶すぎる。今まで感想とかも全くないのに…っ！」

イリスヴィア「…えーと…どなたからなんの反応もなかった場合
お流れ、ということだ」

カナエ「なんて…無茶な…」

イリスヴィア「さあ、さあ！気を取り直して次話の予告…！」

キョウスケ「今日こそ俺だな」第6話 わかりあえない気持ちなの
？」ってオイ！これまさか」

イリスヴィア「ではまた今度」

第6話 「わかりあえない気持ちなの？」（前書き）

PV30 / 000アクセス ユニーク4 / 000人突破！

ありがたき幸せです…っ！これからもよろしく願いします…！

第6話 「わかりあえない気持ちなの？」

アリサがロストロギアを取り込んでからしばらくたった。
本当ならそろそろなのは対しての不満が出るはずだけど…

「ああー！！もう！！すずか！当たり前さいよー！！」

アリサのバリアジャケットは赤いロングコートで中に着ているのも赤い服に赤いロングスカートと全身赤だ。翼まで赤いし…しかも夕日でさらに赤く見えてるし…

「ふふ、当たらないよ」

すずかがアリサの刀型アームデバイス贄殿遮那あまきりではなく天切をギリギリで避け続けている。

アルビオンが空中に待機しているものの特にすずかからアリサへの攻撃はない。というかすずかが圧倒的にアリサより強いのですずかは遊んでいる感じだ。

「アリサちゃん！刀の振り方俺が教えようかって言ってるのに！」

そう、事の初めはそれだったのだ。俺がアリサにそう問うと…

「べ、別にいいっていつてるでしょ！？……………私が独り占めしたら3人に殺される…」

最後の方まで一応聞き取れているが…誰に殺されるんだろう…？

とにかく、アリサは俺に教わりたがらないのだ。そして一人で練習しているところをすずかが発見したんだけど…ぶっちゃけていうとアリサは周りが見えなくなっている。なのはの様子がおかしいところにも気付いていないようだし…一番弱いというのが思ったより心が負担に思っているようだ。

そういえば、心のほうも調子がおかしい。

「ふえ？……どうかなさいましたか？……兄様。」

なぜか、やたらとスキンシップが激しい。今も俺の腕に腕を絡めて密着状態だ。オカシイ……なんで突然……

「……む………ほおら アリサちゃん行くよ……！」

そしてすずかも俺を見て不機嫌になっている。いや、というか不機嫌になるのはいいけどアリサが可哀そう……

「きやあああ……！！？」

そしてアルビオンの十字砲火で撃墜^{おうち}るアリサ、本日6度目……

「こ、心ちゃん……勝負……っ！」

ああ、アリシアの様子もなんだかおかしかった……新しいストレージデバイスを作っては心に挑み返り討ち。ということを繰り返し8度目。何が原因なんだ……？

Side キヨウスケ

俺が月村家に訪れるととてもカオスな状態になっていた。

「……心ちゃん。」

カナエと腕を組んでいる心ちゃんを呼んでみる。

「キヨウスケさん？……どうかなさいましたか？」

「いや、なんでカナエにやたらとくつついてるの？……どう考えてもそれが原因でこのカオス状態が起こってるんだけど。」

いや、まあ…ある意味カナエも原因だけ…というかなんでこんなに鈍感なんだ？

「…いえ…その…恥ずかしい話ですが昔のことを思い出して…少し怖くなってしまつて。実はこれは私が見ている夢ではないのか…」と心ちゃんがそういいながらカナエのことを泣きそうな表情で見ている。

「…そういえば…俺が見たあの光景つて心ちゃんの過去…だよな？」
「はい…」

過去を見てしまったことに対してはすでに謝罪を済ましてある。しかし、実はまだ気になることがあった。あの時の心ちゃんの気持ちは俺にも流れてきていた。なので分かる…あの時はまだ、心ちゃんにはカナエのことを好きになつてはいなかったはずだ。

「なんでカナエのことを好きに？」
「…兄様のことを好きになつた理由…ですか。」
そういつて心ちゃんは空を見上げた。

Side 心

兄様を好きになつた理由を聞かれて私は生前のことを思い出す。

前世の名前は上梨 心、兄様の名前は上梨 刹季^{せつき}だった。
母は私が生まれて間もなく他界し父は私達を養つたために1人で働いてくれていた…らしい。

らしい、というのは私が物心ついたときには心が弱っていて私達に暴力……いや、もうあれは虐待といえるレベルかもしれない……とモカクそういう状態になっていたので兄様が後で語ってくれたからだ。うん、今思えばあの司会者、私が自殺する前に殺しておけばよかったかも。

それは置いて……と、そうこうしているときにあの事件が起きた。家が燃えたときにあの通りすがりの男の人がいなかったら兄様は死んでいたかもしれない……後に探してもらった時には消防士の方だったということが分かった。

そして、家が燃えた後に残っていたのは父親の死体。ただし、父親が死んだのは焼死ではなく喉を食い千切られてであった。兄様がやったのだけ……

もし、兄様があの男を殺していなければ私が死んでいたかもしれない。それは確か……だけど……うん、キョウスケさんが言うとおりあの時に兄様を好きになったのではない。いや、まあ……そのときから多少ブラコン気味ではあったのだらうけど……

と、また話がずれました………命を救われたから好きになるなんて理由ではなくて、その後のことで私は兄様を好きになったのだ。私はあの時、助けを求めに外に出た。そう、私は動けたのだ。兄様はあの後、病院に運ばれて……一生を病院で過ごすことになった。腕や足を深く傷つけられて体を動かすことすらできない状態になってしまったのだ。

一生病院に入院することになった兄様だが……問題があった。まず、お金の問題だ。それは国が私が仕事を始めるまで受け持ってくれたので問題はなかった。

しかし、兄様の体は徐々に弱っていったのだ。といっても前世で死ぬ4年ほど前くらいになってやっと医師に聞いたのだけれど……そ

れまで私は仕事が終わりに次第病院にいつて兄と面会していた。

仕事は忙しかったが兄様が救ってくれた命なので次は私が助ける番だとそこまで苦に感じていなかったのですけど…

面会中兄様は私の話をニコニコ笑いながら聞いてくれていたのだ。体中の幻痛に耐えながら。私はそれを知らずに兄様としゃべり続けていた。兄様がしゃべっている最中に倒れるまで…医師がいうには幼少期に体験した痛みを脳が完全に記憶してしまっていてそれが寝てるとき以外ずっと再現され続けていたというのだ。

私は兄様が目を覚ましたときに思わず聞いてしまった。痛いならなぜそう言ってくれなかったのか？と。

「心ちゃんに心配かけたく無かったからね。」

私はそのときになってようやく気付いた。兄様があの事件以来、私のことをちゃんづけで呼ぶようになっていたことに。

そして、そのとき気付いたのだ。兄様の近くには誰もいないと。

当然だ。幼少期から親も亡く、友達も居らず…親戚と呼べる人も居なかった。

私は逆で一応だが育ててくれた人もいたし、学校にも行っていた。友達も居たのだ。

「兄様、遠いです。……遠慮なんか…なさらないでください…」

そして、私はこの口調になる。命を救ってくれた、その代わりに働く？…そんな私の自己満足だ。兄様がそうしてくれ、と頼んだ

わけでもないのだ。

外の世界を知らない。友もない、親も居ない…独りだ。孤独…
いや、私の存在が最後の砦で…体を蝕む毒でもあったのだ。

私に来るたびに無理をして起き上がるのは何故か？簡単なことだ。
私が出来なければただ痛みに耐えるだけになる。

私の話を痛みに耐えながらニコニコ聞くのは何故か？人との接触
がないのだ…ただ一つの接触が何より嬉しかったのだらう。

私を呼ぶときの名前がなぜ遠いか、近づきすぎれば心配させ…逆
に会えなくなるからだ。だから、心を離して名前を呼ぶ。だけど、
今ならわかる。兄様が独りだとわかった後なら…兄様はなにより、
人を求めている。

なら、私はどうすればいい？どうすれば今度は私がこの人を助け
ることが出来る？

「こ、心ちゃん？な、泣かないで？俺は平気だから。遠慮なんかし
てないから。」

簡単だ。私が居ればいい。今まで以上に、命を捨てて助けてもら
った命だ。なら、私の全てを使^{いのち}って貴方と共に在ります。

「…絶対に、これ以上…離れないください。」

S i d e キヨウスケ

心ちゃんは生前の出来事を語っていった。
あれ？…でも、今のいつ好きに…？

俺の顔を見て何を考えているのかわかったのか心ちゃんは少し苦笑いを浮かべた。

「ええ、私が兄様を好きになった理由は単純に…」

一息おいて心ちゃんがカナエを見る。

「一緒に居すぎただけですね。」

だからこそ、幸せな今。昔の悲劇を思い出して再びカナエと離れるのが怖くなったのだろう。恐らく、もう彼女達を脅かす存在は居ないというのに…

「あれ？キヨウスケさん？」

さすがが俺にやつと気付いたようだ。うん、カナエの少し後ろに居て、さすががカナエをチラチラ見るたびに視界には入っていたはずなんだけどねえ！？

「ん？アンタは？」

アリサとは初対面、アリサは俺に近づいてきて…

「カナエと心よりマシ…というか普通ね。馬鹿っぱそうだけど…心もちよつとだけ…って感じだし、そろそろなくなれると思うから…あとはアイツだけね」

何かに納得したように、そして何かを確認してブツブツと呟いて一人の世界に入った。

「どういうことだ？」

心ちゃんが俺の横に来て小さな声で説明し始めた。

「…この世界の人間に対しての考え方です。私はこの世界の人たちに…一人しか知らないはずの個人情報を知っていることに負い目を持っていきますから…その…話すときに引け目がある…ということを

見破られてしまっているようです。あ、もちろん引け目があるってことだけですけどね。」

小声を聞きながらアリサの他人を見る目に驚いた。一目で見抜くのはすごい。…そして俺は馬鹿ですよ。そんなこと考えもしなかったですよ。

「兄様は、それが強すぎるんです。だから未だに皆さんに対して心から接していない…」

なるほど…でも…すずか達が可哀そう過ぎないか？

「…そこは皆さんが何とかすると思いますよ。少し、妬いてしまいうすですけど。」

心ちゃんも晴れやかに…言ってくれたらいい話だったんだけどなあ…目に光がない…

「みんなで幸せに仲良く暮らしたい。それが兄様の幸せにもなるし、私の幸せにもなる。だから…早く兄様には本当の気持ちでみんなに接して欲しいです。」

本当に…よくできた妹だなあ…

「…あ、なんでここに来たのか忘れてた…」

俺がここに来たのは理由があったのだ。

「カナエ！…！」

「ん？」

カナエが振り向く。遠い、か…それだけじゃない気がするな…

「なのはちゃんの様子が変わる？…この時期は元からそうなる予定だったはずだけど…」

「いや、それにしてもおかしいって。多分だけど…誰もなのはに声をかけていないんじゃないのか？」

そう、一人に戻った。いや、一人の恐怖を再び思い出したような…

「そうか、この間のロストロギアの…」

「過去を見せる？…トラウマが蘇ったとか…か…それなら…適当に声かければいいかな？」

違和感を覚える。適当に…？なぜ、その言葉をつける必要があるのだろう。

「……………そうしてやってくれ。多分戦闘時に何かやらかすかもしれないから。」

「そうだな。それで原作が狂う…とか笑い話にもならない。」

違和感の正体に気付く。いや、心ちゃんの昔話を聞いたから気付けたのか。

「オマエ、なのはの心配はしないのな？」

「心配してるよ。なのはちゃんがやられたら大変だ。」

カナエは自分の知らない話になるのを恐れているようだ。そしてそれは…この世界の人間を未だに人間として認めていない…ということにもなる。

「…そろそろフェイトとまた戦うんだろ？…見てくる。」

「いや、俺が声をかければ大丈夫だから」

ゲームのように簡単に言うな…イベントをこなせばいいってか？

「じゃあ、行ってくる。みんな！結界の外に出ないように！…なのはちゃんに見つかるからね。」

「…はい」

みんなにも好かれているのに…本人は遠い…ってことか。

「こっそりついて行くか。」

なんか、嫌な予感するし。

マンションの屋上から魔力を探す。地球には魔導師が少ないから探すのは楽だ。

「見つけた。」

俺はなのはの居る方向に向かってマンションの屋上から隣の建物の屋上に飛び移る。さらに隣、さらに隣と常人ではできない動きで跳んでいく。

うん、身体能力だけでできるようになったときは自分も化け物になったなあ…と思ったものだね。

ちようどなのはの魔力の近くに到達したので一番近くの路地裏に飛び降りる。建物と建物の壁を蹴って減速しながら。だって、ノークッションで降りたら痛いし。

そして、目的の茶髪を見つける。いや、なのはだけだよ。

「あれ？こんな夜になのはちゃんは何をしてるの？」

「ふえ！？か、カナエくん！？」

どうやら携帯で何かを見ていたらしく俺の声にとっても驚いていた。

「え、ええと…カナエくんこそ何をやってるの？」

「買い物、ほら。俺もなのはちゃんと同じで機械好きだし。」

もちろん原作知識だけど…すずかに聞いたとかにしていればいいか。

「あ、そうなんだ。……………」

微妙な沈黙。確かに落ち込んでるな。というか焦ってる感じた。

「どうかした？元氣ないけど。」

「え！？うん！なんでもないの！」

ブンブンと頭を振りまくる。もげそうだ…頭が。

「そう？でも、何かあったら相談してね。」

言った瞬間。大きな魔力を感知した。

「！！…うん、わかった。じゃあまた今度！そろそろ帰らないとみんなに怒られるから！」

なのはが走って魔力の流れの方に向かっていく。

まあ、これでアリサとすずかの代わりになればいいんだけど…

S i d e なのは

「レイジングハート！お願い！！」

カナエくと別れてすぐにバリアジャケットを着る。

『なのは！ジュエルシードが近くにあるはず…見える？』

『うん、近くに居るよ！』

『あと、あの子も近くに居るみたいだ。早く封印を！』

レイジングハートを構える。

「！！！」

フェイトちゃんがバルディッシュを構えた。早くしないと！

「リリカル、マジカル！」

レイジングハートがジュエルシードに向かって魔法を放つ。

「ジュエルシード…封印！！」

私の魔法とフェイトちゃんの魔法が同時に浴びせられてジュエルシードは沈黙した。

歩いて近づいていく。

「なのは！早く確保を！！」

「そうはさせるかい！！」

上からアルフさんが飛んできた。

「！！！」

ユーノくんが魔法で防御してくれた。そして、防御が割れたところに居たのは…

「うああああ！！！」

すでに攻撃姿勢をとっていたフェイトだった。

S i d e キヨウスケ

「なんで！？」

確か自己紹介があったはずだ。だけど…目に見えてフェイトに余裕がない。

「お前が！！お前が居なかったらもつと早くジュエルシードを集め

られたのに!!」

「っ！」

フェイトの大振りの攻撃をなのはは多少危うくだけど、完全に避けていった。

フェイトの余裕のなさは異常だ。何があった？

「おはなしを」

「嫌い!!」

フェイトがソニックムーブでなのはの後ろに移動する。

「っ!! デイバイン!!」

それに対してなのははデイバインバスターの姿勢をとりつつ…

「あ…」

フェイトが空振る。そしてなのはがフェイトに向かって…

「バス…っ!？」

「フラクタルバインド。」

灰色の結晶体がなのはを捕らえた。

「カナエ!？」

姿を変えてはいるが間違いない。

「どうして…原作どおりに進まなくなった…？」

「っ! 邪魔だ!!」

フェイトとなのはに間に現れたカナエをフェイトがバルディッシュで攻撃する。

「何があった？フェイト。」

「っ…」

一睨みしただけでフェイトをバインドにかけた。発動が…速すぎる？

「母さんの…調子が悪く…」

フェイトが虚ろな目で答える。強制…？

「…体力を使わせたからか…？…仕方ない…記憶を消してもう一度…」

その一言に、頭の中が怒りに染まった。

「ゼロシフト！」

光速移動でカナエの前に出る。

「なに考えてる…！ここにいるなのはゲームやアニメの人間じゃないんだぞ…！」

「キョウスケ…！？」

カナエはバインドを手放してすぐさま俺との距離をとった。…なぜ？接近戦ならカナエのほうが上なのに…

『イタクア・クトウグア装填です！』

両手に蒼と紅の銃が握られる。

「うおおおおお…！」

ネクロが出てくれた蒼の銃をカナエに向かって放つ。

「っ！邪魔をするな…！心のためにも原作を変えるわけにはいかないんだ…！」

カナエがラウンドシールドを展開してイタクアを防ごうとする…が
「甘い…！」

イタクアの銃弾の軌道が小刻みに変わりカナエのラウンドシールドを避けてカナエに直撃する。

「…ユーノとアルフはなのはとフェイトを連れて退け！」

「っ！フェイト…！」

「なのは…！」

落ちていくフェイトとなのは。たく…一番原作崩しているのは誰だよ…

「あつ！ジュエルシールドが！！」

ユーノはどうやらアルフにジュエルシールドを奪われたらしい。

「よくもやってくれたな…キョウスケ…」

いつもの飄々とした掴みどころのあまりない笑みが消えた状態でカナエがこちらを睨む。

「…お前がわかっていないだけだ…ゲームじゃないんだぞ？」

イタクアを構える。なぜだろう、原作が変わったと気付いてからカナエにも余裕がない。

「…心の安全を確保するためにも…予想外の事態を起こしたくないだけだ。」

構えた俺に対してカナエは無手。…まさか…デバイスを持っていないのか？

「…そんなこと、心ちゃんは望んでいないだろう？」

「っ…！わかったような口を…っ！！」

小刻みな動きで俺に近づいてくるカナエ。そして余裕のなさはそのいうことか。

「いけっ！イタクア！！」

一息に6連射。銃並みの速度と変化する軌道、これを避けられる人間は確実に人間をやめている。

「くっ」

悪態をつきながらカナエは正面からギリギリの所でイタクアの銃弾を回避した。というか、人離れしすぎだろ…そういえば俺、カナエの能力道具作成しか知らないな…身体能力強化か？

懷に飛び込んできたカナエは両手を前に構え…殴る気か！？

『イタクア破棄、ブレードトンファー装填！』

ネクロのフローのおかげでいつの間にか放たれたカナエのパン

チをブレードトンファーで防ぐことができた。

というか、なに？このチートスピード…

「クトウグア、神獣召喚！！」

紅の銃が咆哮をあげた。

「っ…召喚…！？仕方ないか…」

展開された炎の化身を相手にカナエは後ろに下がった。

「良かったな。キョウスケ…強敵認定だ。…エクスカリバー。」

そう呟いたカナエの手に持たれていたのは黄金の聖剣。あれって…某運命に出てくる超火力聖剣じゃ…

「^{エクスカリバー}約束された勝利の剣！！」

「クトウグア！！」

神獣形態のクトウグアが身を盾にして俺を護る。大丈夫だ。このままなら、耐えられる。

「俺に、魔力切れがあると思うなよ？二連撃目だ！^{エクスカリバー}約束された勝利の剣！！」

二度目の閃光にクトウグアと共に光に吞まれていく。

「ゼ……………」

俺が発した言葉も光に吞まれた。

S i d e カナエ

「…ちっ…どうやって元に戻せば…」

閃光に吞まれたキヨウスケは放っておいて原作の流れに戻す方法を考える。

「…一人の人間…か…みんなには遠くから接しすぎたな…」

冷静になれた今ならキヨウスケの言っていた意味もわかる。心の安全と叫ぶ、心が離れていくのが怖かったただけなのだ。俺が健康になった以上…心が俺と共に居てくれる確証もないのだ。

「でも、それでも…心と一緒に居たい…前世では迷惑をかけすぎたから…」

拳を握る。俺は戦う力を手に入れた。

「俺が居て…窮屈かもしれないけど…安全になったら離れるから…それまでは…絶対になにがなんでも…誰を犠牲にしても守り抜かなくちゃ…」

「心ちゃんがそれを望んでいなくてもか？」

「っ！まだ…」

「心ちゃんはみんなで笑える未来が欲しいっていつていた。」

「そつだろつな…心は優しいから…だけど…俺がいたら心は俺に遠慮してしまう…だから、心が安心して暮らせる世界を作るまで…俺は…」

後ろを振り返るとキヨウスケが呆れた顔をしていた。

「お前は…難しく考えすぎだ…うん、最近のアニメの悪者みたいだ。」

「最近のアニメの悪者…？ああ…なるほど、悪者なりの正義…ってことか？」

「悪者でいいさ…それが…心のためになれるのなら。」

Side キヨウスケ

「本当に…お前たちは互いのことがわかっているのにわかっているんだな…」

カナエも心ちゃんも、ここまで互いを想い合っているのに相手が離れるのが不安で。相手が不幸になるのが嫌で必死になる。

「ネクロ…相手に記憶をぶつける方法はあるか？」

『できますよ？相手の抵抗が薄れているときなら簡単に。』

「つまり、アイツを気絶させればいいんだな？」

『はい』

そうとなれば…昼間の心ちゃんとの会話…の一部省略を送ろう。うん、心ちゃんに黙ってカナエのことを心ちゃんが好きだということとを伝えたら殺される気がする。そこは省こう。

「お前が悪者でいいていうのなら…最近のアニメの主人公っぽく手荒に考えを直させてやるよ!!」

カナエがまた構えを見せる瞬間に…

「アトラック・ナチャ!!」

蜘蛛の巣が悪者を捕らえる。

「なあ…ネクロ…いま、このタイミングで言いたい台詞があるんだ。付き合ってくれるか？」

『はい!』

じゃあ、はじめよう…大馬鹿者を改心させるために。わ…かりあうために。

「カナエ!今からお前に俺の記憶をぶち込む!昼間、心ちゃんが言っていた言葉だ!!」

「な、何を…?」

「起きたら、みんなに謝れ！心ちゃんだけじゃなく…アリサやすずか…アリシアちゃんにも！」

手の中に何かを集めるようなポーズで構える。

『ナアカルコード送信！！』

手の中に光が宿る。そのまま両手を広げる。そして、背後に浮かぶ五芒星の魔法陣。

「うおおおおお！！！」

右手を天に掲げる。手から溢れる光が辺りを照らす。

「光射す世界に…汝ら闇黒…棲まう場所無し！」
手をカナエに向ける。

「くっ…外れない…逃げれないか…」

再び手を振りかぶる。

「渴かず飢えず、無に還れ！」

そう、そんな暗い思いは無くしてしまったほうがいい。
カナエに近づく。光の手を、カナエに向けながら。

「レムリアアア！！！！」

光の手はカナエに触れて…

「インパクト！」

『昇華！！』

暗い思いをこの光で消し飛ばす。

触れた地点から大爆発。一瞬、全ての音を飲み込み光は広がった。
空中でなかったら地表が抉れていただろう。

『…やりましたね。記憶の転送も終わりました。…あとはカレをつれて戻りましょう。』

「そうだな、ネクロ。」

俺はボロボロになりながらも軽く笑みを浮かべて気絶しているカナエを背負って家に帰ることにした。

「というか、ム力つくな…さすが男の娘…ボロボロの状態で笑ってるとか普通なら気持ち悪い人間のはずなのに…」

見た目が女だからか、かなり絵になっていた。

Side カナエ

気絶している間にキョウスケの言っていた記憶が頭にながれこんできた。

確かに、俺は色々勘違いしていたのかもしれない。今でも原作通りに進めるのは間違っていないと思ってはいるが…もっと、この世界でちゃんと生きていこうと思えた。じゃあ、まずは…心配しているみんなに起き上がって報告しないとな。

「あ、やつと起きた…よかった…お兄ちゃん」

「お兄さん…大丈夫？」

「ちよつと、カナエ…本当に大丈夫？」

「兄様…私…」

一番近くに居た心の頭を撫でる。うん、周りが少しムスツとしているけど…その表情が自分を見てくれていると改めて理解した。だから、次は俺がみんなを見ていこうと思う。

「ありがとう。…俺、これから頑張っていくから…よろしくね。すずか、アリサ、アリシア…心。」

みんなは一瞬キョトンとした表情になったが、それぞれ可愛い笑みを浮かべた。

「うん…！」

そのころ、キョウスケは

「みんな…一応俺のおかげなのに…っ！」

『さすがに…ボロボロはまづかったですね…』

バインドで縛られた上でアリサとすずかとアリシア、心の4人にボコボコにされて放置されていましたとさ…まる。

第6話 「わかりあえない気持ちなの？」（後書き）

キョウスケ「なに・・・このオチ・・・」

イリスヴィア「せっかく目立ったのにね」

カナエ「でも、俺はちゃんと感謝してるよ？」

なのは「あの・・・」

イリスヴィア「うお！？なのはが来た!？」

なのは「私の出番・・・」

全員「・・・・・・・・・・」

カナエ「だ、大丈夫・・・俺が原作介入し始めたら出番増えるから!」

なのは「それって・・・いつ？」

カナエ「・・・・・・・・・・」

なのは「・・・ディバイン・・・」

カナエ「ああ・・・とうとう、俺もギャグ要員に・・・」

なのは「バスター!!!!!!」

イリスヴィア「ぎゃあああああ!？」

カナエ「・・・あれ？」

なのは「・・・次回第7話『なのはとキヨウスケとクロスケ・・・とユーノくんの邂逅』・・・なの!？やったよ!!出番つ!!!!」

キヨウスケ「え・・・またおれ?これ死亡フラグとかじゃないよな!？」

第6話終了時設定（前書き）

設定です。

第6話終了時設定

かみなし
上梨 刹季 さつき

男

カナエの前世。親の暴力から身体障害をひきおこしそのまま病院生活を約20年過ごし死去。性格の歪みは対人関係の少なさからかもしれない。

上梨 心

女

心の前世。実は前世では心が人気美人タレントという設定をはつきり出してやりたかったけど断念。ということとここでとりあえず情報を公開。可愛くて綺麗で美人という容姿から男女からの支持が沢山あった。

あと、恋人関係のうわさはなし。兄に尽くすよく出来た妹としても有名になっていた。

なお、遺書に色々と書きちゃったらしく兄に知られば羞恥心で死ぬること。

アリサ・バニングス

女

覚醒したアリサ。ロストログア、幻影屋気楼（読みはそのまんま）を取り込んだおかげで大量の魔力をえる。

デバイスは非人格の刀型アームドデバイス。名前は天切。

見た目は真っ赤、3倍の人以上に真っ赤。ヴィータといい勝負。

第6話終了時設定（後書き）

カナエ「あれ・・・？なんかてきとつな感じが・・・」

イリスヴィア「・・・・・・・・・・・・・・・・」

カナエ「おい。」

第7話　なのはとキョウスケとクロスケ・・・とユーノくんの邂逅（前書き）

やっとPCが復活しました！！長かった…っ！！

そしていつの間にかPV4万　ユニーク6千突破という嬉しい事態に。

本当にありがとうございます。

第7話　なのはとキョウスケとクロスケ・・・とユーノくんの邂逅

Side　キョウスケ

「いくら5月になりかけだからって1日中外に出てるのはすごく寒いと思うんだ。」

俺こと式神キョウスケは今、海鳴公園の茂みに隠れています。カナエの出した某魔法使いの透明になれるマントを使って。

なぜ、こうなったか？と聞かれると…こう答えざるを得ない。悪魔があらわれた！と。

まさか、本心を出した状態がさらに黒化するとは思わなかった。俺としては多少態度が軟化するかなあ？と、いや、デレとかではなくて。というかヤメロ。女顔だからってデレられたらすごく困る。具体的に言えば似合ってるせいでマジで可愛いとか、うん。自分で言ってるスゲエキモいからこれ以上の自爆はやめる。

「…ここでの勝負に介入しろ。とか…鬼畜すぎる…」

ここは初めてクロスケ…クロノ・ハラオウンが出てくるシーンだ。つまり、管理局にアンノウンのまま関われと言ってきているんだ。これを悪魔といわずしてなんという。まあ、いざとなったら頼っていい。と言ってきていたので何か対策はしてあるんだろうけど…いや、なんだろう。頼った後も碌な結果にならない気がしてきたぞ？

『ご主人様！来ましたよ！！』

ネクロの言うとおり桃色の魔力光と黄色の魔力光が近づいてきた。

S i d e なのは

「あれ？」

ジュエルシードの気配を感じて向かった先には既に封印状態のジュエルシードがあった。誰が封印したんだろう…？

「なのは！！」

『f l i e r f i n .』

ユーノくんの声と一緒にレイジングハートが私を空に飛ばす。

「っ！フェイトちゃん…」

「くっ、外した…っ！そのジュエルシード…私が貰う！！」

フェイトちゃんは焦った様子で私にバルディッシュを振ってくるでも、そんなに焦った振り方じゃあ…

「当たらないよ！！フェイトちゃん！！」

空中で宙返りして避ける。

『D i v i n e S h o o t e r .』

さらにデイベインスフィアを展開してフェイトちゃんの周囲を囲む。

「この前の人が言ってた…フェイトちゃんのお母さんのことも含めて…お話、してくれないかな？」

「煩いっ！！」

そういつてフェイトちゃんはバルディッシュを振る体勢になる。

「シュート！！」

フェイトちゃんがバルディッシュを振る前に待機させたスフィアでデイベインシューターを撃ちこむ。

爆発音と爆煙でフェイトちゃんの姿が見えなくなっちゃった。

「なのは、これはもうスフィアを待機させた時点で勝ちだったんだ

からちよつとは手加減しても良かったんじゃないかな?」

爆煙が晴れたその先に、今までの戦いで2回合った男の子がまたそこに居た。

「え…?え?」

どうやらフェイトちゃんは無傷のようだ。多分、あの男の子が護ったのだろう…ただ、なんでお姫様抱っこなのかな?

そして、助けられた本人であるフェイトちゃんも助かったことと今の体勢に対して混乱した表情でいた。…というか加減はしたよ?…ちよ…っとおはなしを聞くために気絶してもらおうと思ってただけだから。

「バルディツシュ、武装形態解除ヨロシク。俺は戦う気はない…ただ、プレシアさんの体調が悪くなったっていうのはここに居るこの子、なのはちゃんのせいじゃないっていうのはわかってくれ。」

「え?なんで…母さんの名前を…」

「…えーと、秘密?」

すごく…怪しい。

「と、とにかくここに居るこの子のせいじゃなくてさ…えーと、うわ…説明しにくい…」

男の子が考えている間もフェイトちゃんはお姫様抱っこ、冷静になつてきたのか混乱の表情ではなく恥ずかしさで顔を赤くしている。…私もあれは恥ずかしいと思う。でも考えてるから話しかけられないし…

「俺の知り合いの…」

「そこまでだ!…!」

Side キョウスケ

「ええー…このタイミング？」

思わず呆然と呟く。そしてフェイトは新しく出てきた魔導師の黒髪
の少年を警戒して遠くに離れた。

「僕は管理局の執務官クロノ・ハラオウンだ。」

「管理局！？逃げるよ！フェイト！！」

「あ、居たんだ。アルフ」

「まって！フェイトちゃん！！」

「ちよつ、君達…僕の話を…」

「く、その銀髪のボーヤ！こんど会ったら容赦しないからね！！」

「な！？待てっ！逃がすわけには…！！」

なんて、カオス…っ！！

結局フェイトとアルフは逃げてしまった。いま少し痛い空気です。

「コホン…えーと、君が高町なのはだね？現地協力者の。」

「な！？なんで名前を…っ！！」

場の空気（クロノに任せたのはとつてもアレだが）を整えたクロ
ノは聞き捨てならないことを言った。

「うん？知らされてないのか？…地球^{こく}生まれの執務官が現地協力者

である君達の名前をあげたんだが…」

「お、俺の名前も知っているのか!？」

クロノはフムと顎に手をあて一瞬考えた後何か思い出したような表情を浮かべた。

「ああ!そうだった。サプライズだそうだ。いや、まあ、面倒臭そうな表情で言ってたから本心かどうか分からないが…とにかく、上梨という名前に聞き覚えは？」

「…っ、いざとなったらもなにもちゃんとサポートしてくれてるじゃないか…」

顔が勝手に苦笑いの表情を浮かべている。うん、微妙に素直じゃないな。

「了解!俺はともかくそつちのなのはの方は管理局については何も知らないから説明してもらっていいか？」

「わかった。君達!」

クロノはこちらを黙って見ていたなのは達を手招きする。

「色々現状確認したいからついてきてくれ。それと、もう一人執務官がいるんだが、キヨウスケ…君に会いたいらしい」

「は?俺に…?」

誰だろう?まさか奴本人ではあるまいし…

「こんにちは、キョウスケさん。」

「心…ちゃん？」

「兄様に貴方のサポートをお願いされました。」

うん、それはわかった。わかったんだけど…

「なんで…俺、首絞められてるのかな…っ！？」

俺、今リアルタイムでお花畑が見えているんだが…！？

というか、いくらそのデバイスが鞭だからってこの使い方は間違えてないか！？首括って吊るのはロープで十分だ…っ！！

「いえ、ただの八つ当たりです。兄様と一緒に居られないことに対する。」

「う…ん、なんとなく…わか…って…た…ガク」

S i d e なのは

時空管理局という組織についての説明を聞いた後、クロノくんがもう1人のあの銀髪の男の子を呼びに行った。

「うーん…それにしても、誰かいたかな…？管理局の人なんて…」

「うん、それは僕もちよつと疑問。なんで僕達の事情を深く知っているのかも気になるしね。」

そう、ユーノくんが言う通りで私たちがジュエルシードを集めている理由まで知っていたのだ。

「それに…その…ユーノくんが私と一緒に風呂に入ってたことまで知ってたし。」

「い！？いや、それはっ！！本当にゴメン！なのは！！僕も知らなかったんだよ。最初は人の状態であつたと思つていて…」

むう！…私はいつの間にか男の子とお風呂に入っていたのです。それも同じ年くらいの…

私が一番仲が良かった男の子でもそれはない。…そういえばカナエくん何してるのかな？すずかちゃんとかアリサちゃんも…最近どこ上の空だつたし。

「あれ？…最近もカナエって言う名前をどこかで聞いたような…」
どこでだっけ…？

私達2人しかいないにしては広すぎる部屋にその呟きに反応する人間は居なかった。

「…なにしてんだ？」

「ふえ！？」

いつの間にか銀髪の男の子とクロノくんが部屋に入ってきていた。
「なのは…寝てたよ…」

私の意識のないうちにどうやら人間形態になっていたらしいユーノくんは苦笑いを浮かべていた。

「そういえば自己紹介がまだだったなのは、俺の名前は式神キヨ

ウスケ。一応同年だ。」

「へ？あ、えーと…私高町なのは、年は…」

「だから知ってるって。」

私のことを知っている人に自己紹介って難しいと思うの。

「私は心・Ｔ・カミナシ…一応地球生まれの魔導師です。」
「ぶっ！」

となりにいた黒髪の女の子の自己紹介に噴出すキョウスケくん。
なんでだろう？

「なのはちゃんには前に一度お会いしてますよね？」

「あ！！あのロストロギアの時の！！」

ということは、もしかして私たちのこと調べたのは心ちゃん？

「ごめんなさい。あの時は私も少しパニックになっていました…」

「あ、いえいえ…」

思わず頭を下げてしまう。あれ？でも心ちゃんちょっとだけど私より見た目幼くないかな？

「…ああ、私は8歳ですよ。私が年下ですね。」

そういいながら笑う心ちゃんは私よりも…というよりすでに大人の雰囲気醸しだしていた。

Side キョウスケ

「よろしくお願いします!!」

えーと、なのはがレイジングハートを俺に向かって構えている。

うん、なんでこうなった?

「では、私達はあちらで模擬戦をしていますので…」

そういつて心ちゃんはクロノと一緒に別室に向かっていった。

なぜこうなったか…原因はわかるんだけど…

回想

「戦力確認…?」

俺たちの前に現れたリンディさんは少し考えるそぶりを見せてニコリと笑った。

「私達はあなたたちの実力をちゃんとしりません。どのくらいのことを任せられるか…というのを早めに見極めておきたいの。」

「いいですよ。だけどすぐに終わらせましょう。」

そういつて少し不機嫌へといつても他のみんなにはわからないくらい(の)な表情で心ちゃんが訓練室に歩いていった。

回想終了。短いと言うな、本当にこれだけだったんだからさ。

「いいよ、なのは。はじめようか」

『Z・Oサイズ展開!!』

手に漆黒の鎌を握る。自分の強さの具合はフェイトと同等くらいで戦ってやろう。いままで、ともに戦ってなかっただろうから。

「デイベイン」

『Buster!』

「いつ!?!」

情け容赦ないいきなりの一撃に反応できず思わず体を硬直させてしまった。

『シールドビット展開!!』

輝く光が視界を覆いつくす。しかし、ネクロが出してくれた緑のシールドビットがデイベインバスターを完璧に押さえてくれている。

「くそ、いきなり容赦ないな…なのは…?」

シールドビットの先になのはの姿はない、一瞬疑問に思ったが

『Flash move!』

「デイベイン!!」

「ゼロシフト!!」

すぐに答えは出た。高速移動で背後に回って連続デイベインバスターを行うつもりだったのか…

「後ろだ!」

でも、なのはは俺の背後に回ったはいいが俺のゼロシフト…亜光

速移動にはついてこれないか：このまま終わらせる！

未だに背後の俺に気付いていないのか俺がZ・Oサイズを振っても反応はない。

『Protection.』

しかし、俺の動きに対応したのはレイジングハートだった。振ったZ・Oサイズは魔力の壁に阻まれダメージが通らない。

「え！？」

やっと、反応したか。というか、ゼロシフトやべえ：0、01秒以下という使用条件を外れない範囲で動いても体が軋む。それに連続しようにすれば確実に体を壊してしまう。…なのは相手に使うの止めようかな…

「ほれ、プロテクション砕けるぞ？」

「っ！」

呆けた表情になっていたのはだがプロテクションが砕けるギリギリで俺のZ・Oサイズの範囲から逃れた。

「速い！それにフェイトちゃんより余裕がある…なら…っ！」

『Divine Shooter.』

8つのスフィアが宙に浮かぶ。というか8つか…

「シュート！！」

「ネクロ！武器はZ・Oサイズのままでいくから…新しい武器を展開する必要はないぞ。」

『わかりました。ご主人様』

Z・Oサイズでスフィアを薙ぎ払う。しかし…

（8つ全ては防ぎきれない…っ！）

「なら、当たりそうなものだけを防ぐだけだっ！」

そう決めてなのはに向かって突撃する。

「っ！！」

正面から向かってくると思っていなかったようでののはの動きは鈍い。

「終わり…っ」と

Z・Oサイズをなのはに向かって振る。

『Round shield.』

再びレイジングハートにガードされるが問題ない。

「押し切るっ！」

ラウンドシールドを砕いた勢いのままなのはを吹き飛ばす。…加減はしたぞ？

「あう…負けちゃったの」

そういつて吹き飛ばされたなのはにははと笑いながら俺を見た。

「あの、よければまた訓練してくれないかな？」

なのはは少し恥ずかしそうにこちらの様子を伺った。うん、というか訓練はもとからしてやる気だったし。

「もちろん、こっちこそヨロシクな、なのは。」

そういつて俺はなのはに手を差し出した。

「あ、うん…！よろしくなのっ！」

なのはと握手を交わす。と、そこでふと視線を感じそちらに目をやると…

「うおっ！？もう終わったのか！？」

「はい、ストレス発散するように一瞬で。」

心ちゃんがこちらを見ていた。その横でクロノが気絶しているがそこは気にしないようにしておこう。クロノ、ダセエとか思ったけど。

「はあ…でも、兄様に根源退治のせいであえないとは…仕方ないことといえば仕方ないですけど…私も行きたかったです…」

どうやら、未だにストレスは溜まっているようだ。こちらに向かうことのないことを祈っておこう。

「心ちゃん！私とも模擬戦してください！！」

「ちよっ！！なのは！！」

心ちゃんの微妙な心境に気付いていないのかなのは心ちゃんと模擬戦するという暴挙を口にした。

「…ふふ、いいですよ…」

そして、嫌な笑みで答える心ちゃん…ああ、加減なしか…

「いきますよ！」

心ちゃんが2つのラストを使い器用に別々の軌道を描く線を銀色の鞭で生み出す。

「っ…避けれる気がしないの…だけど！」

なのはは一度さがった。恐らくデイベインバスターを撃つために範囲外に逃れたのだろう。

「デイベイン！！」

「フォトンショット・ブラスト！！」

「Ok！」

なのはのデイベインバスターの構えが見えた瞬間心ちゃんは2つのラストの鞭部分から数えるのも億劫になるくらい量の銀色の魔力弾をランダムな方向に撃ちだした。というか、これ俺も避けれる

気がしないんだけど…

『Protection.』

しかし、その魔力弾はレイジングハートのプロテクションで防がれた。でも、心ちゃんの攻撃は未だに終わらない。この魔法を発動して約5秒間の間に恐らく100万くらいの魔力弾を生み出しただろう、そんな数の暴力に対応できる人間はそういない。

「うう…これじゃ防御以外できないの…」

なのは言うことももつとだ。一瞬気を抜けばこの暴風に呑まれるとなると一度防御してしまった以上既に手詰まりだ。

「ラスト、3つ目。」

『Yes.』

そして突然心ちゃんの前に現れる腕輪。どうやら、あのビームみたいな鞭部分は腕輪から出ているようだ。

「ピアシング!!」

『Shoot!』

腕輪から細い銀色の線…というかレーザー？が放たれる。というか、これ終わったな。

「きゃあああああああ!!」

レーザーは呆気なくプロテクションを破り、破れた瞬間嵐のような魔力弾がなのはを襲った。

（俺よりチートっぷりが酷い…心ちゃんも魔力無限？）

20メートルくらいの有効射程がある鞭にあの嵐のような魔力弾を生み出す魔法。そして最後の貫通力のある魔法。弱点があるとすれば味方も巻き込む可能性があるくらいか？

「…少しはストレス解消できました。ありがとうございますなのはちゃん。」

そういつて笑みを浮かべる心ちゃんに恐怖を感じたのは俺だけじゃないはずだ。というかクロノごめんなさい。貴方は勇敢でした。

俺は戦う前から負けでいいと思ってしまった。

「では、結果報告にいきますか？キョウスケさん。」

先ほどより少し機嫌のいい心ちゃんは1人でリンディさんのところへ向かっていった。

「……で、どうするんだ？この状況……」

なのは「……ダメージで気絶。」

クロノ「……同様の理由で気絶。」

こんな結果を残してアースラに来て1日目は過ぎていったのであった。

「いきますよ」

「ギャアアアアア！」

その後俺も犠牲になりましたとさまる。

S i d e カナエ

「カナエ執務官、本当に君一人でいいのか？」
目の前のおじさん：ゼスト・グランガイツは心配そうにこちらを

見ていた。

「かまいませんよ。それに管理局からの指示ですし……持ち合わせの質量兵器にも使用許可がありましたし……俺の目的は排除です。本当は関わるつもりはなかったんですが気が変わりました。やつらのせいであの子たちが不幸になってたって知ったので容赦するつもりはありません。他の人についてこられたらある意味で足手まといです。」

「しかし、相手は反管理局の組織でもトップクラスの規模だ。質量兵器も持っている。その殲滅を君のような子供に……いや、違うな。子供というには君は強すぎる。が、君一人というのは俺は反対だ。」

つまり、俺一人で行う任務に同行したいということなのだろう。だけど……

「今は、貴方のほうのことを考えてください。なにか怪しい雰囲気なんでしょう？俺が言うのもなんですが、貴方の部隊で強いのは貴方とクイントさん、メガーヌさんだけだ。貴方一人ではどうしようもないことが起きたときのために部隊全員の練度はあげたほうがいいですよ。なんなら今度俺も教導に参加しましょうか？」

暗に俺は必ず帰ってくるという言葉を含めて笑みを浮かべる。ミッドに来てからまだ数日だがゼストさんに出会ってよかったと思っている。この世界の人間と本当の意味で一対一で向き合ったときにこの人の理想は気高いものだと思えたのだ。そんな彼に汚れた正義は似合わない。だから、彼には同行して欲しくないし。何より、命令とはあるが個人的にもあの組織を許すつもりは全くないのだ。とりあえず、末端を潰していき情報を聞き出しながらトップを潰す。不死鳥と呼ばれる組織だろうがトップを見せしめしながら殺してしまえば再生する気にもならないはずだ。

俺の言葉の真意が伝わったのだろう。少しゼストさんは困ったような顔をしたが笑みを浮かべる。

「わかった。だが、今回の任務は特別なケースだ。管理局が殺人を

許可するほどの…それだけこの任務は重い…今までも局員が何人か死んでいる。…気をつけろよ。」

「ええ、彼女達のためにも死ぬわけにはいかないですし。やるべきこともある。大丈夫ですよ。俺は強いですから。」

「ふ…そうだったな。」

そうやって俺たちは笑いあう。さて、俺もハッピーエンドのために動きますか。

第7話　なのはとキョウスケとクロスケ・・・とユーノくんの邂逅（後書き）

カナエ「出番少ない…」

キョウスケ「というか俺ユーノと会話したか？」

イリスヴィア「ある意味タイトルどおりだろ？」

カナエ「というか久々の更新について何かいうことは？」

イリスヴィア「本当に申し訳ありませんでした。」

クロノ「というか、僕の出番も少なかったような…」

キョウスケ「心ちゃんにフルボッコだもんな」

クロノ「うぐ…しかし、それは君もだろう？」

キョウスケ「ぐは…」

カナエ「アホだな、お前ら…」

クロノ「ん？どうした…？これを読め？…次回、『それぞれの決戦』へえ…珍しく真面目なタイトルだ」

カナエ「というか、さすがクロスケ。久々の更新で主人公である俺からタイトルコールを奪うとは…」

第8話 「それぞれの決戦」(前書き)

パソコンが復活したわけではないですが一応書けたので。

もし、今まで待っていてくれた方が居たのならお待たせしました。
そしてどうもスイマセン。

第8話 「それぞれの決戦」

Side キョウスケ

「で？なんで俺はクロノと模擬戦することになったんだ？」

「こつちが知りたいよ…なんでわざわざ管理局から命令が…」

そう、俺とクロノは何故かアースラの訓練室を使って模擬戦をすることになったのだ。いや、何故かっていつても理由はあるんだけどね。

「僕が認めれば執務官だなんて…」

管理局が俺の存在を知って何らかの方法で俺を局にいれようとしているのはわかる。

だけど、いくらなんでもこの方法はないだろう。普通。

「僕自身は君を推薦してもいいんだが…なんだか複雑だな。」

（そういえば、何回かおちてるんだっけ？）

そうになると、認めてもらうのに相応しい力を見せなくては…クロノに申し訳ない。なら…

「とりあえず。俺達が驚かされた以上に管理局を驚かせる戦闘データ送ってやろうぜ！」

『ご主人様、ネクロノミコン起動します！』

バリアジャケットを展開してクロノに相対する。

「ガンスレイヴ展開！」

俺の魔力は無限。ならば俺に出来る戦い方は多分これが一番正しい。

「多いな…」

俺と同じくバリアジャケットを展開したクロノはストレージデバ

イスの杖を俺に向けた。

「受けてみなっ！これが俺の…」

『私達ですっ！』

「…俺達の全力全開だ！」

S i d e カナエ

「ふふっ…キョウスケたちの慌てる顔を直接見れないのは残念だけど…」

俺は目の前に突っ伏している男にハイエンドを向ける。

「ヒッ！しゃ、喋るから！」

「他のアジトはどこ？」

「み、南の森の泉がある場所だ。も、もういいだろうっ！？解放してくれ！」

男は震えながら俺に視線を向ける。

「人間も四肢の骨を砕かれたら芋虫と大差ないね。」

男の震える様に少し心音が高鳴る。まだまだ…人間って頑丈だよね？

「他の組織の情報も教えてもらっね…」

「なっ…それは勘弁してくれっ！殺されちまう！」

「ふふっ」

必死の形相で俺にお願いするのが少し可笑しくて思わず笑ってしまった。

「大差ないでしょ？言わなければ今死ぬし…管理局は、本当に危険な敵に対しては…甘い組織じゃないよ？」

バンッ！

躊躇いなくハイエンドの引き金を引いて実弾を男の額に放った。

「ふふ…ふふふふ…さあ、喋ったほうがいいよ？」

呆然とする男たちの視線を受けながら俺はどうやって情報を聞き出すかを考えていた。

反管理局組織フェニックス…不死鳥の名を名乗る組織。構成員、規模どちらをとっても反管理局組織としては最大級の組織だ。しかし、それだけではなく…フェニックスは名前の通り…とまではいかないかもしれないが多少末端を制圧したからといって規模が減ることはなかった。まあ、そこは局が甘かったのもあるけど…それでも、とても厄介な組織に違いはなかった。

「管理局の人間がこんなことをして…」

「許されるよ？だって、そもそもお前たちなんていないんだもの。」

厄介な組織ではあるけど…自分には関係がない。そう思っていたんだが…

「それに可愛い妹分を不幸にしたあんた達には慈悲も与えるつもり

はない。」

最大の組織ということは他の犯罪者たちとも繋がりがあるということでもある。例えば…情報の交換…本来なら出回っていない機器の受け渡し。

「まさか、プレシア・テストロッサがお前達の操り人形だとは思わなかった。」

正確には利用しているだけなのだが…それこそ大差ないだろう。

「娘の死につけこみ、犯罪を唆し…ついでに管理局の目を奪わせる…いや、末端のあんた達に言ってもわからないかな？ともかく、あんたたちのせいで不幸になった娘がいて、俺はその娘の身内だったただそれだけだよ。」

そういつてまたもう1人の男にハイエンドを向ける。

「だから、ほら、死ぬ前に吐かなくちゃみんな殺すことになるよ？」

S i d e なのは

私たちがアースラに初めて行った日から数日。私は今、アースラの中にいます。それだけではなく、訓練室に来ているのです。

「はあっ！」

「うおお！」

キヨウスケさんとクロノくんが先に来ていたようです…というか、2人とも全力つぱいので声はかけません。危ないから。というかなんでこの2人はこう…仲が悪いような良いようなという状態を保っているんだろう？

「はあ…」

今日はキヨウスケさんと訓練しようと思っていたのに…クロノくんと仲がいいのはわかるんだけど…

「助けてもらってばかりだし…」

何度かジュエルシードを取りに行ったことがあるけど、その度にキヨウスケさんに助けられている。

「はあ…」

気付いたら、2人の戦いは終わっていた。

「兄様、兄様兄様兄様兄様：っ！」

会いたくて会いたくて部屋で転げ回る。たった数日？兄様には4時間ごとくらいに会いたくなる。

キヨウスケさんと戦ったらしいあの日から兄様は私達にとっても甘くなった。

私達というのが残念だがそれでも満足していたのだ。あの情報を聞くまでは…

「反管理局…組織」

思い出しただけでイライラしてくる。

「…兄様あゝ…」

自分でもビツクリするくらいの甘い声がでた。私の思考の割合は9割が兄様関係1割がその他だ。そういえば、前の世界ではどうなっているのだろう？あの遺書が公表されているとなると死ぬる…うん、恥ずかしさ的にも社会的にも。自分の容姿が優れているのは知っていたから芸能界でもかなりの人気がある方だと自覚している。その人間が遺書で超絶ブラコン宣言。しかも自殺、兄の死体の横で。

「兄様が知ったら私は死んでしまふ。」

「何を？」

「ふえっ！？」

いつの間にか兄様が私に通信を入れていたようだった。

「いつから聞いてました！？」

Side キヨウスケ

「合格だ。全く、こんなことしなくても……あれ？試験をさせたら全く合格する気がしない。」

なんか、クロノが失礼な事を言っているような気がするが気にしない。というかできない。

「ゼエツ…ハア…ツ…なんで、そんなに強いんだよ…っ」

乱れた息を整える。デバイスが俺が知っているクロノのデバイスじゃないことも疑念だ。

「ん？心執務官が兄から僕に贈り物といって渡されたらしい。」
カナエかあああ！

「ずいぶん馴染むんだ。このデバイス。それにこの残留魔力を再利用するためのシステムもすごく使える。S2Uでどうしようもない時に使うようにとっていらしいが…これは過剰だな。」

どうりで、強い砲撃魔法まで使って来たわけだ…

杖型の黒いデバイスを嬉しそうに扱うクロノ。クロノって強かったんだなあ…

「君は勘違いしてないか？君が得意なのは遠距離射撃だろう？それ

でもこの強さだ。誇っていい、それに力も出力も押さえているようだったしな。」

そうだけど…

「クロノ執務官。少しの間、私を戦線から外してください。別の任務が入りました。」

いつの間に入って来たのかわからなかったが心ちゃんが訓練室に入ってきていた。後ろになのはがいるようだけど、なのははなんだかソワソワしている。

「わかった。」

「では…」

短いやり取りだったが、あの様子はカナエ関係に間違いない。

「あ、あの。キヨウスケくん。」

「ん？どうかしたか？なのは…」

真剣な様子で話しかけてくるなのはに俺も姿勢を正す。

「私の訓練に付き合ってくださいませんか？砲撃戦のやり方を改めて、フェイトちゃんにちゃんと勝ちたいから。」

…確かに、このなのはは原作のなのはに比べて実践経験が少ない。つまり、フェイトに一勝出来ないかもしれないのだ。フェイトの様子もおかしかったからなんとも言えないが。

「僕はキヨウスケが合格だと伝えなくてはいけないから二人で訓練をしておいとくれ。」

「わかった。というかクロノ、よくわかったな。オーケーだって。クロノがフツと笑みを浮かべる。どうしたというのだろうか？

「君は考えが表情にしやすい。」

それだけというとクロノは訓練室をさっぴていった。というか、そん

なにでやすいのか？顔に。

おもわず自分の顔をぺたぺたと触ってしまっ。

「あ、たしかにでやすいの。」

なのはの笑みになんとも言い難い気分になった。

「そこまでか…」

「にやはは…」

「わらうなあー！」

なのはの頭を掴んで乱暴に撫で回す。なのはの頭が手の動きにあわせてグラングランしているのがポイントだ。

「はうゝ目ーがまわーるのー」

なのはも俺が怒っていないのをわかっているからか笑いながら撫で回されている。

「キョウスケくん…回しすぎなの…」

「わ、悪い…」

なのはが目を回したので撫でるのを止めたのだが5分たってもまだ気持ち悪いようだ。

「あとでディバインバスターのバリエーションを受けてもらっの…」

「……………俺の寿命もここまでか…」

わりと深刻に呟く。魔力ダメージ、便利だけど痛いんだぞ？

S i d e カナエ

「兄様、到着しました。」

「ん、じゃあ、管理局の方に連絡入れてトップの抹殺：もとい、捕縛、次善で殺害の許可をとりましょか！」

「そうですね。抹殺：いえ、捕縛の準備をしておきます。」

「なんだか相手の組織の結末が見えたような気がするが気にしてはいけない。それに、いくら能力がチートだからといって100%しかない。というわけではない。」

「あの、カナエ執務官……」

背後から声。今回の捕縛戦は俺達だけじゃない。管理局も俺達ならやれると思ったのか結構な戦力を俺に貸してくれた。邪魔なだけだが……まあ、いいだろう。

「えーと……貴方は？」

「私はティード・ランスターであります。」

ランスター……？ティアナの兄か……死ぬんだっけか？

「じゃあランスターさん、なんのようですか？」

「……………合流した隊員数名が勝手な判断で突入したので私に追いかける許可を……」

……… 久々にイラッてした。どうせ指揮官の俺が餓鬼だからとか
そんな理由だろう。

「全員突入準備。包囲するつもりだったんだが：余計なことを。」
キャリアスロウをファルシオン形態で構え防護壁に向かう。物資
搬入のための扉、力ずくで開けられないようにするために厚くした
のだろう。

「いけるよな？ キャリースロウ。」

『当然！ 主よ：遠慮なく斬ってください。』

キャリアスロウも遠慮なくと言っているので思い切りよくやろう。

「ハアッ！」

ズンッ……鈍い音をたてて扉が斜めに切れた。

「ハイエンド：チャージ開始。」

『了解です。カナエ様。』

俺は啞然とする局の武装隊の前でキャリアスロウを天に掲げる。

「突入！」

開いた扉に向かって声高々に宣言する。

「お……… おおおお！」

作戦開始っ！

S i d e なのは

海鳴公園海上。

「ジュエルシードを賭けて一対一の勝負。フェイトちゃん、それでいいよね？」

レイジングハートの調子も私自身の調子も好調。フェイトちゃんも前に比べて冷静になっている。

「うん。それでいい、母さんもそうしろって言ってた。私が…」
「っ!？」

いなくなつた!？ううん、これは…

「勝つつ!」

『Flash move!』

後ろに回ってきたフェイトちゃんと距離をとる。にしてもこの前より速いの…

「私も負けられないの…そして、お話を聞かせて。」

レイジングハートを構える。今からやることは高速戦が得意なフェイトちゃんだからこそ有効な技。心ちゃんは相手が速いならこうしろという作戦をくれていた。

『Sonic move!』

フェイトちゃんの姿が掻き消えるくらいの速さでフェイトちゃんが動いた。でも…

『Air bomb.』

その場で回転しながらレイジングハートを回す。数十の桃色の光

の球が私の周りで停滞した。

「っ！？機雷みたいにしてみたんだね…」

フェイトちゃんは動きを止めて私から距離を取った。

「でも、それだと君も動けない。」

『Thunder…』

「させないっ！デイベイン！」

『Buster!』

私の魔法が先に発動してフェイトちゃんに向かう。でも、それを見届けるより先に私は次の攻撃を仕掛ける。

「後ろだ…えっ!？」

フェイトちゃんが後ろに現れたと同時に私も背後を向こうと動く。フェイトちゃんの姿は確認していないけど…

「スターライト…」

振り向きながらのチャージ。私が振り向き終わった時、フェイトちゃんは…

「えっ!？ちよつと…それは…」

私が私の背後に仕掛けていたバインドに捕まっていた。

「ブレイカアアアアー!!」

「きやあああああつ!？」

フェイトちゃんは私に近づこうとしていたのではゼロ距離で私のスターライトブレイカーを受けて海に落ちていった。

S i d e カナエ

「さあ、観念するんだな。」

俺は武装局員数名と一緒に組織の首領と思われる男にキャリアスロウを向けていた。

「お前みたいなガキが隊長か？」

男は魔導師だったようでこちらにストレージデバイスを向けていた。

「そうだな。指揮権は俺にある。」

俺がそういった途端男は嫌な笑みを浮かべた。

男は俺の周りに居る局員数名を見てさらに笑みを深めた。

「残念だったな。ガキが隊長で…おい！反撃だっ！」

バンツと勢いよく背後のドアが開く。

「兄様、全員捕縛完了です。」

背後のドアから現れたのは心一人。他の誰かが現れる気配はなかった。

「で？反撃は？」

俺は軽く笑みを浮かべて男を見る。

もちろん、反撃されることはわかっていたので心に先に押さえておいてもらったのだ。だから、もう誰も俺を止めることはできない。

「ク…ツソがーっ！」

叫びと共にデバイスに収束する魔力。恐らく砲撃魔法であろうそれを…

「遅いよ…キャリアスロウ第2形態！」

セカンドモード

『了解。』

キャリースロウをファルシオン型に変形させ男に近づく。

「フォトン…」

男のデバイスから光が溢れるが…部屋内という狭い空間では砲撃より接近戦のほうが速い。俺は既にキャリースロウを下段から逆袈裟に男に向かって振っている。

「おっと、手が滑った。」

最初に聞こえた音はガキンという金属同士が触れる音。次に聞こえたのが…

「ぐ…あああああ!!??」

ズブリと、肉を断つ音だ。

カラン、男の持っていたデバイスが真つ二つにわかれて軽い音で地面に落ちる。そして、ズシャツと男の両腕が地面に落ちた。

「すみません。ミスりました。…ちなみに今回の作戦、貴方達の反撃が怖かったので治療が可能な魔導師はとも後ろに居るので治療は諦めてください。」

にこやかに言ってみる。そして俺が言いたいことはまだ残っているのだ。

「ともかく、これで終わりです。貴方みたいなのが束になっても俺には敵わないですし…さ、連れて行きましょうか。」

「ふ…ふざけるなあああ!!!!」

両腕のない男が無防備に体当たりを仕掛けてくる。

「おっと。」

俺は軽くそれを避ける。と男はそのままの勢いで部屋を出て行った。

「カナエ執務官！！追いましょう！！」

ティード・ランスターの叫びと共に地面が揺れ始めた。

「兄様…どうやら皆さん、自爆して我々を共に屠る気そうですね。」

無表情に…ただし、俺にはテキトーに言っているようにしか見えない顔で心が報告した。

「な！？」

「どうするんだ！？」

慌て始める武装隊の面々。ティードは比較的に見れば落ち着いているようだ…

「ふむ、生き埋めは嫌ですね。皆さん、脱出しましょう。ハイエンド、チャージ準備オーケー？」

「はい。準備完了です。」

俺は部屋の壁に向けてハイエンドを構える。

「我が行く手を遮るものに」

『鉄槌を』

「この世界の真理は」

『死へと繋がる。』

詠唱と同時にハイエンドに暴力的な灰色の魔力が収束する。

「e m e t h
e e t t h
? ? ? ?
? ? ? ?」

俺とハイエンドの言葉でハイエンドから魔力が放たれる。

「さて、まあ…脱出用の大穴も開きましたし…全員、脱出してください。」

白々しいかもしれないが言うしかない。というか白々しいのは自分でも理解しているので皆さんその目はやめてください。

ゴゴゴと音を起てて崩れていく建物から俺達局員は脱出した。

さて、俺は今回本局に呼ばれるんだろうなあ…

S i d e キョウスケ

俺達は今、アースラの医務室にいる。

「……………フェイトは起きないのか？」

なのはとフェイトの闘いはなのはの勝ちだったのだが…

「うう……………フェイトちゃん…おはなしい…」

「おい、コラなのは。お前は自重しろ。」

言ったもののなのはは未だに唸っている。

「なのは、君は全力戦闘だからといって手加減無しの一撃を零距离で撃って相手の心配を…」

「え？でも、心ちゃんがやるなら徹底的につて…」

「心ちゃんのせいだよ…」

変な所で原作ブレイクする奴らだなあ…

「あ、あの子か…」

クロノも思わず苦笑いを浮かべた。しかし、俺は心ちゃんに一つ聞いたことがあるのでさらなる恐怖を知っている。

「純粹な殺しあいになれば私は兄様の足元にも及びません。」

つまり、本気のカナエは俺達では手も足も出ないということにな
ってしまう。

まあ、その後

「とはいえ、兄様がキョウスケさんに本気を出すときは私たちが貴
方たち《・・》の敵になるときでしょうから、安心してください。」
なんて言っていたし、まず見ることはないだろう。

「とりあえず。これから僕たちはプレシア・テストロッサの逮捕の
準備を行うから、それまでにフェイトが起きるなら連絡してくれ。
く・れ・ぐ・れ・もキョウスケは勝手な動きをしないでくれよ？」
なんかクロノにでっかい釘を刺されたような気がする。

そしてそれは当たっていた。上手く、プレシアを逃がせないかと
考えていたんだけど…

「というか、あれ？なんでプレシアの逮捕？場所わかってるのか？」
確かプレシアの居場所は次元跳躍魔法を使ってわかったはずなの
に…

「なにか魔法を使ったんじゃないのかな？」

なのはがピヨコンとアホ毛を揺らす。というかなのは、自分も
魔導師なのにそんな魔法はないって気付かないのか？

「なのは…そんな魔法があれば僕たちはフェイトを捕まえるのに苦
労はしていないんじゃないのかな？」

「あ…居たの？ユーノくん…？」

「ヒドッ！？なのはひどいよっ！キョウスケもそう思わないか！？」

必死になのはの肩から声をかけてくる動物ユーノ。しかし…まあ…

「ごめん。居たんだ、ユーノ…」

「なっ!？」

がつくり地面に膝を着けるユーノ。いや、膝ってどこ？って感じだけ。

そうして、たった数時間で準備が終わったようでクロノから俺に時の庭園への突入作戦に参加するかどうかという質問が来た。

第8話 「それぞれの決戦」(後書き)

キヨウスケ「クロノって強かったんだな」…って誰もいない!？くそ…目立ったのがいけなかったのか!？…あれ書置き?次回第9話はすぐに投稿する?…あ、だからダレもないのか。」

第9話 決着く永遠の炎く（前書き）

連続投稿です。そして、自分ではスランプだと思っているのですが
…この状態で進んで大丈夫なのだろうか？心配です。…え？元から
駄文？しかも亀？

その通りです。申し訳ございません…！！

第9話 決着〜永遠の炎〜

S i d e キヨウスケ

「突入するぞ！」

俺の号令でアースラの武装隊数人が時の庭園に入っていく。しかし、何かがおかしい。

あまりに、静か過ぎる？

S i d e プレシア

私が、フェイトに頼んでジュエルシード集めを始めてから暫くの時間が経った。でも、もう体は間に合わない。なら、せめて、フェイトに罪はなくなるように、一芝居しなくてはいけない。

「ふう、全く…何で私はこうなるまで病院に行かなかったのかしら？」

確か、私はしなくてはいけないことが

「何で私は病院にいなかったのかしら。ま、どうでもいいわ。」
私は私の病を治すために一人娘のフェイトを利用した。そういう

設定が必要なのだ。

「ちようど、フェイトもあちらにいるようだし、侵入して来たら始めましようか。」

ああ、そうだ。アリシアの居たところをコワサナクチャ。

S i d e カナエ

「…はあ、あの時の動きは早計だったか…いや、キョウスケが居ながら気付けなかった俺が馬鹿なだけか…」

俺は碎けたケースと内側にあった脳みそを見てため息をついた。

「根回しが間に合えばいいけど…間に合わなかったら…素直に怨まれよう。」

「兄様が怨まれる必要はありません。私が居ます…なんとか、なんとかハッピーエンドにしてみせます。」

通信していた心から頼もしい声が入る。

俺は新しい脳みそをケースの中にいれハマーンの杖でガラスケースを修復した。

「さて、あとは高町なのは、フェイト・テストロッサ、アリシア、心、キョウスケ次第か…」

自分は手をだせない。アリシアに手を出すなといわれたから。だけど、アリシアが俺の手が必要といった時は全力で手を貸そう。

「さあ、未来への布石を用意しよう。」

まずはギル・グレアムからだ。

S i d e なのは

「デイベイン…バスターツ！」

迫り来るゴーレムを破壊していく。時の庭園が一度大きく揺れたあと、ゴーレムがいつぱいでてきた。

「ふふ…ふふふ…あーっはっはっはっはっ！滑稽、滑稽…滑稽だわ！」

フェイトちゃんのお母さんの声が聞こえる。突然、どうしたのだろう。

「あー、アースラの皆さん、聞こえるかしら？今、そちらにフェイト…人形がいるわよね？起きているかしら？………まあ、起きていなくても変わらないわ。貴方はアリシアの代わり、人形よ。クローン技術によって生み出された。私の娘ではないわ。」

「そん…な…！？フェイトちゃんは…」

今のを聞いてしまったのだろうか？

「ああ、そういえば…貴方の使い魔はすでにこの世にいないわ。」

S i d e キヨウスケ

「ああ、そういえば…貴方の使い魔はすでにこの世にいないわ。」
その言葉を聞いた瞬間、自分達を取り返しのつかないことをしたのだと気付いた。

プレシアに挑んで大怪我したアルフは誰が助けた？
アリサ・バニングスだ。そのアリサは、どこにいる？

「クソッ！」

全ては、手遅れだ。

『ご主人様…！敵です！』

見ると正面から3体のゴーレムが近づいていた。

「ブレードトンファーを！」

ネクロが俺の言葉に応えてブレードトンファーを出現させる。

「爆砕一閃！」

ブレードトンファーを使いゴーレムを砕いて倒していく。

しかし…

「くっ、こんな小さい攻撃じゃあ倒しきれないのか…退けえっ！」
自動修復するゴーレムに更に苛烈に攻撃をするが再生速度が異常だ。これではまるでロストロギア…！？

「まさか、ジュエルシード…なのか？」

そうなると、一気にジュエルシードを封印状態までもっていきけるくらいの威力がいる。

「デイベインバスター…」

声と共に銀色に輝く魔力光がゴーレムを消し飛ばした。

「…銀って事は…心ちゃんか…」

近くに俺が居るのに何の躊躇いもない一撃に思わず感心してしまう。

「チツ…」

「えっ！？舌打ちっ！？当てる気だったの！？」

心ちゃんは暫く何かを思案した後こちらを見て

「冗談ですよ。」 晴れやかな笑みを浮かべた。

「なのはちゃんに連絡を、プレシアを発見したら貴方に連絡するよ
うにと。」

「わかった。って、オイ！心ちゃんは…！」

気付いたときには既に奥に進んでいった心ちゃん。仕方ないか…

「なのは、ちょっとお願いがあるんだけど…」

話しながら心ちゃんを追う。ジュエルシードを使ったゴーレムが
相手なのだ。心ちゃんでも心配になる。

S i d e なのは

フェイトちゃんのお母さんの所へ向かっていく。キョウスケくん
が見つけたら教えてって言っていたけど…

『Master!』

レイジングハートの声で初めて前にゴーレムがいることに気付い
た。

「っ！デイベイン…」

『Buster!』

デイベインバスターがゴーレムを撃ち抜いた。でも…後ろにも居る！！

振り向いてプロテクションをしようとして、意味がなくなった。

「なのは！！」

後ろから近づいて来ていたゴーレムの拳を緑色の膜が防いだからだ。

「あ、ありがとう！ユーノくん…ちょっと、多すぎるね…」

管理局の人達を合わせてもまだ相手のゴーレムの方が多い。

「なのは、上っ！」

「デイベイン」

『Buster!』

なんで、こんなにいっぱい…ってあれ？デイベインバスターが天井を貫いて…？

バキッ！

「天井が…抜ける？」

「マズイ…逃げよう、なのは！」

逃げようとして…

「うっう」

動けなくなつた管理局の人を見つけた。

「あ…」

タスケナクチャ。

体が動く。

（速く…速くっ！）

「ゼロシフトッ！！」

天井が崩れた。

S i d e フェイト

「ねえ、フェイト。」

声がする。アルフ…？ううん、違う。でも、なんだろう懐かしい感じがする。

「お母さんを助けなくていいの？」

（でも、母さんは私のことを…）

「…諦めるんだ。フェイトが諦めないなら、私たちも助けるのを手伝うつもりだったのに。」

（え？）

「私は諦めた。でも…フェイトのことを助けてあげたいから、私は…」

（私は…私は…諦めたくない。諦めたくないんだ。）

「声を出して。求めれば、私はそこにいるし、お兄さんだって、キウスケさんだって、なのはちゃんだっている。」

「…私は…私は…助けたい。母さんを…」

体に力をいれる。体は動く、目だって開く。体が痛いなんて全然平気だ。あの子の魔法の方が痛かった。

「じゃあ、行こう。例えば、どんな結果になろうとも…助けようとしたことに意味はあると思うから。」

「待つて！あなたは…」

ベッドから起き上がった見えたのは金……まさか…

「いくわよ、バルディツシュバスター。」

「All right my mother。」

金が跳ねる。

私は足に力を入れてベッドから立ち上がりバルディツシュに近づく。

「私たちも、行こう。……バルディツシュ…」

「Yes, Let's go!」

「ごめんね。もう、私は迷わないから。」

輝の入ったバルディツシュに魔力を込めて輝を直す。

「待つて…母さん」

Side キヨウスケ

「大丈夫か？なのは…」

間一髪で天井がなのはに降り注ぐ前に救うことが出来た。

「あ、ありがとう…キヨウスケくん…っ！あの人は!？」

なのはを抱き抱えている状態から離してなのはの後方を指差す。

「こんばんは、なのはちゃん。」

「え？心ちゃん!？」

心ちゃんが倒れていた局員をラストの鞭で助けていた。

（助けた…んたよな？）

首が絞まっているよう見えるが…顔も青くなってるし。

「こ、心ちゃん！？早く離してあげてっ！…！」

なのはにも同じように見えていたらしい。なのはは焦って心ちゃんに言うが心ちゃんのはのんびりとしていた。

「ああ、そうですね。どうぞ」

「ぐぎゅっ！？」

「うおっ！？」

上から心ちゃん、局員、俺である。ちなみに心ちゃんがラストで局員を俺に投げたという状況。

「いくらなんでも酷くないか？」

「私が丁寧に助けるのは兄様達だけです。」

思わず苦笑いを浮かべてしまう。相変わらずカナエ至上主義のようだがカナエの態度が変わったからか他の数人にもちゃんと気を配るようになってるようだ。

「な、なんで心ちゃんがここに？」

確かに、カナエに呼ばれてからまだ数時間しか経っていない。

「…兄様の命令ですから。あと、管理局の……なんだったでしょう？」

カナエ>>>（越えられない壁）>>>友人>>（越えられない）>>その他というわかりやすい図が頭に浮かんだ。というか、俺は友人に入ってるよな…？

「お兄さん…？」

「そう呼んでいいのは私だけなんだからあつ!!!」

『Plasma Smasher!』

なのはがそう言った瞬間、金の魔力光と砲撃魔法がなのはに向かつて飛んできた。

「ラウンドシールド!!」

慌ててなのはと攻撃の射線に割り込みラウンドシールドを張る。

…ネクロの能力に頼りすぎて普通の魔法が雑になっていたのでクロノに教えてもらったのだ。

そして金色の閃光がなのはに突っ込んでくる。わかっていたとは思っけどアリシアちゃんだ。なのははビックリして反応できてないし。アリシアちゃんが至近距離でなのはを凄まじく睨んでいるし。

「フエ…フェイトちゃん!？」

「姉ですっ!」

「えっ!? ええっ!? じゃ、じゃあフェイトちゃんのお母さんは…」

ニヤリとアリシアちゃんが笑みを浮かべる。

「無駄骨ですね。ふふ、いいザマね。私の妹に手を出すからよ。フェイトはお兄さんの次くらいに大切なんだから。兄や姉は妹や弟を護るために居るんだもの、それが…例えば親からであっても。」

アリシアちゃんが言いながら心ちゃんを見ていたのは多分、心ちゃんから聞いたのだろう。詳しくは教えていないのだろうがそれでも、カナエが心ちゃんを親から護ったことは知っているはずだ。

でも、自分の親にいいザマって…しかも自分を生き返らせるための結果だったのに…

「さて、心ちゃん。お母さんを探しましょう。…ム力つくけど、フェイトがお母さんを助けたいのなら手を貸さない理由はないから。」

「そうですね。…あ、そういえば白眼を使えばすぐ見つかるんじゃないや

…」

「へ？白眼って…あの？」

俺の問いを無視して心ちゃんが目を閉じる。

「見つけた…」

そして次に目を開けたときには目の周りの血管が浮き出ていて、まさに某忍者漫画の白眼だった。というか心ちゃん的能力っていったい？

「アリシアちゃん、行きますよ！！」

心ちゃんがアリシアに触れるとシュンという音を出して姿が掻き消えた。

「置いて行かれたの…」

「あ…」

2人してその場で固まっていたのは誰も責めれないと思う。

S i d e フェイト

「速く…もつと速く…！！」

私は全速力で母さんのところに向かっていているんだけど…なんだろう…嫌な予感がする。

「君は…！？待つんだ！」

後ろから黒いバリアジャケットの男の子が追いかけてくる。確か、私とあの子の戦いに割って入った人だ。

「母さんのところに行くの！！邪魔しないで！！」

私は振り向きバルディッシュを黒い男の子に向ける。

「違う！そうじゃない！！僕も連れて行ってくれ！！…確認したいことがあるんだ。」

「…っ！勝手にして。私は速く行かなくちゃいけない。嫌な予感がするんだ。」

私はそのまま先に母さんが居る部屋に向かっていく。すると、男の子も私に遅れながらもついてきていた。

「ここの動力炉は、プレシアが居るところにあるのか？」

後ろから聞こえてくる声を聞いてさらに嫌な予感が増す。

「ううん、もつと奥。多分中心部だと思う…」

なんだ？この嫌な予感は…気持ち悪くなるくらいの…

「やっぱり、ジュエルシードのエネルギーか…それに、やっぱり…誰か居る。」

その言葉に私の思考は一瞬止まってしまった。誰か？母さん以外にこの時の庭園にいるなんてことは…男の子は管理局の人みたいだから誰かっていうのは管理局の人たち以外だろう。

あの人かも知れない、というのも考えたが。私の勘は違うといっている。

そうして、母さんのところに向かっていると…

「エネルギーが増大！？しまった…！！」

Side 心

私たちがプレシアのところにつくと見知らぬ男が両刃剣を持って佇んでいた。

「　　アリ…貴方たち、ダレ？」

プレシアが虚ろな目でアリシアに問う。その姿は、兄様の予想通りで…。

「イレギュラーは貴方ですか…管理局執務官、月村　　心です。抵抗しなければ命は助けてあげましょう…！！」

『Divine buster!』

ラストの分身が私の目の前で宙に浮かび銀色の閃光を放つ。

「管理局…正義とは名ばかりの悪の集団の集まりが…！！！」

男は避けるそぶりすら見せずに私に向かって歩いてきて、銀閃に触れた。瞬間、ゾクリと背筋が凍った。

「ガハッ！！？な、なんで…？」

なにが起きたか理解できない。なぜ、男は無傷で、私が倒れて…？

「心ちゃん！？バルディツシュ・バス…」

アリシアちゃんがそこまで言うて倒れる。体に斜めの赤い切り傷につくって。

「さて、これで…」

男が剣を上に掲げ私のそばに立つ。

（あ、駄目だ…死ぬ。兄様…！！）

回避の方法が思いつかない。こんな痛み…堪えないわけではないけど・・・それとこれでは話が別。思考が回らない。

ガキン
！

男が振り下ろした剣は、私の最も愛する人が刀で受け止めていた。

「てめえ、命の覚悟はいいな？」

私の意識はそこまでで、暗転した。

俺の妹に剣を振り下ろそうとしていた男を睨む。ラストに仕掛けておいた仕掛けが役に立ったのはいいが…

「てめえ、俺達と同じ転生者だろ？なぜこんな真似を…っ！？」
突然、受け止めていたキャリアスロウごと俺は弾かれる。

「アクセラレータ一方通行…？いや、なにか…？」
知っているものと何かが違うと思いながらも第三形態のキャリアスロウを構える。

「フ…管理局のしてきたことを知らないわけじゃないだろう？まあ、いい。同じ転生者のよしみだ。見逃してやる。生きて帰れるかどうかは…わからんがな…！」

男が何かを投げた。俺はそれを何かと認識する前にアリシアと心と一緒にワープでこの場から消えた。

Side フェイト

揺れが収まったあと、目を開けると…

「え？」

時の庭園の半分近くが無くなっていた。ジュエルシードが発動したのは感じた魔力でわかった。でも…

「母さん…？」

そんなことはどうでもよくて。

「く、僕達より前に言っていた隊員たちはほぼ全滅か…キョウスケとなのはは無事か……え？そうか、ユーノが…そうか…」

ダレのせい？これは、そういえば、さっき誰かが居るって言うってた？じゃあ、そいつのせいかな。

「…ねえ？」

「どうした？」

彼の方でも何かあったらしい、けど。私は聞かなくちゃいけないことがある。

「さっき誰かが居るって言ったよね？それでこれは、そいつの仕業？」

「ああ、多分…そうだ。」

「そっか、なら…」

「管理局に入れば。捕まえられるかな？」

例え何年かかるのが、私のこの復讐の火を灯し続けよう。

「心ちゃんのお兄さんが上の方に顔が利くらしくてな。君が望めば

すぐにも管理局は君を受け入れよう。今回の事件は既に殆ど調べはついているんだ。だから君は罪に問われない。」

永遠に燃える私の炎。開放されるその瞬間まで静かに閉じ込めておこう。

だから、今は…

目の前が黒く染まった。

第9話 決着ゝ永遠の炎ゝ（後書き）

カナエ「・・・」

心「・・・」

キヨウスケ「・・・え？なにこの終わり方。ハッピーエンドは？」

カナエ「次回。最終話「なまえをよんで」次回で無印は終了みたいだね。」

イリスヴィア「ま、作者としてはStriker，Sが書きたかったらしいからちよつと気分が急いたみたいだよ？」

なのは「出番はーーーー！！！！？？？」

なまえをよんで（前書き）

えー…遅くなった理由はPCを修理に出していたからです。

本当にすみません………というか、待っていてくれた人いるのかな…

（泣）

なまえをよんで

Side なのは

私たちは今、黒い服を着てアースラの艦のブリッジに居た。

今回の作戦で犠牲になった隊員や協力者の簡略式ではあるけれど、しっかりとした葬儀だ。

「…なのは…その、ユーノは…」

クロノくんが俯いて私に近づいて来た。ユーノくんは私たちを助けてあの次元震に巻き込まれた。多分、私が落ち込んでいると思っているんだと思う。

「悲しいけど…大丈夫だよクロノくん。…一人になったら泣いちゃうかもしれないけど…それでも私は立ち止まらない。だって、お母さんが死んじゃったフェイトちゃんも前に進んでるんだもん。ならフェイトちゃんと友達になるのを手伝おうとしてくれたユーノくんの思いも無駄にしたくない。」

そうして俯いていたクロノくんの顔が私を見る。クロノくんは驚いたような表情を浮かべている。

「例え…どんな、形でもフェイトちゃんと友達になって…原因になった人を逮捕する。…いい？フェイトちゃん？」

「あ……………君は、それでいいの？」

背後に立っていたフェイトちゃんに声をかけるとフェイトちゃんは僅かに私を訝しむような顔をしていた。

「私は、今でも悲しそうに笑うフェイトちゃんの友達になりたいの。」

「私は嫌。母さんを殺した犯人を捕まえるのに余計なものはいらない。」

フェイトちゃんが拒否するのは予想していたので私は苦笑いを浮かべるだけだ。

「あのねえ…フェイト…」

呆れた声で話しかけて来たのはフェイトちゃんと瓜二つの顔を持つ女の子、アリシア・テストロッサちゃん。フェイトちゃんのお姉さん。

「復讐するのはいいけど、普通に修業するだけじゃあいつには勝てないわよ。アレは強すぎるわ。」

たしか、アリシアちゃんと心ちゃん、そしてそのお兄さんが同時に挑んだらしいけど結果は撤退するのが限界だったらしい。

心ちゃんの強さは知っているしキョウスケくんは心ちゃんのお兄さんの实力を知っているようで“ありえない”らしい。

「一緒に強くなればいいじゃない。幸い強さは一緒くらいなんだし…いい感じだと思うけど。」

アリシアちゃんの言うとおり、強くなるにはライバルと友達がいるってお父さんが言っていた。

「私と一緒に強くなろうっ！」

私がそう言うとフェイトちゃんは少し考えて視線を彷徨せた。

「……………これからしばらく、私はミッドに行って訓練する。…また

会ったときに君が私より強いなら…友達になろう。」

そういったフェイトちゃんは真剣な表情で友達になるうつつという表情じゃないけど…今はそれでもいい。

「…フェイト、私はお母さんを助けられなかった。どう…思う?」

アリシアちゃんは真っ直ぐフェイトちゃんを見る。

「なんでアリシアが生きているのかはわからない。アリシアが生きているなら母さんはあんなことを止めていると思う。…私はアリシアを…怨んでいる…」

フェイトちゃんの答えを聞いてアリシアちゃんは優しく微笑んだ。

「フェイト、それでいい。あなたは私を怨んで、怨んで…でも、それは私だけに向けなさい。私たちのお兄さんに向けたら…」

優しい表情から一転して寒気にする怖い顔。その表情にフェイトちゃんは一步後ろに足を退いていた。

「殺すから。」

そう言い残してアリシアちゃんは背を向けて手を振って去っていった。

クロノくんやリンディさんはアリシアちゃんがなぜ生きているのかを調べることは出来ないといっていたの。なにやら色々あるらしい。

心ちゃんは知っているようだったけれどいつの間にかいなくなっ

ていた。

「なのは。」

いつの間にかキヨウスケくんが横に来ていたらしい。

「キヨウスケくん？」

キヨウスケくんは少し緊張した面持ちで私の前に立っていた。私が疑問に思うとキヨウスケくんは僅かに躊躇った後口を開いた。

「俺をなのはの家に置いてくれないか？」

「ふえっ!？」

キヨウスケくんが…私の家に…？駄目だ。絶対に…絶対に私が一瞬思い付いた理由じゃないのに顔が赤くなるのを止められない。というか、私はこんな状況で何を考えて…いや、待つて…私がキヨウスケくんを好きみたいじゃ…好き…なの？うん、好きだけど…え？ドキドキしてる好き!？」

「あ…あう…キヨウスケくん。なんで？」

恥ずかしいので少し俯き目で聞いてしまう。うう…顔がちゃんと見れないよ…

「なのはのお父さんやお兄さんに修業をつけてもらいたいんだ。それも、なるべく多く。」

わかってたの…でも、勘違いしてすごく恥ずかしいのっ！

「うう…わかったの。聞いてみる。」

キヨウスケくんの馬鹿あ…

今回の事件は被害が多すぎた…ユーノやアルフだけじゃなくても
しかしたら死ななくて良かった局員も死んでるかもしれない。……
…それをカナエに言ったら顔を青ざめさせていたけど…なんだろう？

「もつと強く……この世界はアニメじゃない…もしかしたらなのは
もフェイトも死ぬかもしれないから……」

そのためには苦手な接近戦を鍛える必要もある。それなら高町家
が一番なはずだ。

「ねえ、君は前に私を知っているような事を言ってたよね？なんで
？」

赤くなりながら顔を俯かせているなのは横からフェイトが話し
かけてきた。いつのことは忘れたが確かに言っていたかもしれない。
い。

「俺の友達がレアスキル持ちだね。薄く未来が見えるらしくて今回
の事件も断片的に見えていたらしい。」

という設定を通してほしいと言っていたのをカナエは言っていた。

「そう…その人は強い？」

「……あいつが言うには俺と同じくらいの強さらしいが…」

前やったときはデバイス無しだったしな………というか最初に会
った時より凄まじく強くなっているんだが…成長速度が化け物じみ
てる…

「そう…ミッドにいるんだよね？」

「……いるけど…というかアリシアが“お兄さん”って呼んでる

奴だぞ。」

それを聞いたのかなのはも俺の顔を見た。

「そういえばどういふ人か知らないの。」

何て言えればいいんだ？

「うーん……一言でいうのは難しいな。見た目は女みたいだけれど……中身は……あれ？仲間思いでいいのか？」

誰かのために戦う。それは意外と難しいと思う。あいつは仲間の範囲が狭いがそれはあいつの。護れる範囲とイコールともいえる。

「アリシアのお兄さんって心のお兄さんでもあるんだよね？」
フェイトの問いに俺は頷く。

「じゃあ、私に紹介して。強くなるためにも。」
……それはマズイ。どうするやら……

「……無理かな。あいつは前線にいるようだから会うことは出来ないと思う。」

そう、あいつは今も次に備えているはずだ。だから……

S i d e カナエ

「お兄ちゃん！心ちゃんがっ！また電子レンジ爆破したあっ！」

「お、お兄さんっ！こっちの再生遅滞プログラムバグってるっ！」
「兄様あああ！私は…私はいらない子なんですっ！兄様の為の料理も出来ないなんてっ！」

妹たち大暴走。最近俺が沈んでいたから元気づけようとしてくれているのはわかるんだけど…何て言うか。空回りしてる。

「ははは。アンタも大変ね。で？どうなの？証明できた？」
俺の隣にいるアリサだけが冷静だ。俺の考えている問題の証明をするために一緒になって考えてくれているのだ。

「うん。やっぱり、この世界はおかしい。もちろん、おかしいのは俺たち転生者なんだけれど。それにしたってこの1対1の法則はおかしいと思う。」

そう、俺と心は互いに転生者であることを皆（月村家とアリサ）に伝えた。もちろん驚かれたし“リリカルなのは”の話をした時、アリサはぶちギレた。ただし、それは俺が今までアリサたちに対してしていた無意識の遠慮についてだったし説教までされてしまった。でも、まあ最近の遠慮が少なくなっていたので軽めだったが。

全てを明かしてまで解きたかった問題。それは…

「アリシアの蘇生とアルフの死亡。ユーノの死亡と……………」
ちらりと、月村邸の庭で遊んでいる兄妹をみる。

「ティード・ランスターの生存。そして、フェニックス壊滅時に生存したティード除く、27名の管理局員と……」

「時の庭園で死亡したユーノ除く27名の管理局員。」

そう、これは多分。転生者にしかわからない問題だ。生存するはずない人間の生存。そして死亡するはずない人間の死亡。そしてこれは生存者を作った時点で発生する法則のようだ。フェニックスの構成員は全て死亡している。

偶然なら馬鹿げている。だが、偶然で終わらせるには……………無視できない。

「そして。奴は転生者じゃない。言動に僅かに惑わされたけど……………恐らく 選別者。」

神が転生者に課した試練とも言えるかもしれない。

そして、俺の解答は決まっている。それには皆に力を借りる必要がある。

「アリサ、アリシア、心、すずか……………俺を、助けてくれ。」
名前を呼んだ。

なまえをよんで（後書き）

カナエ「ええと…最終話？」

イリスヴィア「無印ね。」

なのは「え…？え…？」

イリスヴィア「次から本気出すww」

アリサ「フザケンナ」

カナエ「しかし、まあ…」

心「ザックリと이었습니다ね…？」

カナエ「まあ、無事終わって良かったじゃないか？」

イリスヴィア「ぶ…じ？」

ティード「あれ？俺の死亡って確かstriker、s6年前じゃ…」

カナエ「うん。まあ、それは機会があれば…？かな？では、次はA'sで会いましょう！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5152m/>

魔法少女リリカルなのは チート？当然だろう

2011年7月8日09時19分発行